

台渡里遺跡

(第39次調査)

— 公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2008

水戸市教育委員会

台渡里遺跡

(第 39 次調査)

— 公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

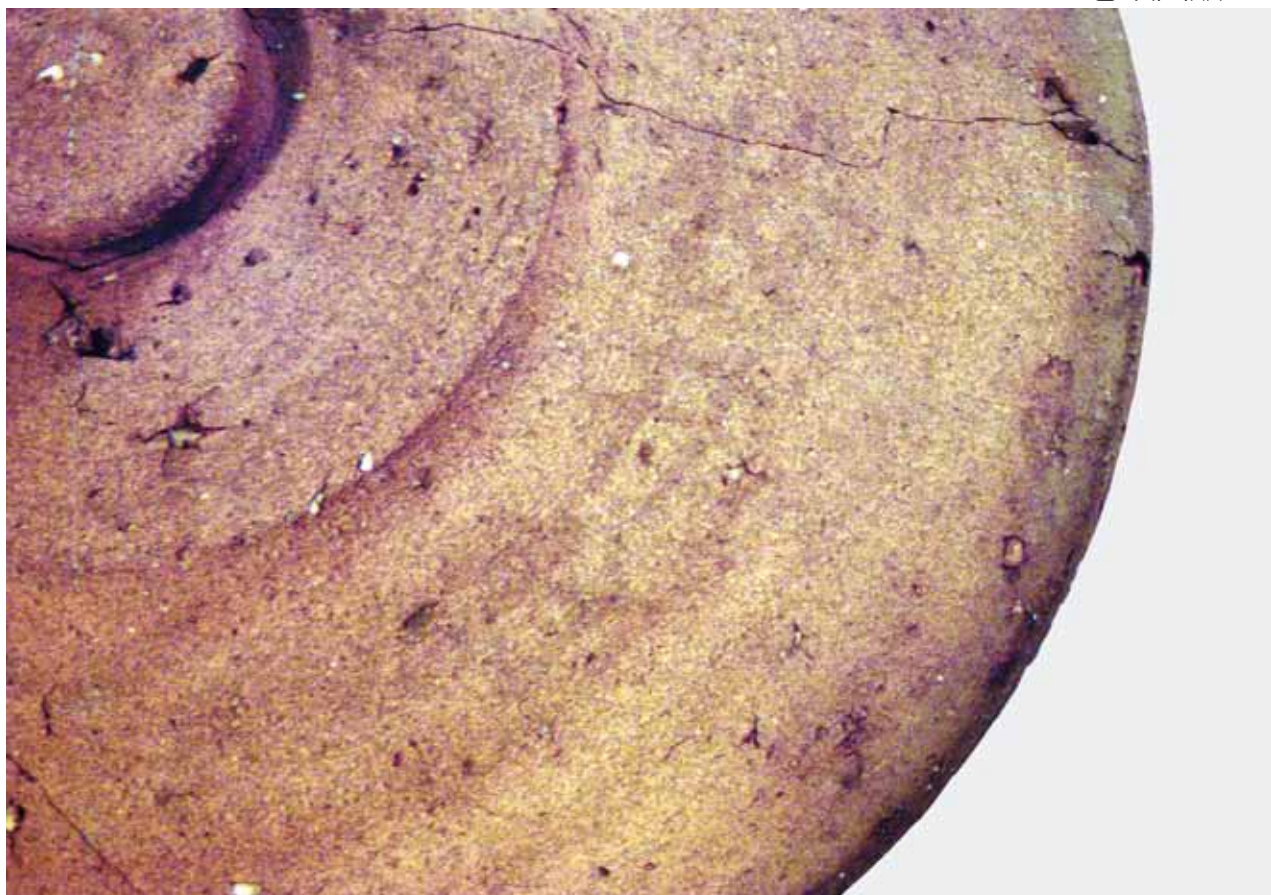
水戸市教育委員会



1区1号掘立柱建物布掘り土層断面



5区出土「郡厨」銘墨書土器赤外線写真



3区出土「枚井村カ」銘墨書土器赤外線写真



5区出土「仲寺カ」銘墨書土器赤外線写真

ごあいさつ

「台渡里遺跡」は、那須茶臼岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しております。

この「台渡里遺跡」の周辺には、古代常陸国那賀郡の郡衙周辺寺院である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や「愛宕山古墳」などの史跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化的遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に公共下水道管理設工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本調査により、那賀郡衙周辺寺院の造営時期にあたりとみられる竪穴住居跡群や那賀郡衙に関連するとみられる区画溝や礎石建物跡、中世の長者山城跡に関連する井戸跡が確認されるとともに、各種の遺物が出土し、本市の古代史・中世史研究はもとより、今後において埋蔵文化財を保護保存するうえでも貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました周辺住民の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課、水戸市史跡等整備検討専門委員の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 20 年 3 月

水戸市教育委員会

教育長 鯨岡 武

目次

巻頭図版 1, 2	
あいさつ 目次 例言 凡例	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	1
1-3 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
2-1 地理的環境	3
2-2 歴史的環境	3
2-3 台渡里遺跡における既往の調査	11
第3章 調査の方法と成果	15
3-1 調査の方法	15
3-2 基本土層	15
3-3 遺構	18
3-4 遺物	40
第4章 総括	56
4-1 土地利用の変遷	56
4-2 文字資料について	60
引用・参考文献	62
写真図版	
報告書抄録	

挿図・表目次

第1図 台渡里遺跡の位置	3	第18図 出土遺物(1)	42
第2図 台渡里遺跡と周辺の遺跡位置	4	第19図 出土遺物(2)	43
第3図 基本土層図	15	第20図 出土遺物(3)	44
第4図 調査区の位置	16	第21図 出土遺物(4)	45
第5図 調査区方眼図	17	第22図 出土遺物(5)	46
第6図 1区遺構図(1)	19	第23図 出土遺物(6)	47
第7図 1区遺構図(2)	20	第24図 台渡里遺跡第8次・第9次・ 第36次・第39次調査の遺構配置	58
第8図 1区遺構図(3)	21	第1表 台渡里遺跡と周辺遺跡一覧	5
第9図 2区遺構図(1)	24	第2表 台渡里遺跡群における既往の調査	12
第10図 2区遺構図(2)	25	第3表 ピット一覧	38
第11図 3区西側遺構図	26	第4表 出土土器属性一覧	48
第12図 3区東側遺構図	27	第5表 出土平瓦属性一覧	50
第13図 4区遺構図	29	第6表 出土熨斗瓦属性一覧	50
第14図 5区西側遺構図	31	第7表 出土石器・鉄製品属性一覧	50
第15図 5区東側遺構図(1)	33	第8表 土器・石器・鉄製品計量表	51
第16図 5区東側遺構図(2)	34	第9表 瓦計量表	55
第17図 6区遺構図	37		

図版目次

図版1	1区の遺構調査状況
図版2	2・3区の遺構調査状況
図版3	4・5区の遺構調査状況
図版4	5・6区の遺構調査状況
図版5	出土遺物(1)
図版6	出土遺物(2)
図版7	出土遺物(3)
図版8	出土遺物(4)

例 言

1. 本書は、水戸市に所在する台渡里遺跡（第 39 次調査）の発掘調査報告書である。
2. 調査は水戸市教育委員会が実施した。
3. 調査の概要は下記の通りである。

所在地 水戸市渡里町字前原 2812-1 地先～字宿屋敷 3011 地先
調査面積 157.2 m²
調査期間 平成 19 年 11 月 21 日～平成 20 年 1 月 18 日
調査担当 川口武彦（水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事）
調査支援 佐々木藤雄・大橋 生・市瀬俊一（東京航業研究所文化財調査室）
調査参加者 石崎寿子，黒須秀昭，中山忠雄，福原雅美，皆川幸子
4. 本書の執筆・編集は、佐々木・林 邦雄（東京航業研究所文化財調査室）・川口・渥美が行った。
5. 調査組織は下記のとおりである。

水戸市教育委員会教育長	鯨岡 武
水戸市教育委員会教育次長	小澤 邦夫
水戸市教育委員会文化振興課長	仲田 立
水戸市教育委員会文化振興課長補佐	中里 誠志郎

事務局

宮崎 賢司	水戸市教育委員会課文化財係長
関口 慶久	水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事
緑川 義規	水戸市教育委員会文化振興課文化財係主事
新垣 清貴	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
渥美 賢吾	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
木本 拳周	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です（敬称略・順不同）。

浅野啓介，青山俊明，荒井秀規，飯島一生，稲田健一，今尾文昭，岡本東三，大塚初重，
金田明大，川崎純徳，川尻秋生，瓦吹 堅，木本好信，黒澤彰哉，後藤道雄，斎藤弘道，坂井秀弥，
佐々木義則，清野孝之，関根唯充，高島英之，西口和彦，西村 康，馬場 基，日高 慎，
山路直充，山中敏史，山本 崇，山本典幸，横倉要次，渡辺晃宏
茨城県教育庁文化課，独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所，文化庁文化財部記念物課，
㈸三井考測

凡 例

1. 文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。

全体図 1/800 各区全体図 1/60 土器 1/3 土器拓影 1/3 瓦 1/4 石器 1/3
石製品 1/3 鉄製品 1/2
2. 遺構実測図中のレベルは海拔高，方位は座標北を示す。
3. 写真図版は原則として土器類 1/3，瓦 1/3，石器類 1/3，鉄製品 1/3 とした。
4. 遺物番号は本文，挿図，写真図版と一致する。

第1章 調査に至る経緯と経過

1-1 調査に至る経緯

文化財保護法第94条に基づき、平成19年4月12日付下工1第245号にて水戸市長加藤浩一（下水道工事第一事務所扱）からが茨城県教育委員会教育長（以下、「県教育委員会教育長」という。）あて、公共下水道工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知について」が水戸市教育委員会（以下、「市教委」という。）へと提出された。

開発予定地である水戸市道常磐222号線（渡里町字前原2812-1地先～字宿屋敷3011地先）は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「台渡里遺跡」の範囲に該当しており、平成6年に水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会が実施した都市計画道路3・6・30号線敷設に伴う台渡里遺跡の本発掘調査および平成8年に水戸市教育委員会が実施した共同住宅建設に伴う確認調査の際に、路線内を横切る南北方向の柵列が検出されていること、茨城県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準に照らし合わせた場合に原則Ⅲの「恒久的な工作物の設置により相当機関にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となる場合」に該当することから、工事着手前に市教委が発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる必要があるとの意見書を付して進達した。

意見書を受けて、県教育委員会教育長から平成19年5月2日付文第139号にて、工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので、工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨、勧告があった。

これを受けて、市教委は平成20年5月27日～5月28日にかけて試掘調査を行い、総延長242.0mのうち、埋蔵文化財が確認されなかった部分および沿線に面する住宅の玄関先と駐車場入り口部分等を除いた総計157.2（長さ185.0m×幅0.85m）㎡を調査範囲とすることを決定し、平成19年11月21日から本発掘調査を実施することとなった。（川口）

1-2 発掘作業の経過

発掘調査は平成19年11月21日から平成20年1月18日までの約2ヶ月間にわたって実施した。

先ず11月21日に6区に分けられた調査区の道路アスファルト舗装の裁断を行った後、5区東側と西側、6区において表土除去作業を開始した。翌22日より遺構確認作業に入り、検出された遺構の調査と5区西側の基本土層確認作業を実施した。12月7日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

8日より4区の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査を適宜進めた後、12日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

12日より3区東側と西側の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査を適宜進めた後、東側については15日、西側については18日に写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

18日午後より2区の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査を適宜進めた後、27日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

平成20年1月7日より1区の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査と基本土層確認作業を適宜進めた後、17日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

翌18日には、埋め戻した各調査区についてアスファルトによる仮舗装を実施し、周辺住民の通行に支障がないようにした上で発掘作業を完了した。

1-3 整理等作業の経過

整理作業は平成20年1月20日より2月20日までの約1ヶ月間にわたって実施した。

2月21日～2月28日には遺物の洗浄・注記・接合作業と並んで、写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。

3月1日～3月10日には遺構図面の修正・トレース、遺物の実測・トレース、遺物写真の撮影、図版作成、原稿執筆などの作業を行い、3月11日より3月15日にかけて報告書編集作業を実施した。

(林)

第 2 章 遺跡の位置と環境

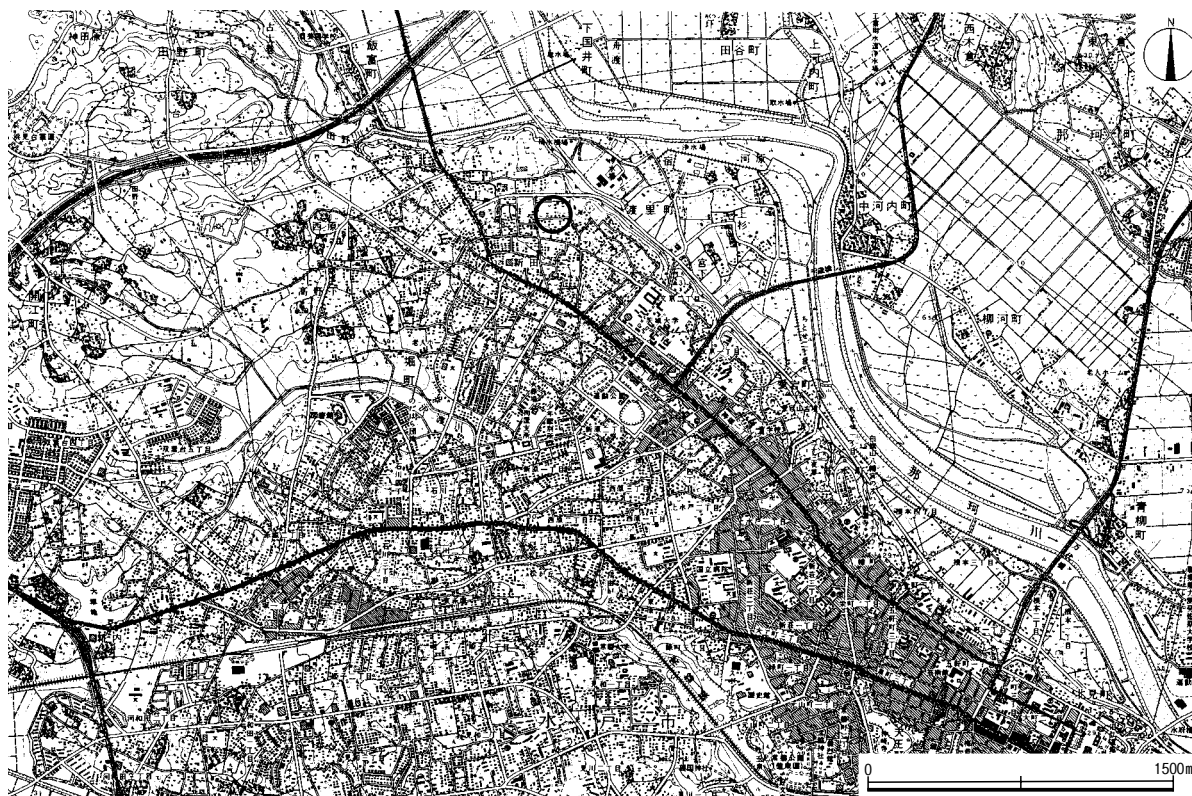
2-1 地理的環境

台渡里遺跡は、北緯 36 度 24 分 29 秒，東経 140 度 26 分 10 秒（世界測地系）の茨城県水戸市渡里町字前原 2812-1 ほかに所在する。

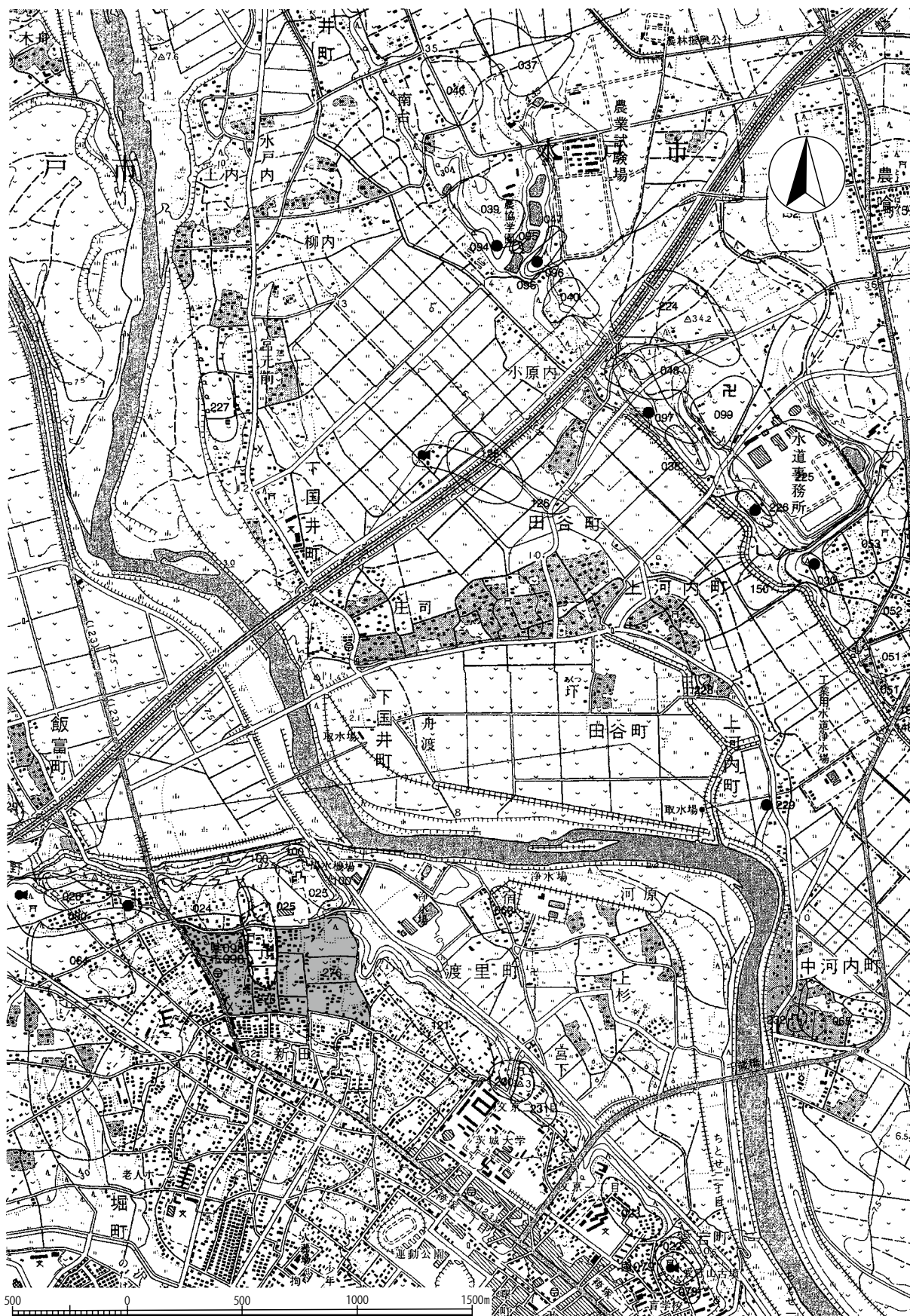
台渡里遺跡が所在する水戸市渡里地区は、北を那珂川に、南を桜川に挟まれた通称「上市台地」と呼ばれる那珂川によって形成された河岸段丘上に位置しており、南北方向に流れていた那珂川が渡里地区付近で緩やかに東の方向へ蛇行していく場所である（第 1 図）。渡里という地名がいつ頃まで遡り得るのか定かではないが、渡河点との関わりが想定される地名である。上市台地の東側斜面から斜面下にかけては愛宕町滝坂の曝井推定地に代表される湧水点が点在しており、古くから住み良い土地であったと考えられる。低地との比高は約 30m である。発掘地点は、那珂川が東へ蛇行する場所から南西方向に向かって入り込む谷津の北西側の台地上である（第 1 図）。（川口）

2-2 歴史的環境

台渡里遺跡は、国指定史跡「台渡里廃寺跡」の観音堂山地区、南方地区の東西に広がる遺跡であり、那珂川を見下ろす標高 31 ～ 34m の台地縁から中央平坦面にかけて広がっており、その範囲は東西 800m，南北 500m にも及ぶ（第 3 図）。戦前および昭和 20 年代にはこの一帯に畑地が広がっており、所々に雑木林が残っていたが、昭和 40 年代の後半から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。台渡里遺跡が立地する那珂川流域の台地上には先土器時代から近代に至るまでの多数の集落



第 1 図 台渡里遺跡の位置（国土地理院発行 1：50,000「水戸」に加筆）



第2図 台渡里遺跡と周辺の遺跡位置 (茨城県遺跡地図 1 : 25,000「水戸」に加筆)

第1表 台渡里遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・石斧・石錘・土偶、弥生土器（後）、土師器（古）・須恵器（古）	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・石斧・石剣・土偶、弥生土器（後）、土師器（古前）・須恵器	
24	アラヤ遺跡	集落跡	尖頭器（先）、縄文土器（早～晩）・石斧・石剣・土偶、土師器（古・奈・平）、須恵器（奈・平）	S27年, H1年, H18年調査
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）、弥生土器（後）、土師器（古・奈・平）	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）、土師器（奈・平）、須恵器（奈・平）	
37	阿川遺跡	集落跡	縄文土器（中～後）、土師器（古）、土師器（奈・平）	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）、弥生土器（後）、土師器（古前・後）	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器（前）、弥生土器（後）、土師器（古前・後）	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器（中～晩）・石錘・土偶、弥生土器（後）、土師器（古）、須恵器	
46	軍民坂遺跡	集落跡	搔器（先）、縄文土器（前～後）、土器片・石製品、弥生土器（後）、土師器（奈・平）・須恵器（奈・平）	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器（後）、土師器（古）、須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器（中～後）、弥生土器（後）、土師器（古）、土師器（奈・平）	
63	环渡里遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平）・須恵器（古・奈・平）	
64	堀遺跡	集落跡	弥生土器（後）、土師器（古前・奈・平）・須恵器（奈・平）・灰釉陶器（奈良・平安）・紡錘車・砥石・鉄製品（鎌・鏃・刀子・釘）・瓦、内耳土器（中）・土師質土器（中）・常滑焼（中）・播り鉢（中）・石臼、瓦質土器（近）・磁器（近）	H5年, H6年度調査
65	中河内遺跡	集落跡	古墳（前）・土師器（奈・平）	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀（古）	前方後円墳1（2）、円墳1（2）
80	西原古墳群	古墳群	土師器（古）・円筒埴輪（古）・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄族（古）	H17年, H18年度調査, 度前方後円墳1, 円墳8（11）
94	権現山古墳群	古墳群		円墳1（2）
95	権現山横穴群	横穴群	土師器（古）・須恵器（古）・水晶製切子玉・ガラス製小玉（古）	横穴墓0（4）？
96	富士山古墳群	古墳群	土師器（古）・円筒埴輪・人物埴輪（古）	前方後円墳1（?）、円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀（古）	前方後円墳1, 円墳2（4）
98	台渡里廃寺跡	寺院跡／官衙跡	ナイフ形石器・男女倉型有極尖頭器・剥片（先）、縄文土器（前・後～晩）・石器、弥生土器（後）、土師器（奈・平）・須恵器（奈・平）・墨書土器・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦・面戸瓦・隅切り瓦・文字瓦・瓦塔・陶製相輪・金箔製品・鉄製品（釘・鏃）・青銅製品・鉄滓・羽口、カワラケ（中）・内耳土器（中）	S14～S19年, S46～S49年, H6年, H9～H10, H12～H18年度調査
99	田谷廃寺跡	寺院跡／官衙跡	土師器（奈・平）・須恵器（奈・平）・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦（奈・平）	
100	長者山城跡	城館跡		H18年度調査, 土塁と堀が良好な状態で遺存
121	渡里町遺跡	城館跡	縄文土器（早・中・後）、土師器（古・奈・平）・須恵器（奈・平）・灰釉陶器（奈・平）	H15年, H16年度調査
125	塚宮遺跡	集落跡	縄文土器（中・後）、弥生土器（後）、土師器（古前・後）	
126	塚宮古墳群	古墳群		前方後円墳0（1）、円墳0（2）、湮滅
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器（中・後）、土師器（奈・平）・須恵器（奈・平）・石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦（奈・平）	
225	白石遺跡	城館跡／集落跡	角錐状石器（先）・削器（先）、尖頭器（草創）・有舌尖頭器（草創）・石鏃（草創）、縄文土器（中）、弥生土器（後）、土師器（古・奈・平）、須恵器（古・奈・平）、内耳土器（中）・陶器（中）・磁器（中）	H2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器（古前）	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器（奈・平）・須恵器（奈・平）	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳0（1）、湮滅
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器（後）、土師器（古）、陶器	円墳1（3）
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器（後）、土師器（古・奈・平）、須恵器（奈・平）	
232	中河内館跡	城館跡		
276	台渡里遺跡	集落跡	縄文土器（晩）、土師器（古・奈・平）・須恵器（古・奈・平）・墨書土器（奈）・炭化米（奈・平）・軒平瓦・平瓦・鉄製刀子（古）・鉄製鎌（古）・砥石（古）、内耳土器（中）、陶器（近）・磁器（近）・銅銭（近）・銅製箸（近）・砥石（近）	H6年, H8年, H14～H19年度調査

（井上・藪沼・仁平・根本 1998）に加筆

跡と古墳・横穴，寺院跡・官衙跡，城館跡が確認されている（第2図，第1表）。以下では周辺の先土器時代～中・近世遺跡を概観する。

（1）先土器時代～縄文時代草創期

那珂川を挟んだ対岸の軍民坂遺跡と白石遺跡からは，先土器時代～縄文時代草創期の石器が出土している。軍民坂遺跡からは，長者久保・神子柴文化に帰属すると見られる石刃製の搔器が採集されている（吹野・江幡 1998）。平成2年～3年にかけて実施された白石遺跡の発掘調査では橋本編年Ⅱb期（橋本 1995, 2002）に帰属する頁岩製の角錐状石器や時期不明の削器と剥片（いずれもメノウ製），長者久保・神子柴文化期の尖頭器（頁岩製），縄文時代草創期の有舌尖頭器（黒曜石製・頁岩製）・石鏃（ガラス質黒色安山岩製・頁岩製）が出土している（樫村 1993）。

台渡里遺跡に隣接する台渡里廃寺跡からは、少量ながら先土器時代の石器が出土している。平成 16 年度に行われた確認調査では、2 点の石器が出土している。ひとつは南方地区の塔跡の基壇の断ち割り調査の際に掘り込み地業の基底直下のローム層から出土したメノウの剥片である。出土層位は第二黒色帯とみられる。もうひとつは、南方地区の東側寺院地区画溝の確認を目的とした平成 16 年度調査南方地区第 2 トレンチ (DWT04N-T2) から出土した硬質頁岩製の男女倉型有樋尖頭器である。さらに平成 18 年度調査長者山地区正倉院区画溝確認トレンチにおいて、確認された正倉院区画溝からもチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が 1 点出土している。技術的・形態的特徴および利用石材から橋本編年Ⅱc 期 A グループ (いわゆる「砂川期」) のものと考えられる。また、台渡里廃寺跡長者山地区に隣接するアラヤ遺跡では硬質頁岩およびガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器が各 1 点出土している。

以上のように台渡里遺跡の周辺では、AT 下位の橋本編年Ⅱa 期から縄文時代草創期にかけての石器が出土しており、更新世後半から最終氷期人類の土地利用が展開していたことは確実である。しかしながら、ほとんどの資料が後世の遺構内覆土出土資料であったり、単独出土品であることから、どのような土地利用が展開していたのかについて定かではない。今後は、調査時の偶然の発見に委ねるのではなく、最終氷期人類の具体的な活動内容を探るために石器集中地点や礫群、炉跡等の遺構の確認を目的としたローム層内の調査事例を積極的に増やしていく必要があるだろう。(川口)

(2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、愛宕町遺跡、文京 1 丁目遺跡、アラヤ遺跡、長者山遺跡、西原遺跡、阿川遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、小原内遺跡、渡里町遺跡、塚宮遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、笠原神社古墳が該当する。これらのうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、砂川遺跡、軍民坂遺跡、白石遺跡のみであり、他の遺跡はすべて踏査により確認されている。

アラヤ遺跡は昭和 26 年と平成元年、平成 18 年に発掘調査が行われている。ただし、昭和 26 年の調査については、調査地点がはっきりしないため、平成元年に行われた調査を第 1 地点とし、平成 18 年度の調査を第 2 地点とした。

昭和 26 年の調査は 10 月 4 日～11 日にかけて大森信英氏(当時茨城高等学校教諭)が調査を担当し、掘立柱建物跡とみられる 12 基の柱穴を検出したとするが、詳細は不明である。遺物は縄文時代後期堀之内式、加曾利 B 式、安行 I 式、II 式、晩期安行Ⅲa 式、Ⅲb 式、Ⅲc 式、千網式土器とともに東北地方に分布する大洞 B 式、BC 式、C1 式、C2 式、A 式土器や土偶、石棒などが出土している(大森 1952c)。

水戸老人福祉センター「長者山荘」の建設に伴い実施された第 1 地点の調査では、縄文時代の遺物は台地中央にある古墳時代や奈良・平安時代の遺構からも出土しているが、遺構は台地縁に密集しており、縄文時代早期の竪穴状遺構 8 基が確認されている(井上編 1992)。遺物は早期後葉の茅山下層式、茅山上層式、子母口式、前期前葉の黒浜式、前期後葉の浮島式、中期初頭の五領ヶ台式、中期中葉の阿玉台式、中期末葉の加曾利 E4 式、後期初頭の称名寺式、前葉の堀之内 1 式、後期中葉の加曾利 B2 式土器の破片等とともに定角式磨製石斧や磨石、石錘等が多数出土している。

市道常磐 10 号線改良工事に伴い実施された第 2 地点の調査（台渡里第 33 次）では、時期不明の縄文土器とともに磨石や石皿・蜂の巣石、礫器などが出土している。

砂川遺跡からは、昭和 55 年に常磐自動車道敷設に伴い実施された発掘調査の際に加曾利 E3 - 4 式（柳澤 1995）期の竪穴住居跡 4 軒，加曾利 E4 式期の竪穴住居跡 15 軒，加曾利 E4 式期の土坑 141 基，加曾利 E4 式期の埋設土器 14 基が検出されている（渡辺 1981）。竪穴住居跡は円形，隅丸方形，楕円形のものから構成され，炉の形態には地床炉，石囲い炉，埋設炉があるが，時期による形態差は認められない。

軍民坂遺跡では、平成 17 年度の個人住宅建設に伴う試掘・確認調査において、縄文時代中期後半加曾利 E3 式期の竪穴住居跡が調査され，うち 1 軒は東北地方においてよく知られる石組複式炉を持つことが明らかとなった。県内でも類例が少ない貴重な例としてあげられよう。この背景には，中期後半に東北地方の大木式土器文化圏と非常に密接な交流があったといえる。

白石遺跡からは、平成 2～3 年に水戸浄水場建設に伴い実施された発掘調査の際に加曾利 E3 式期の竪穴住居跡 1 軒，加曾利 E4 式期の竪穴住居跡 2 軒が検出されている（檜村 1993）。いずれも円形あるいは不整円形のものであり，加曾利 E3 式期の竪穴住居跡が地床炉であるのに対し，加曾利 E4 式期の竪穴住居跡の炉は石囲い炉となっている。また，遺構外より阿玉台式，加曾利 E3 式，加曾利 E4 式，大木式土器の破片が出土している。（川口）

（3）弥生時代

弥生時代の遺跡は愛宕町遺跡，文京 1 丁目遺跡，長者山遺跡，梵天遺跡，権現山遺跡，平塚遺跡，軍民坂遺跡，富士山遺跡，小原内遺跡，堀遺跡，塚宮遺跡，白石遺跡，文京 2 丁目遺跡が該当する。これらのうち発掘調査で遺構が確認されているのは堀遺跡だけであり，ほかは全て表面採集により弥生時代後期の土器の出土が確認されている。堀遺跡からは，弥生時代後期の竪穴住居跡が 1 軒検出されており，弥生土器の壺 2 個体と土師器の壺と埴が共伴して出土している（井上・千葉・檜村 1995）。（川口）

（4）古墳時代

台渡里遺跡の周辺における古墳時代の集落跡は愛宕町遺跡，文京 1 丁目遺跡，長者山遺跡，阿川遺跡，梵天遺跡，権現山遺跡，平塚遺跡，富士山遺跡，小原内遺跡，坏渡里遺跡，堀遺跡，中河内遺跡，渡里町遺跡，塚宮遺跡，白石遺跡，宮元遺跡，文京 2 丁目遺跡が該当する。これらの大半は踏査により確認された遺跡である。これらのうち時期が判明しているのは前期の遺物が確認されている文京 1 丁目遺跡，堀遺跡，中河内遺跡の 4 遺跡および古墳時代後期の土師器が出土している塚宮遺跡に限られる。

これらの集落跡のうち発掘調査が行われているのは，白石遺跡，堀遺跡，塚宮遺跡である。白石遺跡からは，7 世紀前葉の住居跡が 3 軒確認されている（檜村 1993）。

集落跡の周辺に営まれている古墳は，中期～終末期のものが確認されている。中期には国指定史跡愛宕山古墳が築造されている。本古墳は全長 136.5m，後円部径 78m，前方部幅 75m，後円部高 10.5m，前方部高 9m を測り，楕形の周壕を巡らす大型の前方後円墳である。採集されている埴輪に

黒斑がみられることから5世紀前半に築造されたとする見解がある(井・小宮山 1999)。

また、その近傍に立地したといわれる姫塚古墳もこの時期に該当するらしい。本墳はかつて愛宕山古墳の西方に存在したらしいが、1971年に宅地造成のため破壊されてしまった。全長58m、後円部径40m、前方部幅20m、後円部高4m、前方部高3.5mで、有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられており、盗掘孔の状況から粘土槨であったと推定されていることなどから(藤村・塩谷 1982)、愛宕山古墳に近接した時期が推定されている(井・小宮山 1999)。

後期の古墳は、富士山古墳群、小原内古墳群が該当する。富士山古墳群、小原内古墳群からは円筒埴輪や形象埴輪、直刀、鉄鏃などが出土しており、いずれも6世紀代の築造と考えられる。終末期の古墳は、西原古墳群と権現山横穴群が該当する。権現山横穴群の第1号墓および第2号墓の玄室には線刻壁画が認められる。第1号墓からは須恵器と土師器が出土しており、玄室の左右側壁に放射状線文が描かれている。第2号墓からは遺物は出土していないが、玄室の左右側壁に稲妻形文・縦線・横線・建物・冑が描かれている。第3号墓からはガラス製小玉2点、水晶製切子玉8点、第4号墓からはガラス製丸玉4点、金環2点が出土している。造営年代は7世紀前葉とする見解(大森 1974, 生田目・稲田 2002)と8世紀前後とする見解(川崎 1982)とがある。

白石古墳群は5基の円墳から構成され、第2号墳の墳頂には凝灰岩片が散乱している箇所があることから横穴式石室の存在が想定される。また、第3号墳の南側からは石棺が検出されており、いずれも埴輪を伴っていない。

西原古墳群は前方後円墳1基と円墳8基から構成される古墳群であるが、凝灰岩の横穴式石室を持つと考えられる古墳が存在する点、須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄鏃などが出土している点(大森 1952a, 1952b)、埴輪を持たない点の3点が従来の特徴として挙げられた。ところが、平成17年度に水戸市教育委員会が実施した個人住宅建設に伴う発掘調査で墳丘が削平された円墳の周溝が検出され、内部から円筒埴輪片が多数出土したことから、少なくとも本古墳群は6世紀代から形成され、7世紀まで造墓活動が継続することが判明した。また、本古墳群には、全長約50m、後円部径30m、高さ3.5m前後、前方部幅15mの規模を持つ前方後円墳があり、注目される。

(川口)

(5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡のうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、堀遺跡、台渡里廃寺跡、渡里町遺跡、砂川遺跡、白石遺跡である。

アラヤ遺跡では第1地点の調査の際に4軒の竪穴住居跡と工房跡1軒、掘立柱建物跡2棟、粘土採掘坑2基が確認されている。遺構の造営時期は出土している土器から、工房跡が7世紀末～8世紀初頭、竪穴住居跡は8世紀～9世紀、掘立柱建物跡は竪穴住居跡との重複関係から9世紀以降とみられる。工房跡や竪穴住居跡からは刀子や砥石などが一定量出土しており、寺院や官衙の造営に係わる集落が展開していた可能性が高い。その後、官衙に関連する可能性がある掘立柱建物跡がこの地に展開していることから、土地利用が変化した状況がうかがえる。

第2地点の調査(台渡里第33次)では、1区において東西方向の区画溝が確認され、覆土から炭

化米が出土していることから那賀郡衙正倉院の区画溝とみられる。また、同調査の4区では柱間7尺の掘立柱建物の柱穴も確認されており、正倉院に関連する建物の可能性がある。

堀遺跡では、平成5年に実施された建売住宅の建設に伴う発掘調査の際に、平安時代の竪穴住居跡6軒とともに、3棟の側柱掘立柱建物跡、土坑9基、溝状遺構2条が検出されており、このうち建物跡は、3×2間、2×1間、1×1間がそれぞれ1棟ずつ確認された(伊藤 1995)。平成6年に実施された住宅団地造成工事に伴う発掘調査において奈良・平安時代の竪穴住居跡39軒、掘立柱建物跡5棟、井戸跡2基、溝跡2条、土坑1基が検出されている(井上・千葉・樫村 1995)。竪穴住居跡は8世紀前半が6軒、8世紀後半が15軒、9世紀前半が13軒、9世紀後半が5軒確認されており、土師器、須恵器、鉄製刀子・窯・雁又鍬・釣針・釘・くるり錠などのほかに須恵器壺Gが2点出土している。建物跡のうち第5号掘立柱建物跡は長舎風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性が指摘されている(樫村 2005)。また、土坑からは人面墨書土器が出土している。

砂川遺跡からは、昭和55年に常磐自動車道敷設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴住居跡19軒、竪穴状遺構6基、溝2条、井戸1基が検出されている(渡辺 1981)。竪穴住居跡からは土師器、須恵器とともに鉄製足金具や刀子、雁又鍬、鎌、土製紡錘車などが出土しており、井戸跡からは木製の曲物や櫛、高台付盤など注目される遺物が出土している。

台渡里廃寺跡の調査・研究は、高井悌三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする(高井 1964)。その成果を受け、昭和20年に長者山地区と観音堂山地区、南方地区の3地区が県指定史跡に指定された。

長者山地区は、炭化米が出土すること、瓦倉が4棟確認されていることから(高井 1964, 瓦吹 1991)、那賀郡衙正倉院と推定されていた(瓦吹 1991, 黒澤 1998)。平成18年度には、市教育委員会が行った範囲確認調査(台渡里第30次)により、新たに9棟の礎石建物跡と北側区画溝が確認され、郡衙正倉院であることが確定的になったといえる。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衙政庁跡や河内駅家跡とする見解もあったが(瓦吹 1991, 外山 1994)、平成14年から16年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査(台渡里第16, 18, 19次)の結果、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極に位置するところには中門が配置される東向きの独自の伽藍配置をもつとみられ、その創建年代は7世紀後半に遡ることが明らかとなった(川口・小松崎・新垣編 2005, 川口 2006, 2007)。出土遺物には平瓦や丸瓦の凹面や凸面に「吉(土)田」、「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志□」など台渡里廃寺跡の造営に関与した那賀郡の郷名や「年足」のような個人名がへら書きされたもの、「川マ」や「禾」、「石上」銘の押印文字瓦、相輪の一部がへら書きされた瓦や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦、金箔製品、瓦製相輪の請花花弁と擦管など東国の初期寺院でも初見の例となる仏教関連遺物が確認されている。

南方地区についてはこれまでも寺院跡と考えられてきたが(高井 1964, 瓦吹 1991, 黒澤 1998)、平成14年から16年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、塔跡基壇の内部より内面黒色処理の施された土師器坏の破片が出土したことから、9世紀後半に入ってから造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。観音堂山地区の初期寺院が9世紀後半には火災で廃絶していることから、観音堂山地区の伽藍の焼亡後に、南方地区に再建しようとしたが、

造営を途中で中止した可能性が高い（川口・小松崎・新垣編 2005）。従って、確認されなかった講堂は本来存在しない可能性が高い。なおこれらの成果に基づき、平成 17 年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

白石遺跡からは、平成 2～3 年に水戸浄水場建設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴住居跡 16 軒、掘立柱建物跡 6 棟、基壇 1 基、溝 1 条、土坑 12 基が検出されている（樫村 1993a）。特に注目されるのは東西 2 間、南北 36 間のⅡ区 2 号建物であり、長さは桁行約 88m にもなる。第 1 号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。溝の時期から 8 世紀前半に帰属すると考えられている。

白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡からは、多数の瓦とともに「□里丈部里」, 「生マ□里」, 「岡田」など台渡里廃寺跡長者山地区と同様の文字瓦が多数出土している。小字には「百壇」という礎石建物の基壇との関係が推測される地名が遺されており、3 箇所 of 基壇と礎石の存在が報告されている（伊東 1975）。黒澤彰哉氏は本遺跡を新置の河内駅家跡と推定されているが（黒澤 1998）、田谷廃寺跡が河内駅家跡であったとすれば、白石遺跡で確認されたⅡ区 2 号建物は、樫村直行氏の指摘するとおり、駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設として理解することも可能であろう（樫村 1993b）。なお、Ⅱ区 2 号建物を馬房とする見方については木本雅康氏も支持しているが、『延喜式』に記載されている河内駅の駅馬数はわずか 2 疋である点、養老 2（718）年の石城国設置に伴い駅馬の数が 10 疋置かれたとしても建物の規模と駅馬数に隔たりがある点に着目し、河内駅のひとつ手前の安侯駅と同様、騎兵がプールされており、そのための馬房と考えるべきではないかという駅の軍事的側面を強調した新見解を提示している（木本 2008）。（川口）

（6）中世～近代

中世～近代の遺跡は長者山城跡、アラヤ遺跡、台渡里廃寺跡が挙げられる。長者山城跡は、これまで地形測量図や縄張り図が作成されたことはあったものの、発掘調査は行われていなかった。しかしながら、平成 18 年に水戸市教育委員会が行った個人住宅建設に伴う発掘調査で、15 世紀後半～16 世紀初頭の遺物が出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、長者山城跡の機能していた時期に関する手がかりが得られた。

アラヤ遺跡では、平成 18 年に実施された市道常磐 10 号線道路改良工事に伴う発掘調査の際に中世の長者山城跡に関連する瓦礫道が検出されている。

台渡里廃寺跡では、平成 6 年に実施された都市計画道路 3・6・30 号線敷設に伴う発掘調査の第一調査区で確認された第一号井戸址から、15 世紀～16 世紀初頭のカワラケや内耳土器、播鉢などが出土しており（井上・千葉 1995）、平成 15 年に行われた範囲確認調査では、土塁に沿う形で観音堂山地区の初期寺院の礎石を落とし込んだ溝跡が確認されており、カワラケや内耳土器などが出土していることから、観音堂山地区の初期寺院は少なくとも 15 世紀には寺院の存在はなく、長者山城跡の一角として機能していたことが推定されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。また、南方地区からは平成 16 年に行われた範囲確認調査の際に、塔跡の基壇上およびその周辺から、多数の中・近世の土器類とともに五輪塔の部材、板碑片などが出土しており、基壇の南側には「咸平元寶」などの北

宋銭や焼土・炭化物・骨粉を含む中世の火葬墓が集中して営まれている状況が確認されたことから、中・近世には塔跡が信仰の対象となっており、墓域としての土地利用が行われていたことが推察されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。

平成 17 年に行われた市道常磐 17 号線改良工事に伴う発掘調査では、2 区からこぶし大の円礫を集めた集石遺構が 3 基見つかり、17 世紀前半の瀬戸・美濃産の陶器や波佐見産の磁器碗、17 世紀後半の瀬戸・美濃産陶器大鉢、18 世紀前半の肥前系磁器碗が出土している。また、4 区で確認された現代のゴミ穴からは、近世～近代の製品とみられるカワラケとともに益子焼の土瓶や土人形（恵比寿）が出土しており（佐々木・川口・大橋・林・渥美 2006）、近世村落の成立が 17 世紀前半まで遡ることを間接的に示す資料が得られた。

以上の成果から、台渡里遺跡の周辺では、15 世紀後半～16 世紀前半に長者山城に関わる土地利用が展開し、17 世紀前半以降には近世集落が形成されていたと推定される。（川口・関口）

2-3 台渡里遺跡における既往の調査

台渡里遺跡が立地する渡里地区の台地上では、これまでに 40 次に亘る調査が行われており（第 2 表）、台渡里遺跡では 17 次に亘る調査が行われている。以下では主な調査とその成果について言及する。

最初の調査は、平成 6 年に都市計画道路 3・6・30 号線敷設に伴い実施された発掘調査の第二調査区である（第 8 次）。本調査では、7 世紀後半から 8 世紀初頭の竪穴住居跡 4 軒、溝 6 条、建物跡 2 棟が検出されており（井上・千葉 1995）、溝は出土遺物から 1 号溝が 8 世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期から 9 世紀第Ⅰ四半期、2 号溝が 8 世紀前半、3 号溝が 8 世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期から 9 世紀第Ⅰ四半期以降に埋没したと考えられる。中でも 3 号溝は溝の中に 0.9～1.3m ほどの掘方をもつ柱穴が 2m 間隔に列状に認められ、柵列もしくは掘立柱塀などの区画施設としての性格が想定される。遺物では 2 号溝から 7 世紀後半から 8 世紀初頭に位置づけられる須恵器や土師器類とともに畿内系暗文土師器や東海産とみられる須恵器甕や須恵器坏蓋などが出土しており、1 号建物跡および 3 号溝などから近隣に公的施設の存在が予測される。また、厚手碗や銅銭・鉄銭を副葬した 18 世紀以降の近世墓が 4 基確認されており、近世の土地利用も窺える。

平成 8 年に集合住宅建設に伴う確認調査（第 9 次）では、3 号溝の延長部分と 7 世紀第Ⅳ四半期の竪穴住居跡が 1 軒検出されている（井上・栗原 1996）。

平成 15 年および平成 17 年に実施された商業施設建設に伴う確認調査（第 17 次・第 26 次）では、西側にある台渡里廃寺跡南方地区の伽藍の東側寺院地区画溝とともに、寺院に先行する竪穴住居跡や掘立柱建物群と鍛冶工房等が確認された。これらは観音堂山地区の初期寺院の造営時期に相当することから、寺院造営に係わる集落の可能性がある。また、17 次調査では、15 世紀～16 世紀初頭のカワラケや内耳土器が出土した井戸跡も 1 基確認され、長者山城跡に関連する遺構と推定される（川口・関口・新垣・渥美・木本 2007）。

平成 17 年に実施された集合住宅建設に伴い実施された発掘調査（第 24 次）では、奈良・平安時代の竪穴住居跡とともに正倉とみられる礎石建物跡 1 棟（総地業）とそれを区画する役割を果たしてい

第2表 台渡里遺跡群における既往の調査

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査機関	面積 (㎡)	文献	概要	遺物 (特記事項)
第1次	1939	台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区 ・南方地区	渡里町字アラヤ 前 2973-1・2・ 3, 2974, 2975, 字ヤジカ 2909 -1	学術	高井悌三郎	—	—	—	観音堂山地区の堂宇 の確認。南方地区の 塔基壇の確認。	菱文字軒平瓦 単弁八葉花文式軒丸 瓦
第2次	1941	台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区 ・南方地区	渡里町字アラヤ 前 2973-1・ 2・3, 2974, 2975, 字ヤジカ 2909-1	学術	高井悌三郎	—	—	高井 1964	観音堂山地区の堂宇 の確認。第1号跡の 被災を確認。南方地 区の塔基壇の確認。	
第3次	1943	台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区 ・長者山地区	渡里町字長者山 3118, 3120, 3121, 3130, 3134, 字アラ ヤ前 2973- 1, 2973-2, 2974, 2975	学術	高井悌三郎	—	—	—	観音堂山地区の堂宇 と長者山地区の瓦倉 の確認。	「之十二」銘文字瓦 瓦塔片 「徳輪寺」銘文字瓦 文字瓦多数出土 唐草文式軒平瓦
第4次	1971.03	台渡里廃寺跡／ 南方地区	渡里町字ヤジカ 2909-1	史跡保存 に向けた 範囲確認	伊東重敏	水戸市教委 (確認調査)	—	—	南方伽藍塔基壇の確 認。	
第5次	1971.04 ～ 1971.05	台渡里廃寺跡／ 南方地区	渡里町字ヤジカ 2909-1 ほか	史跡保存 に向けた 範囲確認	伊東重敏	水戸市教委 (確認調査)	—	—	区画溝と工房跡を確 認。	往生料」銘の墨書土 器 押出仏原型を製作す る 鋳型 埴塼 銅滓
第6次	1972.03	台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラ ヤ前 2962-1, 2980-1, 2983 -1	史跡保存 に向けた 範囲確認	伊東重敏	水戸市教委 (確認調査)	—	瓦吹 1991	南側の段部下におい て東西方向に走る幅 約3mの溝跡を検出。 また、西側畑地から は井戸跡を検出。	
第7次	1973.03	台渡里廃寺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3069-1, 3069 -2, 3070	史跡保存 に向けた 範囲確認	伊東重敏	水戸市教委 (確認調査)	—	—	第3次調査で確認さ れた瓦倉とは主軸の 異なる2棟の瓦倉を 新たに確認。また、 その南方で瓦礫道の 痕跡を確認。	
—		アラヤ遺跡 (第1地点)	渡里町字アラヤ	デイ・ サービス センター 建設に伴 う	井上義安	発掘調査会 (本調査)	3500	市教委 1990 『アラヤ遺跡』	側柱掘立柱建物跡2, 竪穴建物跡5(工房 跡含む)。	
第8次		台渡里廃寺跡／ 中間地区	渡里町	都市計画 道路3・ 6・30 号線敷設 に伴う	井上義安	遺跡調査会 (本調査)	—	市教委 1995 『台渡里廃寺 跡』	「第一調査区」。伽藍 区画溝の確認。	
		台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町	都市計画 道路3・ 6・30 号線敷設 に伴う	井上義安	遺跡調査会 (本調査)	1883	市教委 1995 『台渡里廃寺 跡』	「第二調査区」。布掘 掘立柱建物跡・竪穴 建物跡、区画溝の確 認。	
第9次		台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町字宿屋敷 3017-1	共同住宅 建設に伴 う	井上義安	(試掘調査)	465	市教委 1996 (内部資料)	竪穴建物跡、区画溝 の確認。「第二調査 区」に連なる。	
第10次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2977-1	共同住宅 建設に伴 う	井上義安	(試掘調査)	200	内部資料	掘立柱建物跡を構成 するピット、溝状遺 構、長方形柱穴跡、 方形状?遺構、小ピ ットを検出。	
第11次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2983-1	共同住宅 建設に伴 う	井上義安	(試掘調査)	70	内部資料	溝状遺構を検出。	
第12次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2967-1	共同住宅 建設に伴 う	川崎純徳	水戸市教委 (試掘調査)	140	市教委 2004	*第14次に向けた 試掘調査。	
第13次	5/22/01	台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2970	共同住宅 建設に伴 う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	110.0	市教委 2004	*第14次に向けた 試掘調査。	
			渡里町字アラヤ 前 2967-1	共同住宅 建設に伴 う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	62.1	市教委 2004	*第14次に向けた 試掘調査。	
第14次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2970	共同住宅 建設に伴 う	蓼沼香未由	化研 (本調査)	402	市教委 2004	観音堂山地区の寺院 地区画溝を含む溝、 掘立柱建物跡、土坑、 ピットを検出。	
第15次	7/12/02	台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町 2987- 18	個人住宅 兼動物病 院店補建 設に伴う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	21.6	内部資料	遺構は確認されず。 須惠器坏蓋片が表土 より1点出土。	

第16次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2973-1 ほか	重要遺跡 範囲確認	川口武彦	水戸市教委 (確認調査)	433	水戸市教委 2005『第1 集』	観音堂山地区の講 堂・金堂・塔・中門、 区画溝を確認。	3101, 3103, 3105, 3114, 3126, 3127, 3130, 3131 型式軒 丸瓦, 素文式, 格子 文式, 菱文式, 矢羽 根文式軒平瓦, 文字 瓦(「年□」, 「川邊」, 「土田」, 「吉田」銘, 「川マ」押印), 須恵 器(円面硯, 坏, 盤), 土師器(坏, 甕, 足 高高台碗), カワラ ケ, 灰釉陶器(瓶類), 鉄製品(釘, 鏝), 鉄滓, 金箔(土)製品, 凝灰岩片, 炭化材
第17次		台渡里廃寺跡／ 南方地区	渡里町字前原 2830-1 ほか	商業建設 に伴う	川口武彦 小松崎博一	水戸市教委 (試掘調査)	366	水戸市教委 2005『第1 集』	南方地区の東側寺院 地区画溝, 7c後半の 竪穴住居跡, 掘立柱 建物跡2棟, 土坑多 数を確認。	土師器, 須恵器, 平 瓦片が出土
第18次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2973-1 ほか	重要遺跡 範囲確認	川口武彦 小松崎博一	水戸市教委 (確認調査)	894	水戸市教委 2005『第1 集』	観音堂山地区の南側 寺院地区画溝, 南方 地区の北側寺院地区 画溝を確認。	3127, 3128 型式軒 丸瓦, 平瓦, 須恵器 (坏, 甕), 内面黒色 処理土師器碗が出 土。
		台渡里廃寺跡／ 中間地区	渡里町 2979-1	重要遺跡 範囲確認	川口武彦 小松崎博一	水戸市教委 (確認調査)	1600	水戸市教委 2005『第1 集』	南方地区の北側寺院 地区画溝を調査。	軒丸瓦, 平瓦, 須恵 器(坏, 甕), 内面 黒色処理土師器碗が 出土。
第19次		台渡里廃寺跡／ 南方地区	渡里町字ヤジカ 2909-1 ほか	重要遺跡 範囲確認	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (確認調査)	1530	水戸市教委 2005『第1 集』	南方地区の塔跡と金 堂跡とそれを取り囲 む東西および北側寺 院地区画溝, 南側伽 藍地区画溝を調査。 寺院地区画溝の内側 からは, 7世紀後半 ～9世紀後半の竪穴 住居跡を検出。	3116, 3127 型式軒 丸瓦, 格子文式軒平 瓦, 菱文式軒平瓦, 平瓦, 丸瓦, 文字瓦 (「中」銘), 須恵器(香 炉, 鉄鉢, 坏, 甕), 内面黒色処理土師器 碗, 墨書土器, 咸平 元寶, 中近世陶磁器 および土器類, 五輪 塔部材が出土。
		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラヤ 前 2973-1 ほか	重要遺跡 範囲確認	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (確認調査)	280	水戸市教委 2005『第1 集』	観音堂山地区の講堂 が瓦積み基壇を持つ ことを確認。	3101, 3103, 3106, 3127 型式軒 丸瓦, 素文式軒平瓦, 格子文式軒平瓦, 菱 文式軒平瓦, 矢羽根 文式軒平瓦, 平瓦, 有段式, 無段式丸 瓦, 文字瓦(「志□」, 「中」, 「年足」銘), 須恵器, 内面黒色処 理土師器が出土。
第20次		台渡里遺跡／ 西方地区	渡里町字ヤジカ 2913-8, 2915 -1の一部, 2915 -1の一部, 2935-2の 一部, 2934の 一部	共同住宅 建設に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	45	水戸市教委 2005『第1 集』	・古代の溝4, 古代 の粘土採掘坑1, 時 期不明の土坑5を確 認。	素文式軒平瓦, 土師 器片, 須恵器片が出 土。
第21次		台渡里遺跡／ 南方官衙地区	渡里町字前原 2836-2, 2836 -7	宅地造成 に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	158	内部資料	時期不明の土坑12 を検出。	須恵器片2点, 土師 器片1点が出土。
第22次		台渡里遺跡／ 南方官衙地区	水戸市渡里町 2830-1, 2834 -1, 2832-5	共同住宅 建設に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	85.5	水戸市教委 2006b『第5 集』	第24次に向けた試 掘調査。	
第23次		台渡里廃寺跡／ 南方地区	渡里町字アラヤ 2984-2A, 字 アラヤ前 2982 -1A, 字ヤジ カ 2900-1A, 2900-4, 2900 -7A	市道常磐 17号線 改良工事 に伴う	土生朗治	山武考古学 研究所 (本調査)	297.0	水戸市教委 2005『第2 集』	南方地区伽藍東側区 画溝の確認。	「珠千」銘墨書土器 「志万」銘文字瓦
第24次		台渡里遺跡／ 南方官衙地区	渡里町字前原 2830-1 ほか	集合住宅 建設に伴う	大淵淳志	日考研茨城 (22次本調 査)	244	水戸市教委 2006b『第5 集』	礎石建物跡を含む郡 家正倉院もしくは 河内駅家関連。	「備所」銘墨書土器, 炭化米
第25次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区	渡里町字アラ ヤ前 2969-2, 2970-1・2・3, 2984-1, 2986 -1, 2998-3・ 5・6・7	市道常磐 17号線 改良工事 に伴う	大橋 生 林 邦雄	東京航業研 究所 (本調査) 水戸市教委 (立会調査)	129	水戸市教委 2006a『第4 集』	観音堂山地区の東側 で新たに区画溝を確 認。	

第26次		台渡里廃寺跡／ 南方地区	渡里町字前原 2874-1 ほか7 筆	商業施設 建設に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (確認調査)		水戸市教委 2007『第11 集』	南方地区の伽藍に先 行する掘立柱建物群 と鍛冶工跡跡、南方 地区の東側寺院地区 画溝を確認。	土師器、須恵器、平 瓦片が出土
第27次		長者山城跡 (第1地点)	渡里町字長者山 3154-9・55	個人住宅 造成に伴う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	2.0	水戸市教委 2007『第11 集』	中世城館「長者山城」 範囲内、奈良・平安 時代の溝を確認。	
第28次		長者山城跡 (第2地点)	渡里町字アラヤ 3044-1 番地ほ か	個人住宅 造成に伴う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	259.8	整理中	※第29次に向けた 試掘調査	
第29次		長者山城跡 (第2地点)	渡里町字アラヤ 3044-1 番地ほ か	個人住宅 造成に伴う	川口武彦 新垣清貴 関口慶久	水戸市教委 (発掘調査)		整理中	3×3間の総柱構造 の掘立柱建物跡(正 倉)と中世城館「長 者山城」の関連遺構 多数を確認。	
第30次	2006.10.3 ～ 2007.2.7	台渡里廃寺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3119 番地ほか	重要遺跡 範囲確認	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (確認調査)		整理中	郡家正倉。	
第31次		台渡里遺跡／ 南方地区	渡里町字南前原 2618	個人住宅 造成に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	12.60	整理中	時期不明の遺構。	
第32次	2007.1.31	台渡里遺跡／ 南方官衙地区	渡里町字狸久保 2771-1 番地外	宅地造成 に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	30.4	整理中	中世以降とみられる 掘跡を確認。	
第33次		アラヤ遺跡 (第2地点)	渡里町字アラヤ 3061-4 地先	市道常磐 10号線 改良工事 に伴う	大橋 生 林 邦雄	東京航業研 究所 (本調査)	244.0	水戸市教委 2007『第12 集』	長者山地区の南側区 画溝と思われる溝 跡、第7次調査で 確認された中世の瓦 礫道の延長部分を調 査。	
	2006.1.27 ～ 2006.1.28			市道常磐 10号線 改良工事 に伴う	新垣清貴 関口慶久	水戸市教委 (立会調査)	—	水戸市教委 2007『第12 集』	溝跡2条を確認。	
第34次		台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町字宿屋敷 3028-8	個人住宅 造成に伴う	川口武彦 渥美賢吾 木本挙周	水戸市教委 (発掘調査)	98.24	整理中	東方官衙域の「溝も ち」掘立柱建物跡1、 竪穴建物跡1を確認。	
第35次	2007.05	台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町 2812-1 ～ 3011	下水道新 設に伴う	新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	18.0	整理中	※第39次に向けた 試掘調査	
第36次		台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区 台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町アラヤ前 2967-1 渡里町宿屋敷 3017-1	ソイル マーク確 認に伴う	西村 康 西口和彦 金田明大 木本挙周 渥美賢吾	水戸市教委 奈文研 (レーザー 探査)	—	整理中		
第37次		台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町字宿屋敷 3028-6	土地改良 に伴う	木本挙周	水戸市教委 (確認調査)	10.0	整理中	掘立柱建物跡の柱穴 を断面で確認。	
第38次	2007.11 ～ 2008.2.12	台渡里廃寺跡／ 長者山地区	渡里町 3088-2	重要遺跡 範囲確認	渥美賢吾 木本挙周	水戸市教委 (確認調査)	420.0	整理中	長者山地区の南側区 画溝を確認。その他 では、7世紀後半の 竪穴住居跡、8世紀 前半の区画溝、掘立 柱建物跡等を確認。	
第39次		台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町 2812-1 ～ 3011	下水道新 設に伴う	大橋 生 市瀬俊一	東京航業研 究所 (本調査)	226.0	本報告		
第40次		台渡里遺跡／ 南方官衙地区	渡里町字狸久保 2771-12 番地	個人住宅 造成に伴う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	24.7	整理中	上面幅6.0m、深さ 2.5m以上の堀跡を 確認。	

た逆台形の区画溝1条が検出され、区画溝の覆土上層からは炭化米がまとまって出土した(小川・大淵・川口・松谷 2006)。

竪穴住居跡のうちSI01からは「備所」と記銘された墨書土器が出土している。「備所」がどのような物品を備える施設なのかは、調査面積が限定されているため、判然としないが、炭化米や礎石建物との関連を想定するならば、租税を備蓄しておくための施設名を示す墨書と理解することができる。この調査により那賀郡衙に係わる官衙施設が台渡里遺跡の範囲にまで展開していることが判明した。

以上の既往の調査成果から、台渡里遺跡は縄文時代晩期から近世に至るまで、断続的に土地利用が展開した複合遺跡であり、奈良・平安時代には那賀郡衙とその周辺寺院である台渡里廃寺跡と有機的な関係にあった遺跡であったことが理解できる。(川口)

第3章 調査の方法と成果

3-1 調査の方法

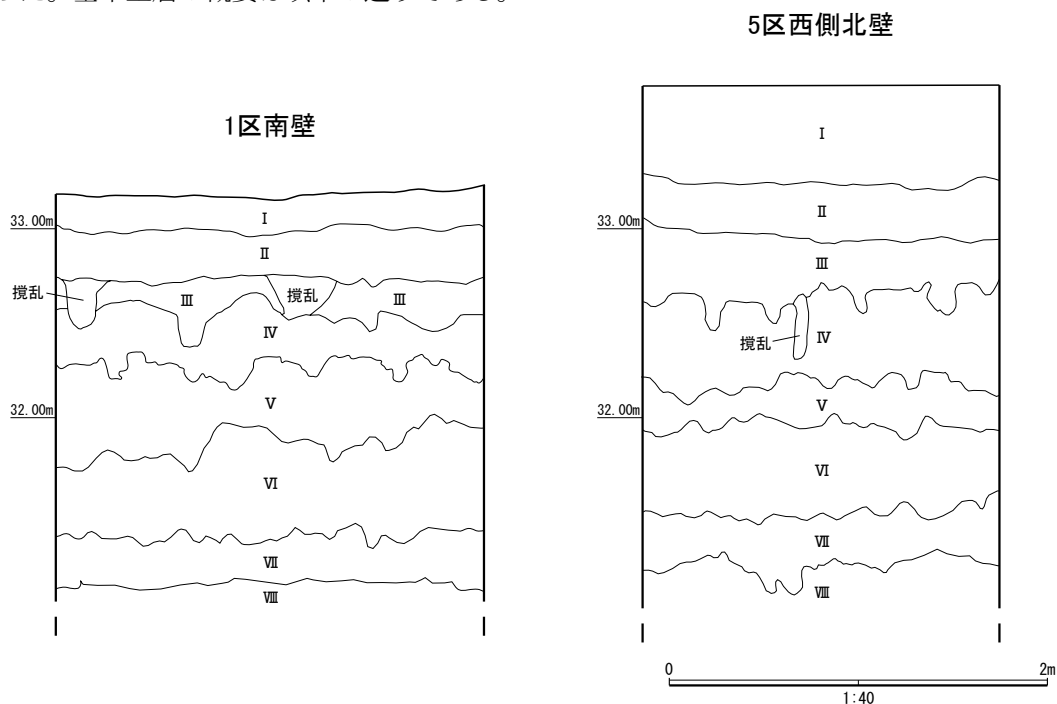
調査区の座標は公共座標を基準に設定した。

調査対象地は幅2mほどの東西に細長い道路であるが、周辺住民の通行を確保するために6ヶ所にわたって調査区を設定し、西から東に向かって1～6区と呼称するとともに、歩行者通行スペースを除いた幅0.85mの部分について、順次、発掘調査を実施した。調査総面積は157㎡を測るが、調査区はいずれも狭小であったことから、実際の発掘作業には大きな制約が伴うこととなった。

調査にあたっては、重機を用いて道路路盤と碎石層を撤去し、表土を除去した後、主として人力で遺構確認面までの掘り下げを行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。（林）

3-2 基本土層

1区と5区西側の2箇所にとわたって基本土層確認のためのテストピットを深く設け、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。

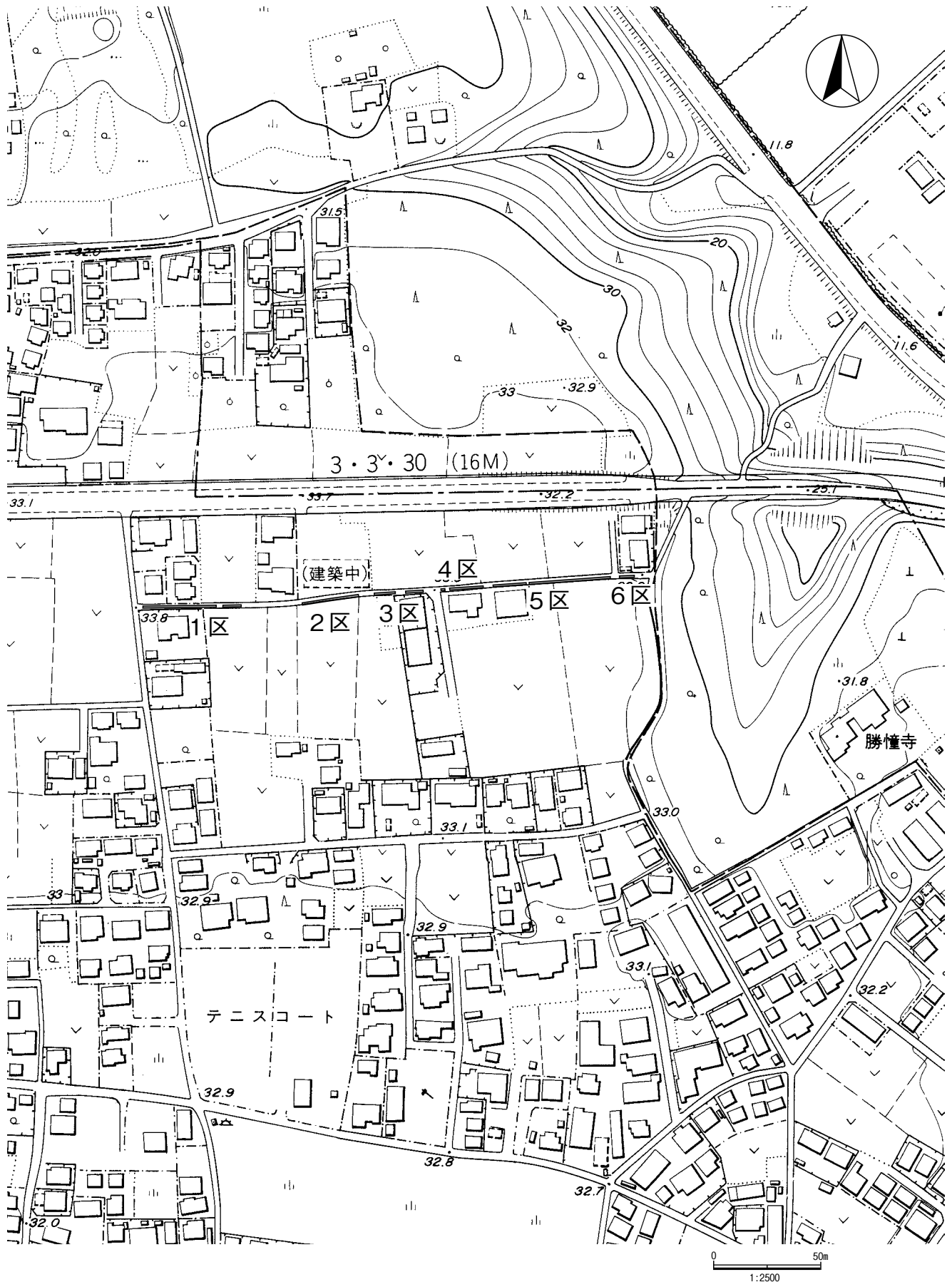


第3図 基本土層図

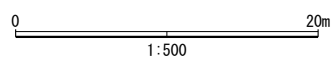
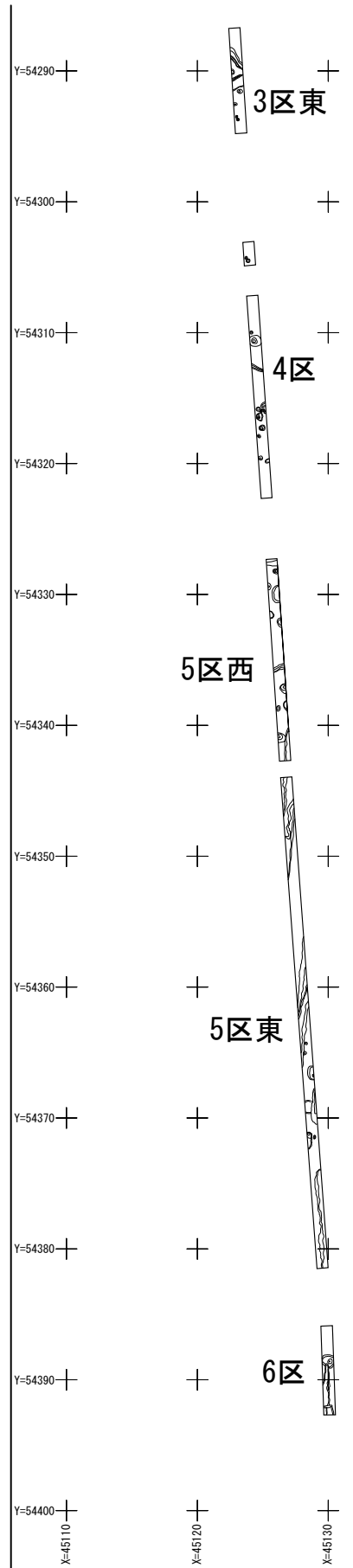
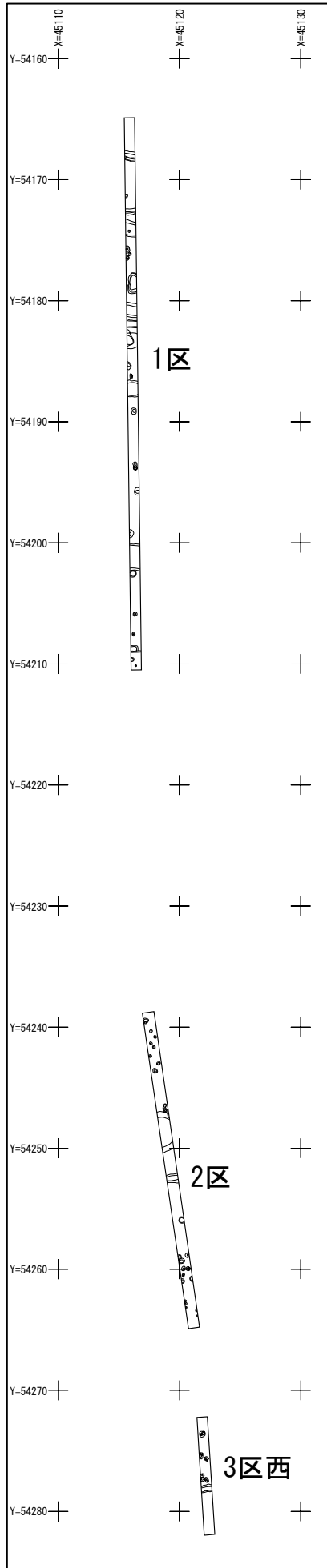
I層 碎石・盛土層

II層 近世の耕作土層

III層 10YR2/3 黒褐色土層 ローム粒を微量含む。やや粘性をもち、ややしまる。



第4図 調査区の位置



第5図 調査区方眼図

- Ⅳ層 10YR4/6 褐色土層 ローム粒を少量含む、粘性をもち、しまる。
- Ⅴ層 10YR5/8 黄褐色ローム層 黒色粒子を微量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- Ⅵ層 10YR5/4 黄褐色ローム層 黒色粒子を微量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- Ⅶ層 鹿沼軽石層
- Ⅷ層 10YR7/1 灰白色粘土層 粘性をもち、しまる。

(林)

3-3 遺構

今回、調査を実施した1～6区は観音堂山地区の東部、伽藍中枢より東へ400mほど離れた那珂川を臨む台地縁辺部に位置する。近隣では平成6年の都市計画道路3・6・30号線整備に伴う発掘調査(台渡里第8次)、平成8年の共同住宅建設に伴う確認調査(台渡里第9次)などが実施され、路線内を横切る南北方向の柵列や竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、近世の墓壙などが検出されている。

今回の調査は、公共下水道工事に伴う記録調査を目的に実施されたものである。以下、各調査区ごとに検出された遺構の説明を行う。なお、ピットの詳細についてはピット一覧表を参照されたい。

(1) 1区の遺構

長さ46.5m、幅0.85mの東西に細長い調査区である。調査対象地の道路北側に水道管が東西方向に埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかった。Ⅲ層上面までの深さは約0.4～0.9mに達した。

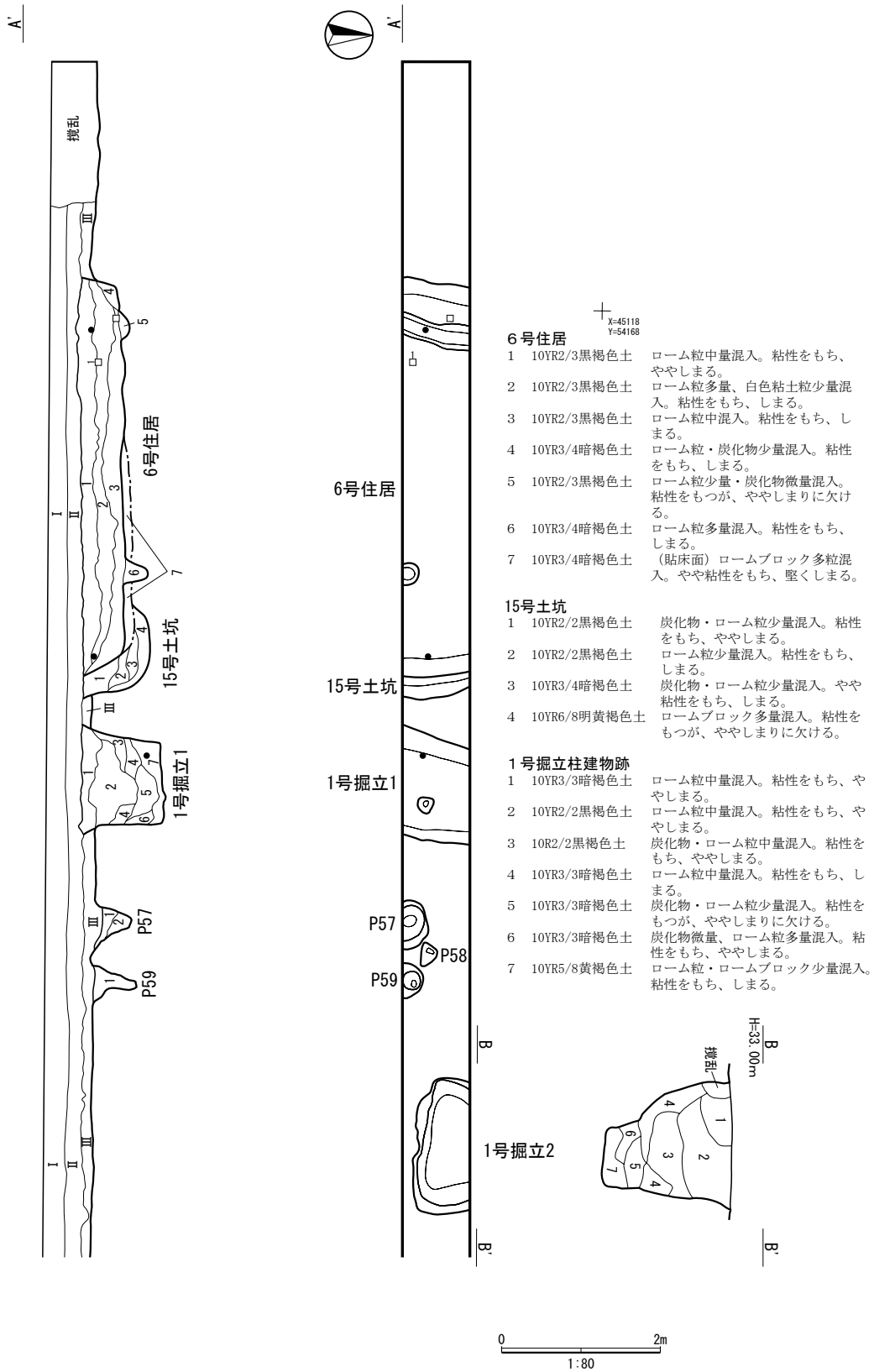
遺構としては、調査区の広い範囲から竪穴住居跡3軒(5・6・8号)、掘立柱建物跡1棟(1号)、溝1条(4号)、土坑2基(14・15号)、井戸2基(2・3号)、ピット10基(P57～P61・P63～P67)が検出された。

5号竪穴住居跡

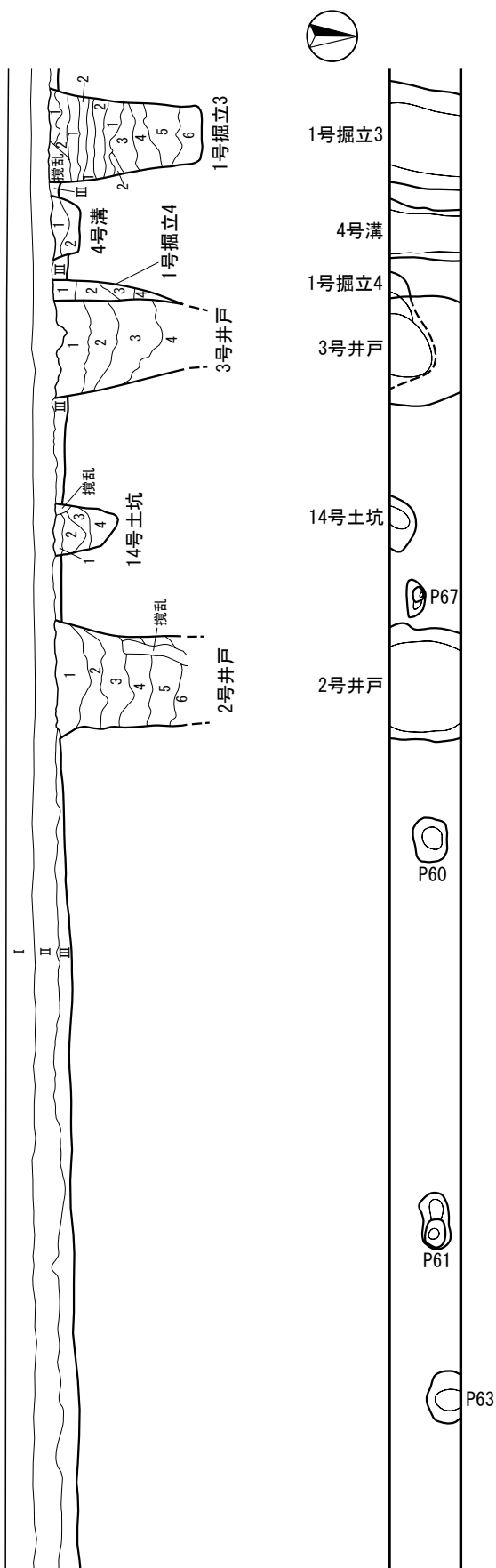
1区の東側に位置する。西側で8号住居跡を切る。上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。東・西壁および床面の一部が確認されただけであり、平面形、全体の規模、長軸方向などは不明である。確認部分の東西の長さは695cmを測る。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は50cmを測る。黄褐色土とロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。東壁に沿って周溝の一部が検出された。幅40～45cm、深さ20～25cmを測る。住居内より合計3基のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、口径34～60cm、深さ28～44cmを測り、本住居に伴う柱穴が含まれていた可能性が強い。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に小さな起伏をもち、床面からの深さは最大16cmを測る。遺物は土師器片5点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると8号住居跡に後続する。

6号竪穴住居跡

1区の西側に位置する。東側で15号土坑を切る。上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。東・西壁および床面の一部が確認されただけであり、平面形、全体の規模、長軸方向などは



第6図 1区遺構図(1)



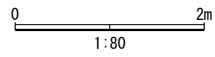
- 1号掘立柱建物跡**
- 1 10VR3/3暗褐色土 ローム粒中量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 2 10VR2/2黒褐色土 ローム粒中量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 3 10R2/2黒褐色土 炭化物・ローム粒中量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 4 10VR3/3暗褐色土 ローム粒中量混入。粘性をもち、しまる。
 - 5 10VR3/3暗褐色土 炭化物・ローム粒少量混入。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。
 - 6 10VR3/3暗褐色土 炭化物微量、ローム粒多量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 7 10VR5/8黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入。粘性をもち、しまる。

- 4号溝**
- 1 10VR2/3黒褐色土 ローム粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 2 10VR2/3黒褐色土 炭化物・ローム粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。

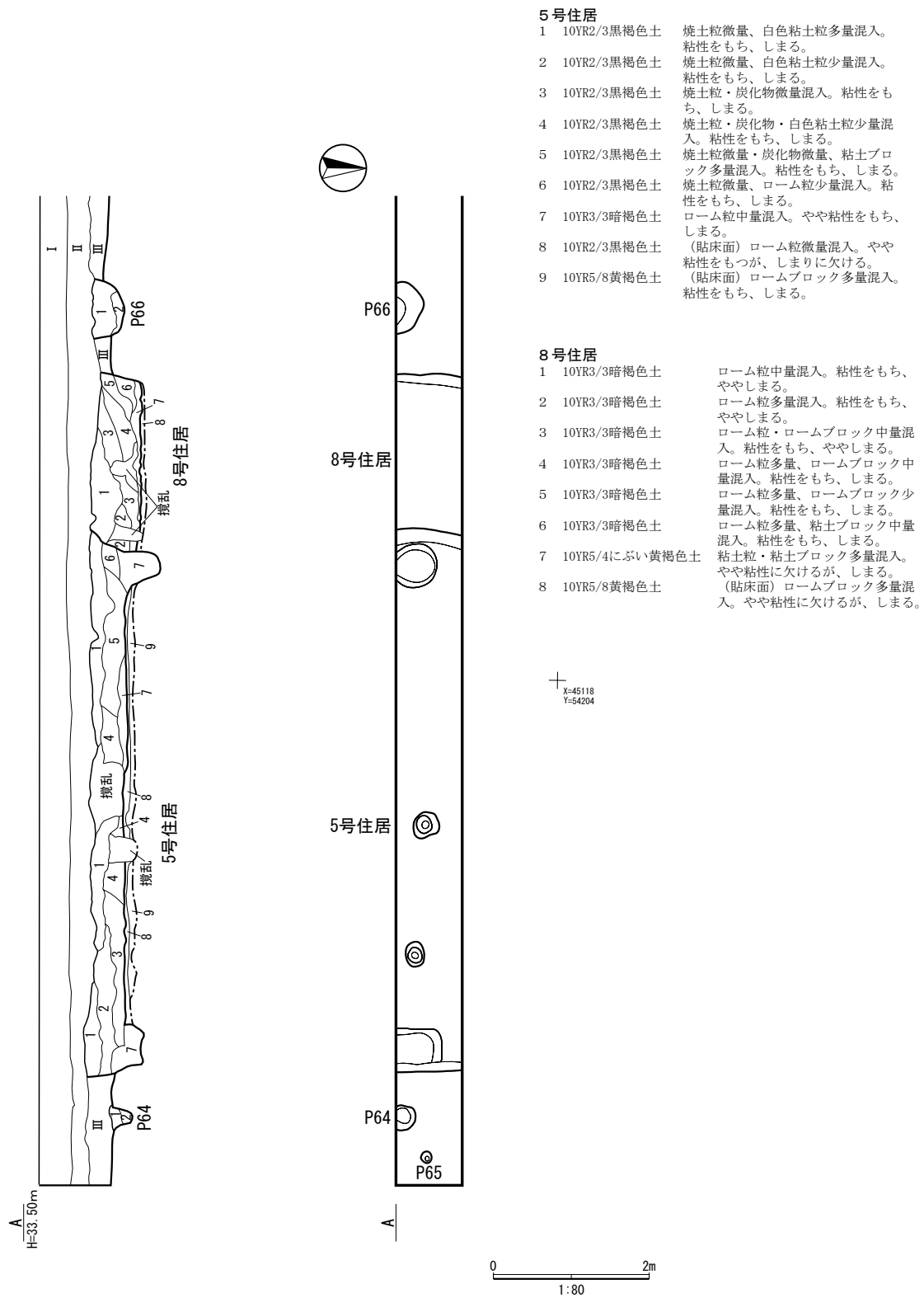
- 2号井戸**
- 1 10VR2/3黒褐色土 焼土粒・粘土粒微量混入。粘性をもち、しまる。
 - 2 10VR2/3黒褐色土 粘土粒少量混入。粘性をもち、しまる。
 - 3 10VR2/3黒褐色土 炭化物微量、粘土粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 4 10VR2/1黒色土 粘土粒・粘土ブロック中量混入。粘性をもち、しまる。
 - 5 10VR3/3暗褐色土 炭化物・粘土粒中量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 6 10VR3/4暗褐色土 粘土粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 7 10VR3/3暗褐色土 炭化物・粘土粒中量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 8 10VR5/8黄褐色土 炭化物少量、粘土粒中量混入。粘性をもち、しまる。

- 3号井戸**
- 1 10VR2/3黒褐色土 炭化物・粘土粒微量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 2 10VR2/3黒褐色土 粘土粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 3 10VR2/3黒褐色土 炭化物微量、粘土粒中量混入。粘性をもち、しまる。
 - 4 10VR3/3暗褐色土 炭化物・粘土粒中量混入。粘性をもち、しまる。

- 14号土坑**
- 1 10VR2/2黒褐色土 ローム粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 2 10VR3/4暗褐色土 炭化物・ローム粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 3 10VR2/2黒褐色土 ローム粒中量混入。粘性をもち、しまる。
 - 4 10VR3/3暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入。粘性をもち、しまる。



第7図 1区遺構図(2)



5号住居

- 1 10YR2/3黒褐色土 焼土粒微量、白色粘土粒多量混入。粘性をもち、しまる。
- 2 10YR2/3黒褐色土 焼土粒微量、白色粘土粒少量混入。粘性をもち、しまる。
- 3 10YR2/3黒褐色土 焼土粒・炭化物微量混入。粘性をもち、しまる。
- 4 10YR2/3黒褐色土 焼土粒・炭化物・白色粘土粒少量混入。粘性をもち、しまる。
- 5 10YR2/3黒褐色土 焼土粒微量・炭化物微量、粘土ブロック多量混入。粘性をもち、しまる。
- 6 10YR2/3黒褐色土 焼土粒微量、ローム粒少量混入。粘性をもち、しまる。
- 7 10YR3/3暗褐色土 ローム粒中量混入。やや粘性をもち、しまる。
- 8 10YR2/3黒褐色土 (貼床面) ローム粒微量混入。やや粘性をもつが、しまりに欠ける。
- 9 10YR5/8黄褐色土 (貼床面) ロームブロック多量混入。粘性をもち、しまる。

8号住居

- 1 10YR3/3暗褐色土 ローム粒中量混入。粘性をもち、ややしまる。
- 2 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、ややしまる。
- 3 10YR3/3暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量混入。粘性をもち、ややしまる。
- 4 10YR3/3暗褐色土 ローム多量、ロームブロック中量混入。粘性をもち、しまる。
- 5 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量混入。粘性をもち、しまる。
- 6 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量、粘土ブロック中量混入。粘性をもち、しまる。
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック多量混入。やや粘性に欠けるが、しまる。
- 8 10YR5/8黄褐色土 (貼床面) ロームブロック多量混入。やや粘性に欠けるが、しまる。

X=45118
Y=54204

第8図 1区遺構図(3)

不明である。確認部分の東西の長さは 498 cm を測る。東側の壁は緩傾斜、西側の壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は 53 cm を測る。西側の床面は V 層中に形成されていたが、東側は黄褐色土とロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、堅緻である。西壁からやや離れて周溝が検出された。幅 28 ～ 32 cm、深さ 8 ～ 10 cm を測る。住居内よりピット 1 基が検出された。口径 30 cm、深さ 28 cm を測り、本住居内に伴う柱穴であった可能性が高い。掘り方は部分的であり、西側には認められなかった。全体的に小さな起伏をもち、床面からの深さは最大 12 cm を測る。遺物は縄文土器片 1 点、須恵器片 58 点、土師器片 45 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係を見ると 15 号土坑に後続する。

8号竪穴住居跡

1 区の東側に位置する。東側を 5 号住居に切られる。上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。西壁および床面の一部が確認されただけであり、平面形、全体の規模、長軸方向などは不明である。確認部分の壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は 53 cm を測る。黄褐色土とロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。住居内より周溝やピットは検出されなかった。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大 10 cm を測る。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係を見ると 5 号住居跡に先行する。

1号掘立柱建物跡

1 区の中央部から西側にかけて東西に配列された合計 4 基の大型のピットが検出された。いずれも一部が確認されただけであり、4 号柱穴のように大部分を 3 号井戸に切られるものも含まれるため、平面形、全体の規模、主軸方向などは不明である。確認部分の口径は 140 ～ 160 cm 以上、深さ 110 ～ 174 cm を測る。断面は逆台形に近く、特に 3・4 号柱穴はほぼ垂直に深く掘りこまれている。1・2 号柱穴の間隔は 460 cm と広いが、3・4 号柱穴の間隔は 230 cm と短く、しかも覆土上部には版築状の堆積も認められることから、3・4 号柱穴は 1・2 号柱穴とは別の、布掘り基礎の建物であった可能性も考えられる。遺物は 1 号柱穴より土師器片 14 点、3 号柱穴より土師器片 1 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して 8 世紀前葉～中葉、奈良時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係を見ると 3 号井戸に先行する。

4号溝

1 区の中央部西寄りに位置する。調査区を南北にほぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は 0.9 m、上幅 0.7 m 以上、底幅 0.4 m 以上、深さ 34 cm を測る。主軸の方向は N - 3° - E である。上部を削平されているが、断面は葉研状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は 32.7m を測る。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や掘り込み面および覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が高い。

14号土坑

1 区のほぼ中央部に位置する。平面形は楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認された

だけであり、全容は不明である。確認部の東西の径は 64 cm、深さ 74 cm を測る。断面は筒状を呈し、壁は比較的急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもち、北西側に向かって傾斜している。遺物は土師器片 1 点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して 8 世紀前葉～中葉、奈良時代の所産であった可能性が強い。

15 号土坑

1 区の西側に位置する。西側の大部分を 6 号住居跡に切られており、全容は不明であるが、平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われる。残存部の南北の径は 90 cm 以上、深さ 80 cm を測る。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸みをもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 6 号住居跡に先行する。

2 号井戸

1 区のはぼ中央部に位置する。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の東西の径は 134 cm、深さ 160 cm 以上を測る。断面は筒状を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、上部はやや開き気味に立ち上がる。遺物は鉄滓 1 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が強い。

3 号井戸

1 区の中央部西寄りに位置する。西側で 1 号掘立柱建物跡の柱穴 4 を切る。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の東西の径は 136 cm、深さ 160 cm 以上を測る。断面は筒状に近く、壁は急傾斜で掘り込まれている。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 1 号掘立柱建物跡に後続する。

ピット群

合計 10 基のピットが検出された。調査区の広い範囲に散在しており、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径 15 ～ 62 cm、深さ 28 ～ 52 cm を測る。61 号ピットより土師器片 1 点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して大部分が中世～近世の所産であったと思われる。

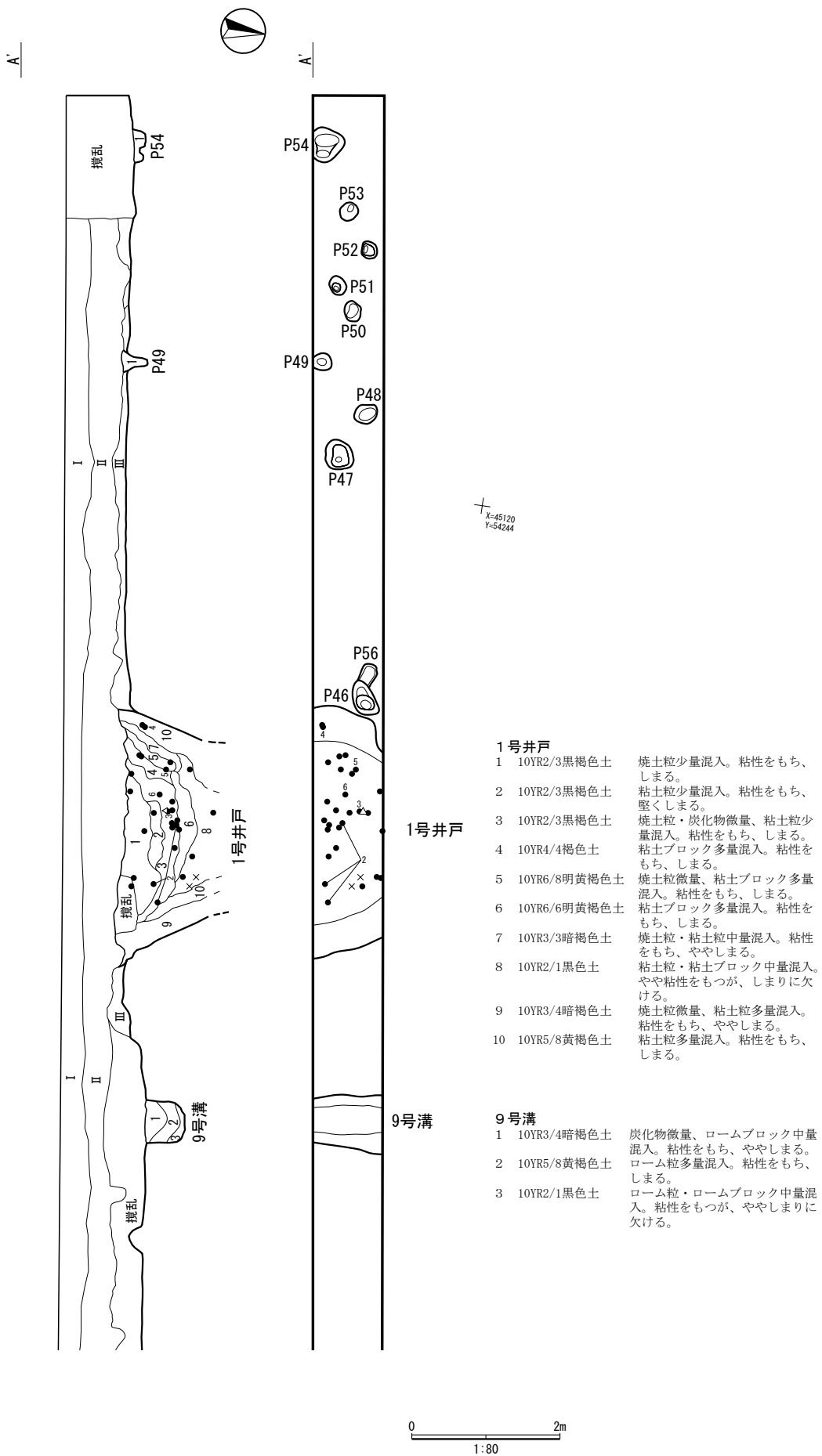
(2) 2 区の遺構

長さ 26.3m、幅 0.85m の東西に細長い調査区である。調査対象地の道路北側に水道管が東西方向に埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかった。Ⅲ層上面までの深さは約 0.6 ～ 0.9m に達した。

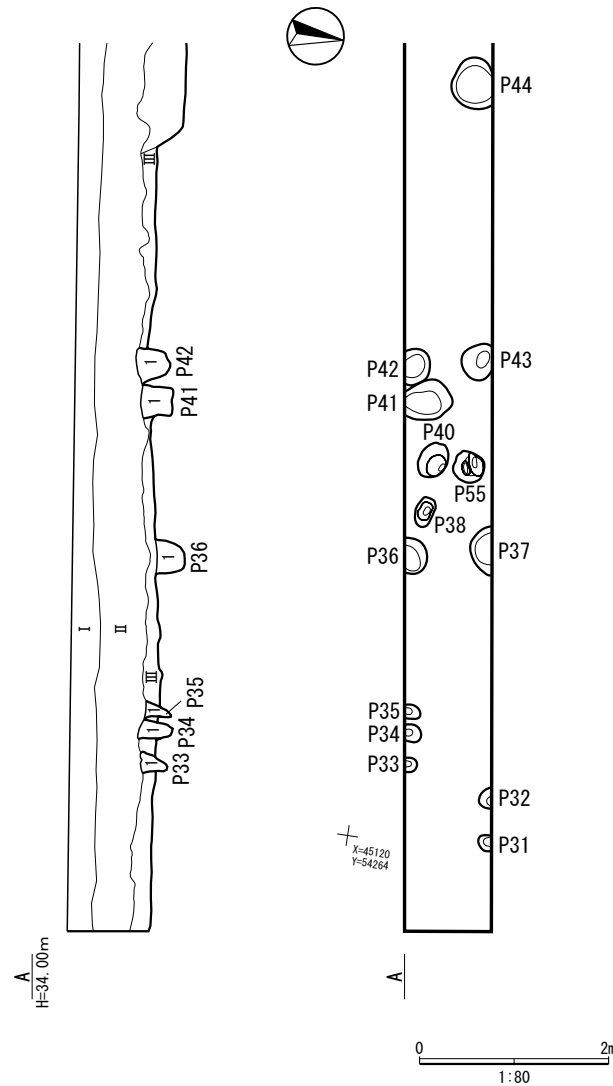
遺構としては、調査区の広い範囲から溝 1 条 (9 号)、井戸 1 基 (1 号)、ピット 24 基 (P 31 ～ P 38 ・ P 40 ～ P 44 ・ P 46 ～ P 56) が検出された。

9 号溝

2 区のはぼ中央部に位置する。調査区を南北にはぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は 0.9 m、上幅 0.7 m 以上、底幅 0.3 m 以上、深さ 55 cm を測る。主軸の方向は N - 4° - W である。上部を削平されているが、下部の断面は U 字状を呈する。



第9図 2区遺構図(1)



第10図 2区遺構図(2)

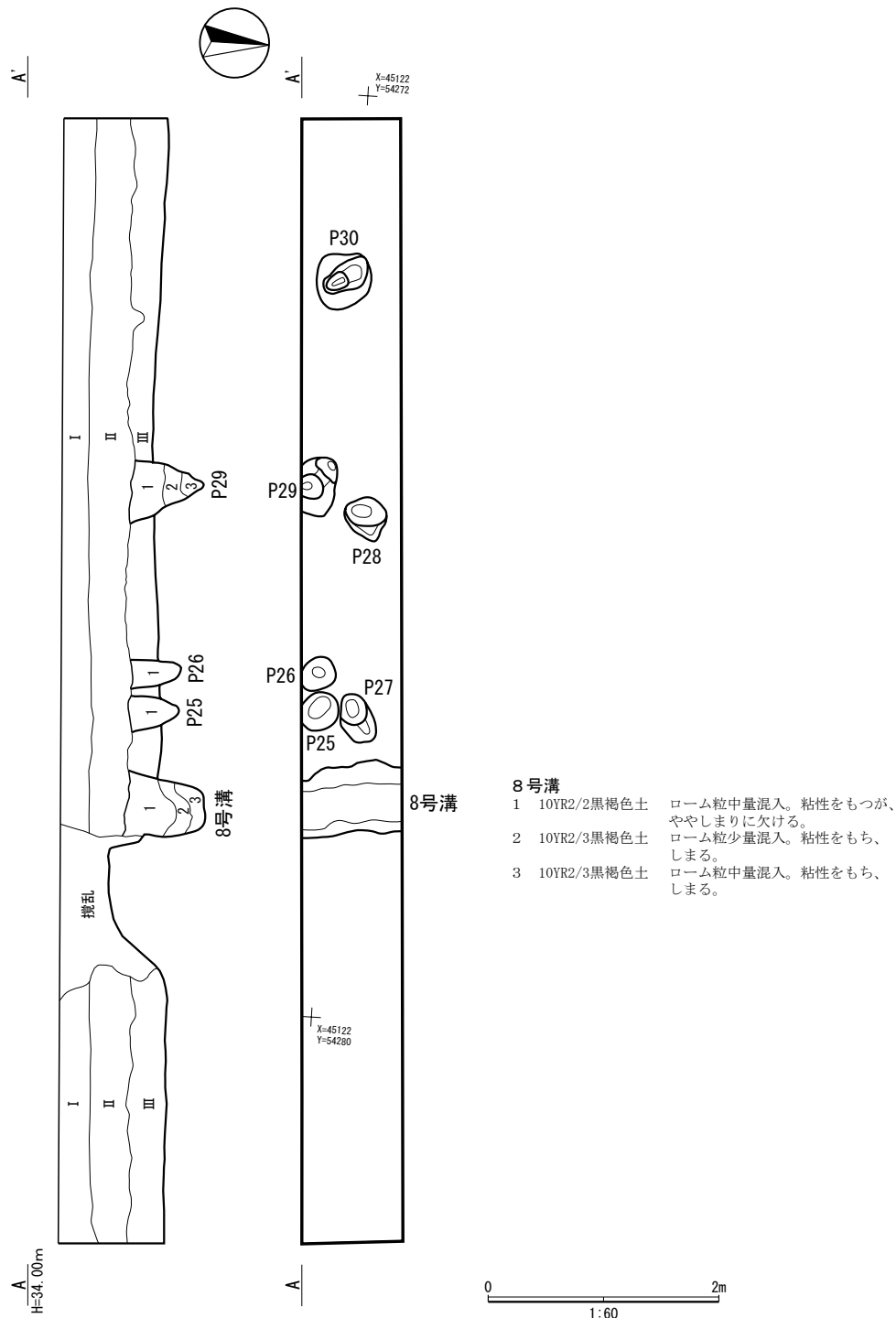
確認範囲は限られるが、底面の標高は31.8mを測る。遺物は須恵器片1点、土師器片5点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が強い。

1号井戸

2区の中央部西寄りに位置する。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の東西の径は350cm、深さ130cm以上を測る。断面は上部がやや開き気味に立ち上がる筒状を呈する。遺物は縄文土器片1点、須恵器片41点、土師器片93点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して8世紀後葉～9世紀前葉、奈良・平安時代の所産であった可能性が強い。

ピット群

合計24基のピットが検出された。調査区の東側と西側に集中的に分布しているが、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径14～54cm、深さ16～32cmを測る。31号ピットより須恵器片1点、46号ピットより土師器片1点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して大部分が



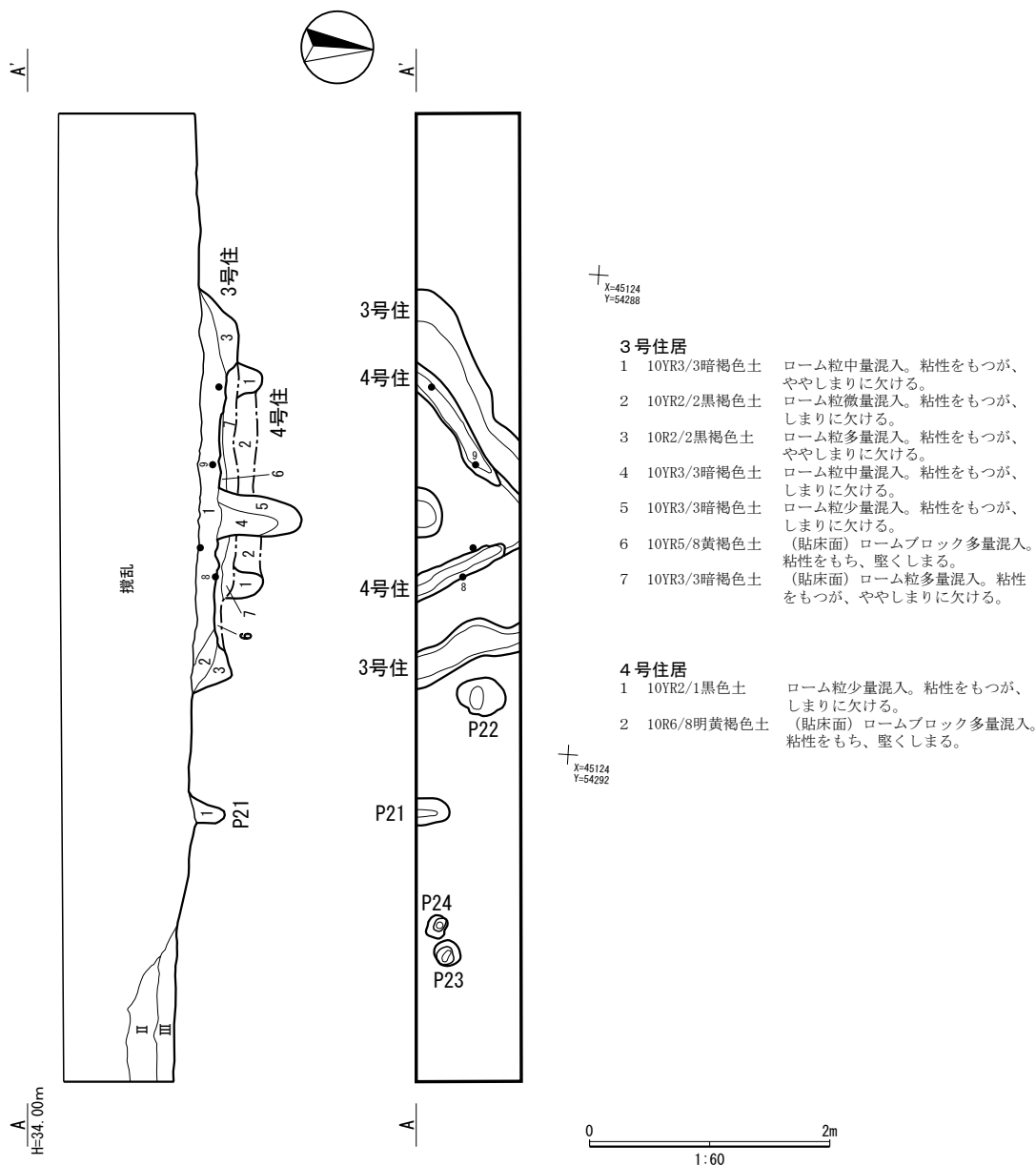
第11図 3区西側遺構図

中世～近世の所産であったと思われる。

(3) 3区西側の遺構

長さ9.7m、幅0.85mの東西に細長い調査区である。Ⅲ層上面までの深さは約0.6～0.7mに達した。遺構としては、調査区中央部東寄りから溝1条（8号）、中央部から西側にかけてピット6基（P25～P30）が検出された。

8号溝



第 12 図 3 区東側遺構図

3 区西側の中央部東寄りに位置する。調査区を南北にほぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は 0.9 m、上幅 0.7 m 以上、底幅 0.3 m 以上、深さ 71 cm を測る。主軸の方向は $N - 8^{\circ} - W$ である。上部を削平されているが、下部の断面は U 字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は 32.4m を測る。遺物は須恵器片 1 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。

ピット群

合計 6 基のピットが検出された。調査区の中央部から西側に集中分布しているが、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径 32 ~ 50 cm、深さ 16 ~ 44 cm を測る。28 号ピットより土師器片 3 点、29 号ピットより土師器片 1 点、30 号ピットより土師器片 2 点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して大部分が中世～近世の所産であったと思われる。

(4) 3区東側の遺構

長さ 8.0m, 幅 0.85m の東西に細長い調査区である。Ⅲ層上面までの深さは約 0.8m に達した。

遺構としては、調査区の中央部から西側にかけて竪穴住居跡 2 軒 (3・4 号), 東側からピット 4 基 (P 21 ~ P 24) が検出された。Ⅲ層の中位近くまで攪乱による削平を受けており、遺構の遺存状態は全体に不良である。

3号竪穴住居跡

3区東側の中央部から西側に位置する。下部で4号住居跡を切る。上面を大きく削平されているため、掘り込み面は不明である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、北・東壁および床面の一部が確認されただけであり、全体の規模、長軸方向などは不明である。壁は緩傾斜で掘り込まれており、最大壁高は 30 cm を測る。黄褐色土や暗褐色土、ロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。北壁と東壁に沿って周溝が検出された。幅 20 ~ 40 cm, 深さ 10 ~ 20 cm を測る。住居内より 1 基のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、口径 40 cm, 深さ 69 cm を測り、本住居に伴う柱穴であった可能性が強い。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大 14 cm を測る。遺物は土師器片 90 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して 7 世紀後葉、古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 4 号住居跡に後続する。

4号竪穴住居跡

3区東側の中央部から西側に位置する。上部を3号住居跡に切られる。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、北側と東側の周溝の一部および掘り方が確認されただけであり、全体の規模、長軸方向などは不明である。周溝は幅 10 ~ 20 cm, 深さ 15 ~ 25 cm を測る。住居内よりピットは検出されなかった。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは 20 cm 以上を測る。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 3 号住居跡に先行する。

ピット群

合計 4 基のピットが検出された。調査区の東側に集中分布しているが、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径 18 ~ 40 cm, 深さ 16 ~ 24 cm を測る。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して大部分が中世~近世の所産であったと思われる。

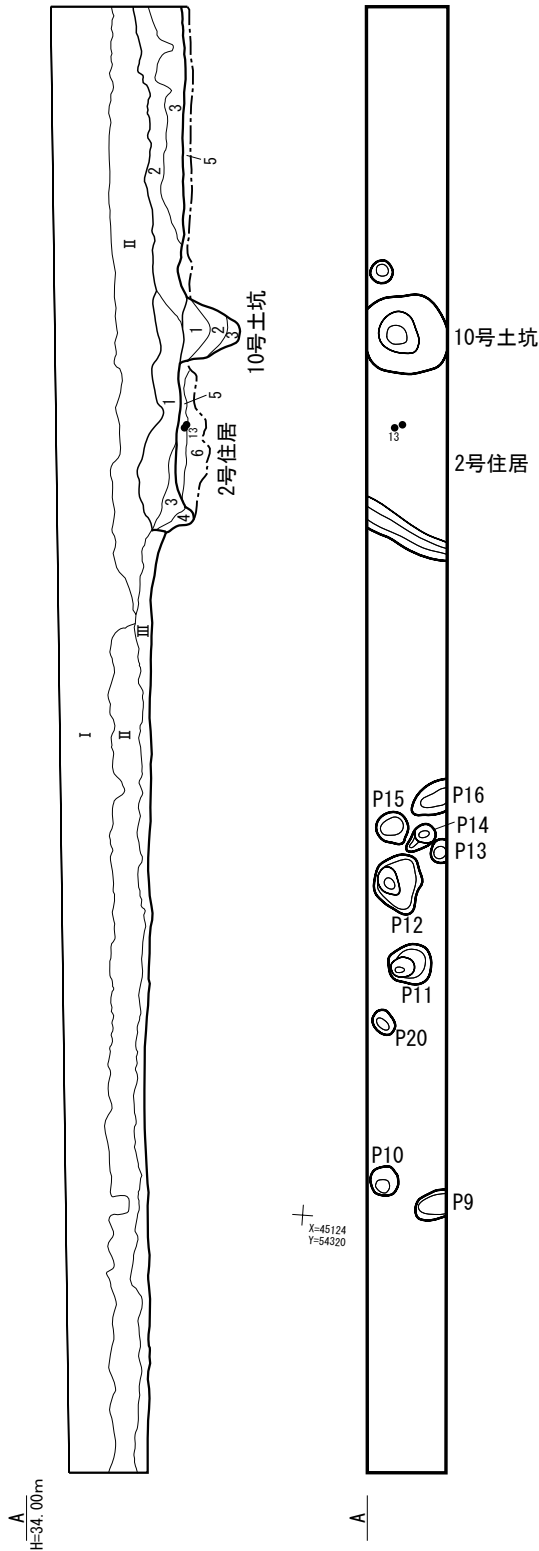
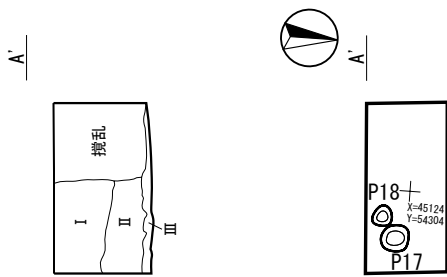
(5) 4区の遺構

長さ 19.7m, 幅 0.85m の東西に細長い調査区である。西端近くに消火栓があるため、その周囲の 2.3×0.9 m 部分については調査を行うことができなかった。Ⅲ層上面までの深さは約 0.7 ~ 1.0m に達した。

遺構としては、調査区の西側から竪穴住居跡 1 軒 (2 号), 土坑 1 基 (10 号), 調査区の広い範囲からピット 11 基 (P 9 ~ P 18・P 20) が検出された。

2号竪穴住居跡

4区の中央部西寄りに位置する。下部で10号土坑を切る。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、東壁および床面の一部が確認されただけであり、全体の規模、長軸方向などは



10号土坑

- 1 10YR5/6黄褐色土 ロームブロック多量混入。粘性をもち、ややしまる。
- 2 10YR6/8明黄褐色土 ロームブロック多量混入。粘性をもつが、しまりに欠ける。
- 3 10YR6/8明黄褐色土 ロームブロック多量混入。粘性をもち、ややしまる。

2号住居

- 1 10YR2/3黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入。粘性をもち、しまる。
- 2 10YR2/2黒褐色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
- 3 10R3/2黒褐色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、ややしまる。
- 4 10YR2/1黒色土 ロームブロック中量混入、粘性をもち、しまる。
- 5 10YR6/8明黄褐色土 (貼床面) ロームブロック多量混入。粘性をもち、しまる。
- 6 10YR2/3黒褐色土 (貼床面) ローム粒・ロームブロック多量混入。粘性をもち、ややしまる。

第13図 4区遺構図

不明である。確認部分の東西の長さは 590 cm 以上を測る。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は 18 cm を測る。明黄褐色土やロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。東壁に沿って周溝が検出された。幅 12 ～ 22 cm、深さ 12 ～ 15 cm を測る。住居内より 1 基のピットが検出された。口径 23 cm、深さ 26 cm を測る。本住居に伴う柱穴であった可能性も考えられるが、他の柱穴は一切不明であり、確定できない。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。住居中央部側は比較的浅く平坦であるが、壁寄りの部分は深く掘り込まれており、床面からの深さは最大 34 cm を測る。遺物は土師器片 8 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して 7 世紀後葉、古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 10 号土坑に後続する。

10 号土坑

4 区の西側に位置する。上部を 2 号住居跡に切られる。平面形は楕円形ないし長楕円形を呈するものと思われるが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の長径は 90 cm 以上、深さ 68 cm を測る。長軸方向は N - 8° - W である。断面は筒状に近く、坑底はやや丸みをもつ。遺物は須恵器片 1 点、土師器片 13 点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 2 号住居跡に先行する。

ピット群

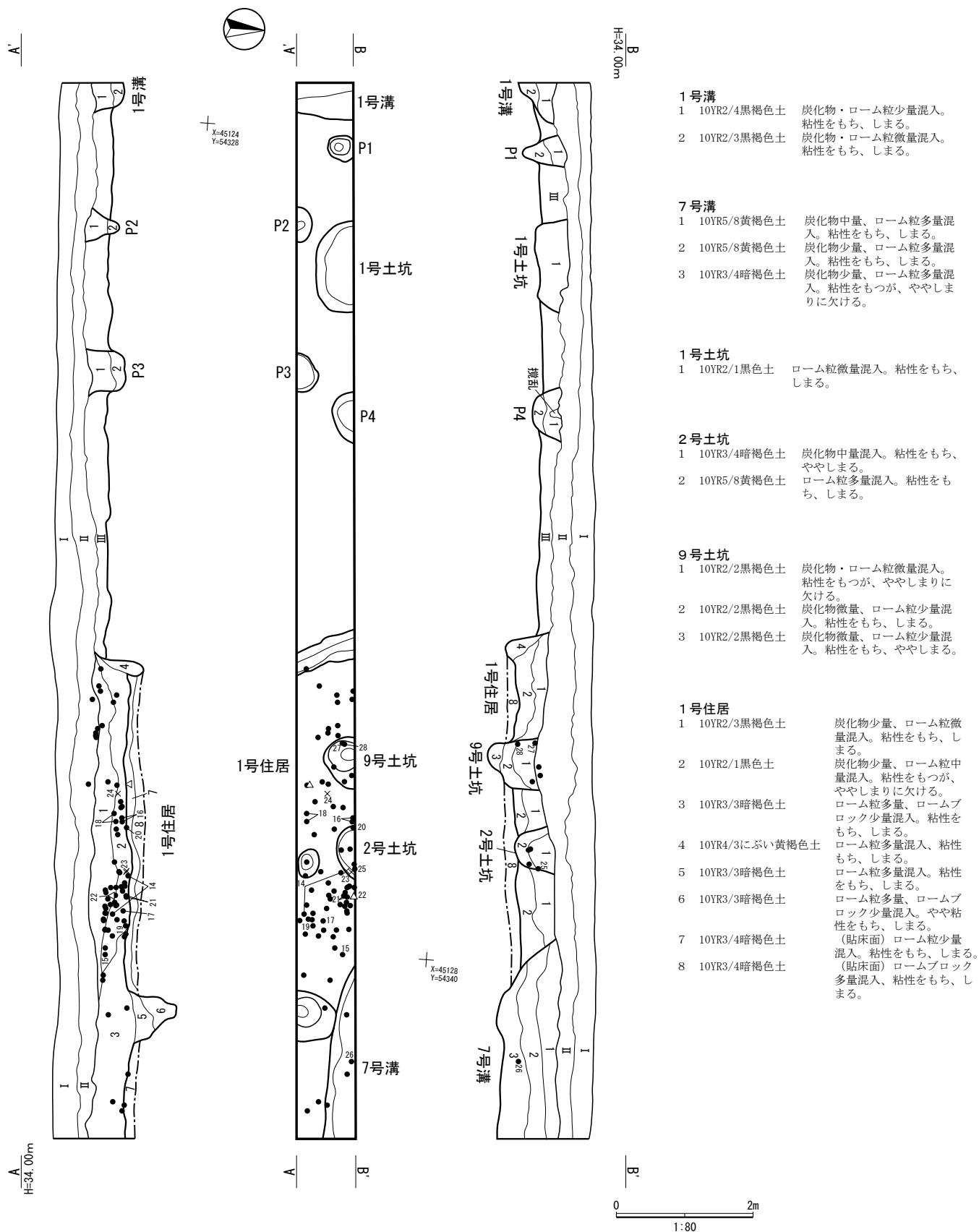
合計 11 基が検出された。調査区の広い範囲に散在しており、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径 22 ～ 64 cm、深さ 15 ～ 57 cm を測る。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して大部分が中世～近世の所産であったと思われる。

(6) 5 区西側の遺構

長さ 15.4m、幅 0.85m の東西に細長い調査区である。Ⅲ層上面までの深さは約 0.3～0.8m に達した。遺構としては、調査区の東側から竪穴住居跡 1 軒（1 号）、調査区の東端と西端から溝 2 条（1・7 号）、調査区の広い範囲から土坑 3 基（1・2・9 号）、ピット 4 基（P 1～P 4）が検出された。

1 号竪穴住居跡

5 区西側の中央部から東側に位置する。上部を 7 号溝、2・9 号土坑に切られる。西壁および床面の一部が確認されただけであり、平面形、全体の規模、長軸方向などは不明である。確認部分の東西の長さは 720 cm 以上を測る。確認部分の壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は 52 cm を測る。暗褐色土とロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。西壁に沿って周溝が検出された。幅 18 ～ 30 cm、深さ 15 ～ 21 cm を測る。住居内より 2 基のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、口径 40 ～ 78 cm、深さ 28 ～ 69 cm を測り、本住居に伴う柱穴が含まれていた可能性が強い。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大 30 cm を測る。遺物は縄文土器片 1 点、須恵器片 10 点、土師器片 164 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、掘り込み面および覆土のあり方などから判断して 7 世紀後葉、古墳時代の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 7 号溝、2・9 号土坑に先行する。



- 1号溝**
- 1 10YR2/4黒褐色土 炭化物・ローム粒少量混入。粘性をもち、しまる。
 - 2 10YR2/3黒褐色土 炭化物・ローム粒微量混入。粘性をもち、しまる。
- 7号溝**
- 1 10YR5/8黄褐色土 炭化物中量、ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
 - 2 10YR5/8黄褐色土 炭化物少量、ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
 - 3 10YR3/4暗褐色土 炭化物少量、ローム粒多量混入。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。
- 1号土坑**
- 1 10YR2/1黒色土 ローム粒微量混入。粘性をもち、しまる。
- 2号土坑**
- 1 10YR3/4暗褐色土 炭化物中量混入。粘性をもち、ややしまる。
 - 2 10YR5/8黄褐色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
- 9号土坑**
- 1 10YR2/2黒褐色土 炭化物・ローム粒微量混入。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。
 - 2 10YR2/2黒褐色土 炭化物微量、ローム粒少量混入。粘性をもち、しまる。
 - 3 10YR2/2黒褐色土 炭化物微量、ローム粒少量混入。粘性をもち、ややしまる。
- 1号住居**
- 1 10YR2/3黒褐色土 炭化物少量、ローム粒微量混入。粘性をもち、しまる。
 - 2 10YR2/1黒色土 炭化物少量、ローム粒中量混入。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。
 - 3 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量混入。粘性をもち、しまる。
 - 4 10YR4/3にぶい黄褐色土 ローム粒多量混入、粘性をもち、しまる。
 - 5 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
 - 6 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量混入。やや粘性をもち、しまる。
 - 7 10YR3/4暗褐色土 (貼床面) ローム粒少量混入。粘性をもち、しまる。
 - 8 10YR3/4暗褐色土 (貼床面) ロームブロック多量混入、粘性をもち、しまる。

第 14 図 5 区西側遺構図

1号溝

5区西側の西端に位置する。調査区を南北にほぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は0.9m、上幅0.6m以上、底幅0.3m以上、深さ63cmを測る。主軸の方向はN-5°-Eである。上部を削平されているが、下部の断面はU字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は32.4mを測る。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。

7号溝

5区西側の東端に位置する。5区東側の7号溝の西側部分にあたる。下部で1号住居跡を切る。調査区東端から北西方向にほぼ直進しているが、両端および北側の大部分が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は2.6m、上幅0.5m以上、底幅0.4m以上、深さ90cmを測る。主軸の方向はN-80°-Wである。断面は薬研状を呈するものと思われる。底面は全体的に起伏をもつ。確認範囲は限られるが、底面の標高は32.1～32.2mを測る。遺物は西・東側あわせて須恵器片4点、土師器片3点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると1号住居跡に後続する。

1号土坑

5区西側の西側に位置する。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、北側が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の東西の径は135cm、深さ51cmを測る。断面は筒状に近く、坑底はやや起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。

2号土坑

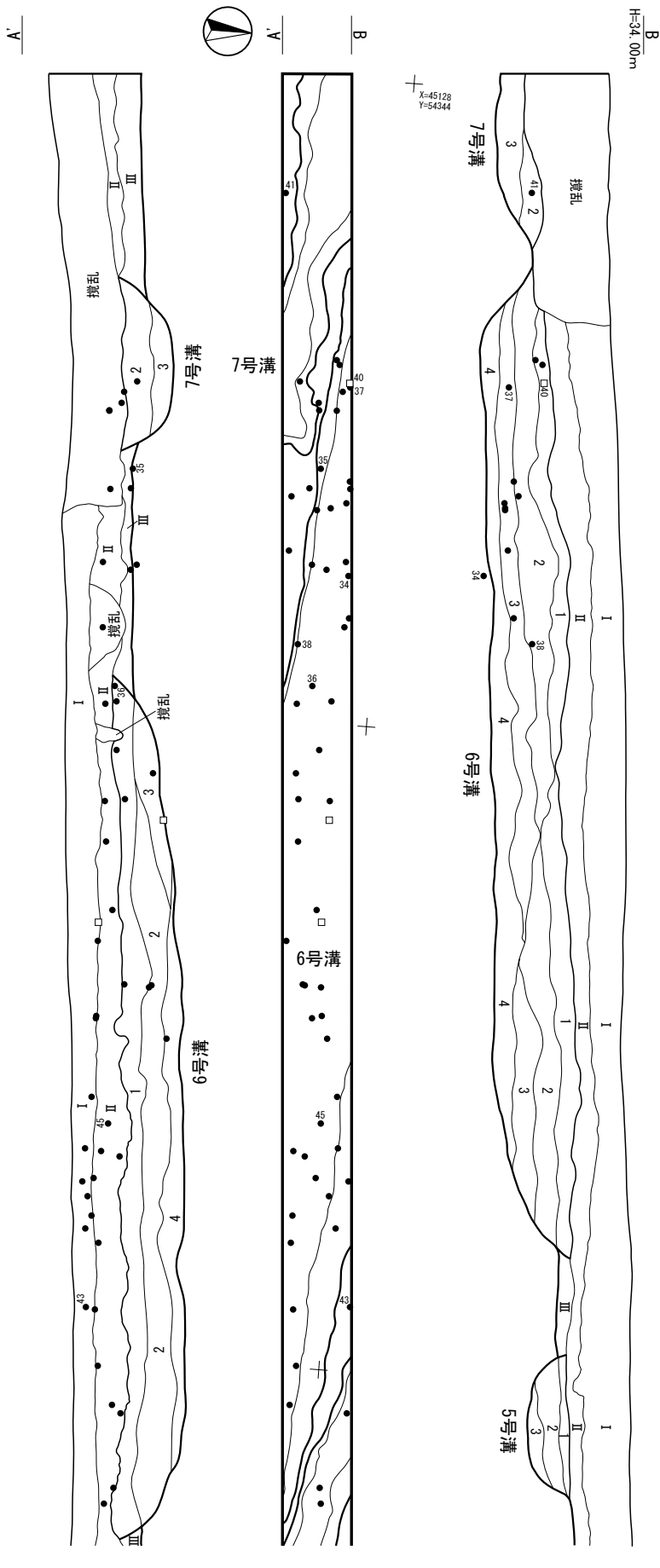
5区西側の東側に位置する。下部で1号住居跡を切る。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、北側が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の東西の径は70cm、深さ55cmを測る。断面は筒状に近く、坑底は丸味をもつ。遺物は須恵器片2点、土師器片8点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると1号住居跡に後続する。

9号土坑

5区西側の中央部東寄りに位置する。東側に近接して2号土坑が分布する。下部で1号住居跡を切る。東側に2号土坑が近接して分布する。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、北側が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の東西の径は76cm、深さ72cmを測る。断面は筒状に近く、坑底は起伏をもつ。遺物は須恵器片1点、土師器片1点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると1号住居跡に後続する。

ピット群

合計4基が検出された。調査区の西側に偏在しており、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径38～72cm、深さ50～54cmを測る。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して大部分が中世～近世の所産であったと思われる。



5号溝

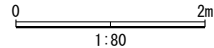
- 1 10YR2/1黒色土 ローム粒微量混入。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。
- 2 10YR2/3黒褐色土 ローム粒少量混入。粘性をもち、しまる。
- 3 10YR2/3黒褐色土 ローム粒微量混入。粘性をもち、ややしまる。

6号溝

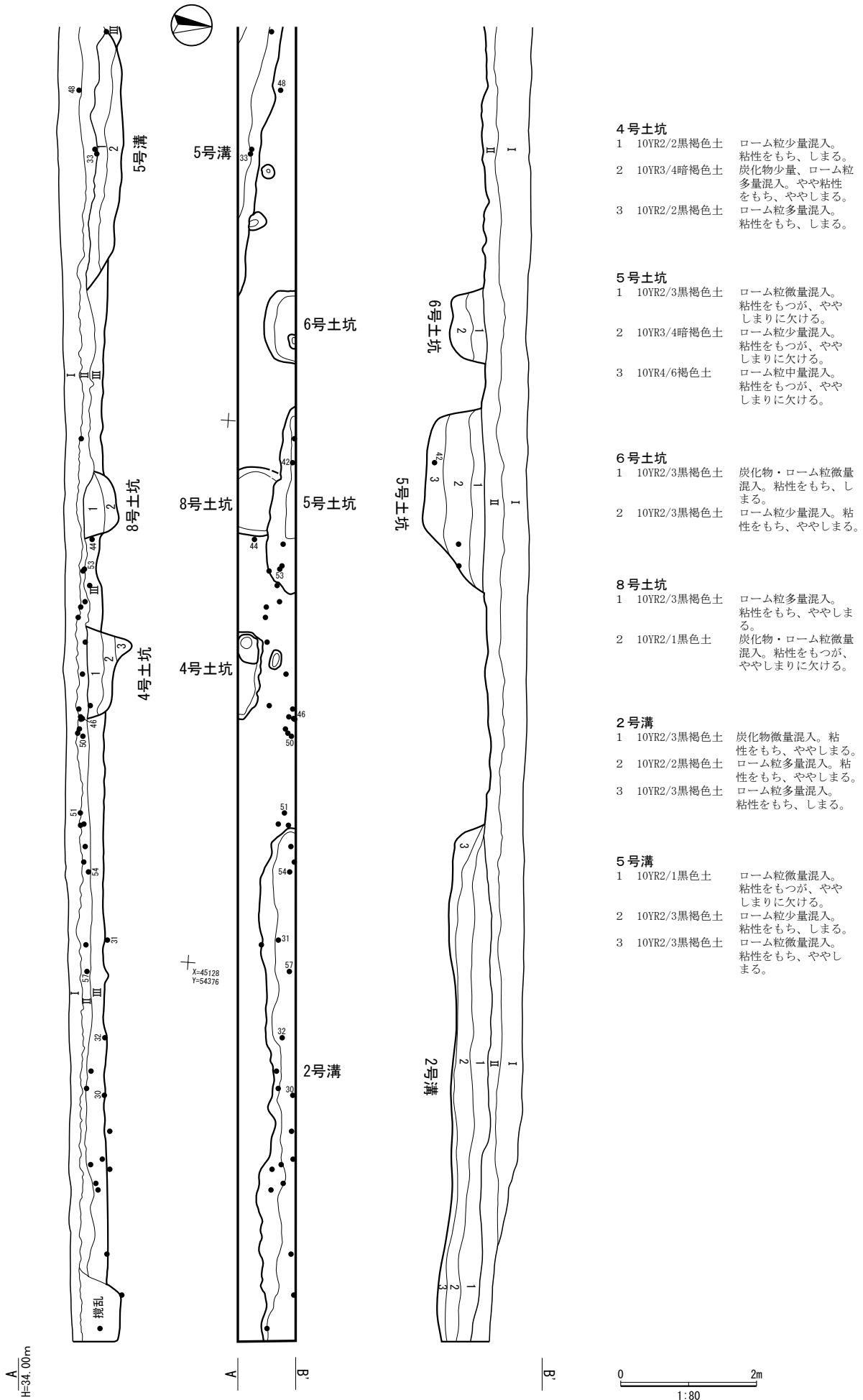
- 1 10YR2/3黒褐色土 ローム粒中量、白色粘土粒少量混入。粘性をもち、しまる。
- 2 10YR2/3黒褐色土 ローム粒多量、白色粘土粒中量混入。粘性をもち、しまる。
- 3 10YR2/1黒色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
- 4 10YR2/3黒褐色土 ローム粒多量混入。粘性をもち、ややしまる。

7号溝

- 1 10YR5/8黄褐色土 炭化物中量、ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
- 2 10YR5/8黄褐色土 炭化物少量、ローム粒多量混入。粘性をもち、しまる。
- 3 10YR3/4暗褐色土 炭化物少量、ローム粒多量混入。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。



第 15 図 5区東側遺構図 (1)



第16図 5区東側遺構図(2)

(7) 5区東側の遺構

長さ 37.4m、幅 0.85 mの東西に細長い調査区である。Ⅲ層上面までの深さは約 0.3 ～ 0.7m に達した。

遺構としては、調査区の広い範囲から溝 4 条（2・5～7号）、調査区の東側から土坑 4 基（4～6・8号）が検出された。

2号溝

5区東側の東部に位置する。調査区東端から西方向にほぼ直進している。両端および北側の大部分が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は 7.5m、上幅 0.6 m以上、底幅 0.4 m以上、深さ 60cm を測る。主軸の方向は N - 89° - E である。断面は葉研状を呈するものと思われる。底面は全体的に起伏をもつ。確認範囲は限られるが、底面の標高は 32.6 ～ 32.7m を測る。遺物は須恵器片 16 点、土師器片 6 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して 8 世紀後葉～9 世紀前葉、奈良・平安時代の所産であった可能性が強い。

5号溝

5区東側の中央部に位置する。南西側に 6号溝が近接して並走する。調査区南東側から北西方向にほぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は 4.6 m、上幅 0.7 m以上、底幅 0.4 m以上、深さ 52 cm を測る。主軸の方向は N - 76° - W である。断面は U 字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は 32.5m を測る。遺物は弥生土器片 1 点、須恵器片 2 点、土師器片 2 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して 8 世紀後葉～9 世紀前葉、奈良・平安時代の所産であった可能性が強い。

6号溝

5区東側の中央部から西部に位置する。北東側に 5号溝、北西側に 7号溝がそれぞれ近接して並走する。調査区南東側から北西方向にほぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長 5.3 m、上幅推定幅 2.0 m、底幅推定幅 1.6 m以上、深さ 101 cm を測る。主軸の方向は N - 81° - W である。断面は U 字状を呈する。底面は全体的に起伏をもつ。確認範囲は限られるが、底面の標高は 32.0 ～ 32.2m を測る。遺物は弥生土器片 1 点、須恵器片 50 点、土師器片 23 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して 8 世紀後葉～9 世紀前葉、奈良・平安時代の所産であった可能性が強い。

7号溝

5区東側の西部に位置する。5区西側の 7号溝の東側部分にあたる。調査区南東側から北西方向にわずかに蛇行しながら走るが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長 4.2 m、上幅 0.7 m以上、底幅 0.5 m以上、深さ 66 cm を測る。主軸の方向は N - 81° - W である。断面は開いた U 字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は 32.1 ～ 32.2m を測る。遺物は西・東側あわせて須恵器片 4 点、土師器片 3 点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が強い。

4号土坑

3-4 遺物

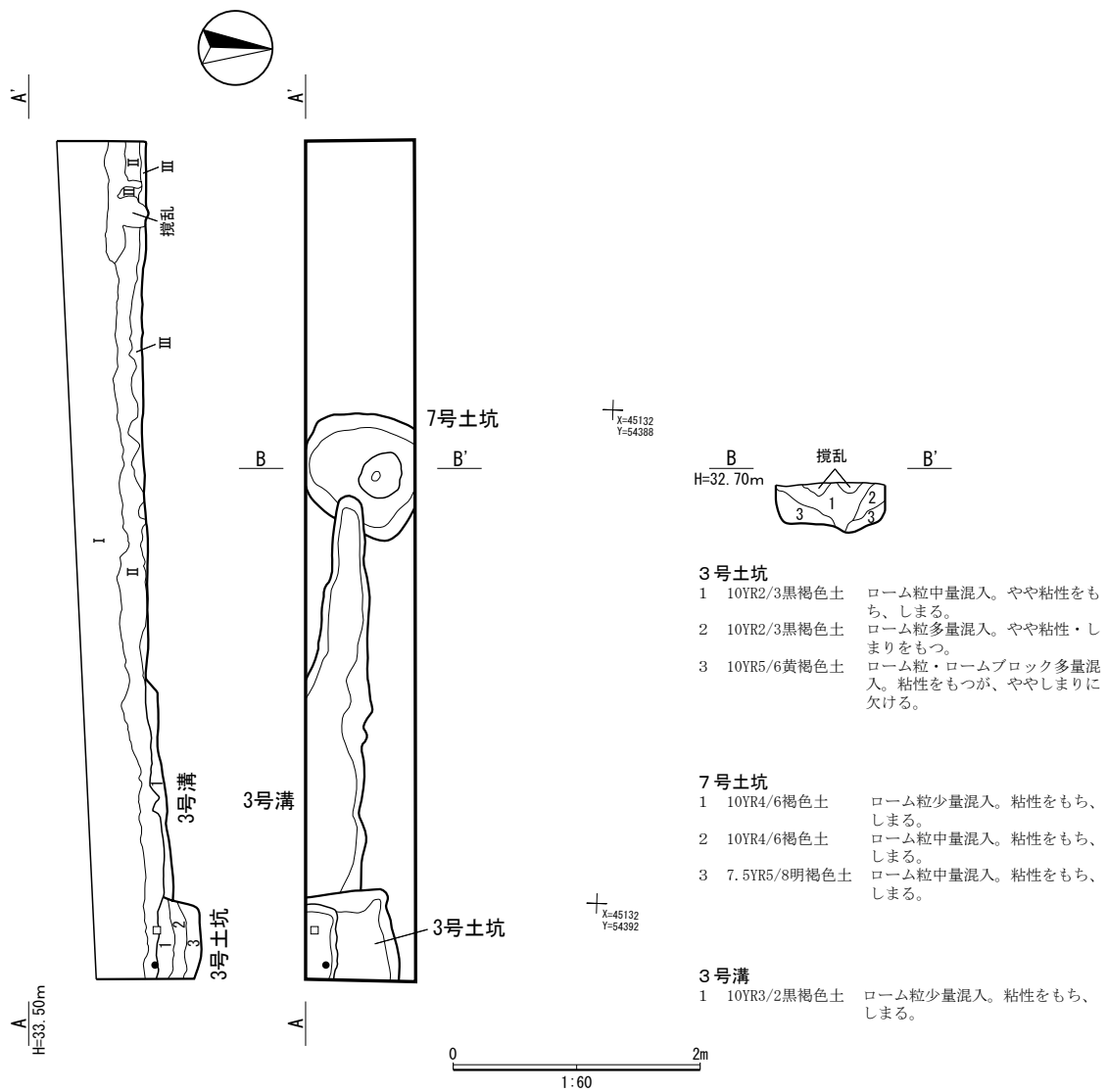
今回の調査地点からは縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、古代瓦、陶器、磁器、瓦質土器、在地系土器、磨石、砥石、刀子、鏃、釘、用途不明鉄製品、鉄滓などが遺物収納箱にして約5箱分、1,781点、37.588kgが出土した。主体となるのは古墳・奈良・平安時代の須恵器と土師器、特に土師器であり、須恵器の595点、13.212kg、土師器の1,122点、19.503kgをあわせると、点数では出土遺物全体の96%、重量では同じく全体の87%に達する。調査区別では5区出土遺物がかつとも多く、1,059点、17.497kgと点数・重量ともほぼ過半を占める。

1. 土器

縄文土器12点、弥生土器6点が5区を中心に出土している。型式不明の細片がほとんどであり、同時期と思われる遺構に伴う例も認められない。

須恵器は坏、高台付坏、甕などを主体としている。1号井戸出土の2は大きなかえりを持ち、かえり部で接地する蓋である。かえりの存在と形状から7世紀後半に比定されるものであり、本地点出土の須恵器の中ではもっとも古い段階に位置する。次に8世紀後半に比定されるものとして、同じく1号井戸出土の高台付坏3、3区出土の蓋10、9号土坑出土の坏27、6号溝出土の高盤38、5区出土の蓋43、高台付皿52、円面硯54などがあげられる。3は胎土がやや緻密で焼成が灰白色を呈するなど、在地産須恵器にはあまりみられないものであり、搬入品の可能性がある。10の天井部外面には「□(枚カ)井□(村カ)」の墨書が書かれている。また43の天井部内面にも文字種不明のへら書きが施されている。38は脚部に4面の透かしを持つ高盤である。丁寧な造りであり、胎土に海綿骨針が混入していることから、木葉下窯跡群の製品と考えられる。自然釉が脚部内面と盤部外面に認められることは、焼成時に脚部を上位にしていたことを物語るものであろう。54は透かし部がへらによる条線で表現された円面硯である。こうした円面硯や高盤は一般に官衙関連遺物として積極的に評価されており、本地点を舞台にした土地利用の一端をうかがう上からも注目される。7号溝出土の蓋25、高台付坏41、2号溝出土の坏30、高台付坏32、5号土坑出土の坏42は8世紀後半から9世紀前半頃に比定される。本地点ではこの時期に属する資料がかつとも多い。25の蓋はかえりが消失している。41は底部に文字種不明の墨書が確認される。胎土に雲母片が混入していることから、新治窯跡群産であろう。9世紀前半に比定されるものには6号溝出土の蓋34、高台付坏37、5区出土の高台付坏49～51がある。37には文字種不明の、49には「井」状のへら書きが施されている。2号溝出土の坏31、6号溝出土の坏36、5区出土の坏45・46は9世紀代に比定される。45には「□(寺カ)仲」銘の墨書、46には文字種不明のへら書きが施されている。

土師器も坏、高台付坏、甕などを主体としている。このうち、1号溝出土の坏4、2号住居出土の坏13、1号住居出土の坏16、小型甕19、9号土坑出土の甕28は7世紀後半のものである。坏は全て球状底であり、4と16の内面には放射状の暗文が施されている。16には赤彩も認められる。4は器形からやや先行するものであろうか。3号住居出土の坏7、甕8、甕9、1号住居出土の坏14・15・17、甕20も7世紀後半に比定される。坏は同様に球状底である。7は黒色処理が施され、内面に暗文が確認できる。9の底部は単孔である。5号溝出土の坏33は8世紀後半から9世紀前半頃に比定される。内面にはタール状の物質が付着している。5区出土の内黒坏44と高台付坏48は9



第17図 6区遺構図

世紀後半に位置づけられる。48は内外面にススおよびタール状物質が付着しており、底部には「郡厨」銘の墨書が施されている。これも円面硯や高盤と同様、官衙関連遺物として注目される資料である。この他、細片のため正確な時期の特定は難しいが、8世紀頃と考えられる蓋39(6号溝)や9世紀代の5(1号井戸)が出土している。

中・近世に属するものとしては陶磁器、瓦質土器、在地系土器などがある。出土量は限られており、細片のため正確な時期の不明な例が多い。56・57は5区出土の灰釉陶器、59は3号溝出土の内耳鍋の把手部である。

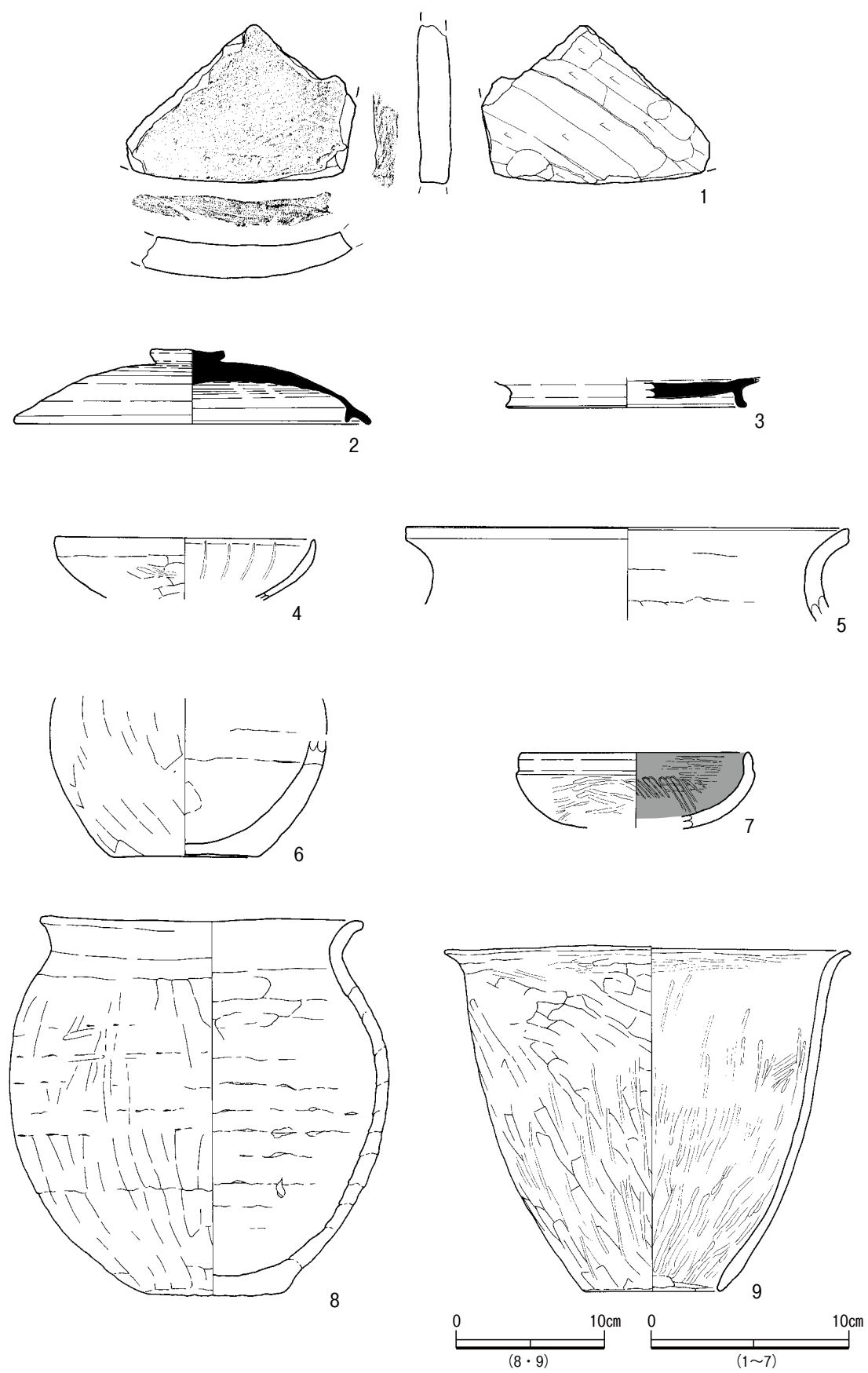
2. 瓦

平瓦12点、丸瓦3点、熨斗瓦2点、瓦種不明5点の合計22点が出土している。従来の調査地点において圧倒的多数を占める瓦の出土が少ないのは、寺院中心部から離れた本地点の地理的位置を物語るものといえる。凸面調整には正格子叩きや縄叩き、平行叩き、ケズリ調整、ナデ調整などがあり、糸切り痕が顕著に残る平瓦1(6号住居)や泥条版築技法の丸瓦も存在する。平瓦40は6号

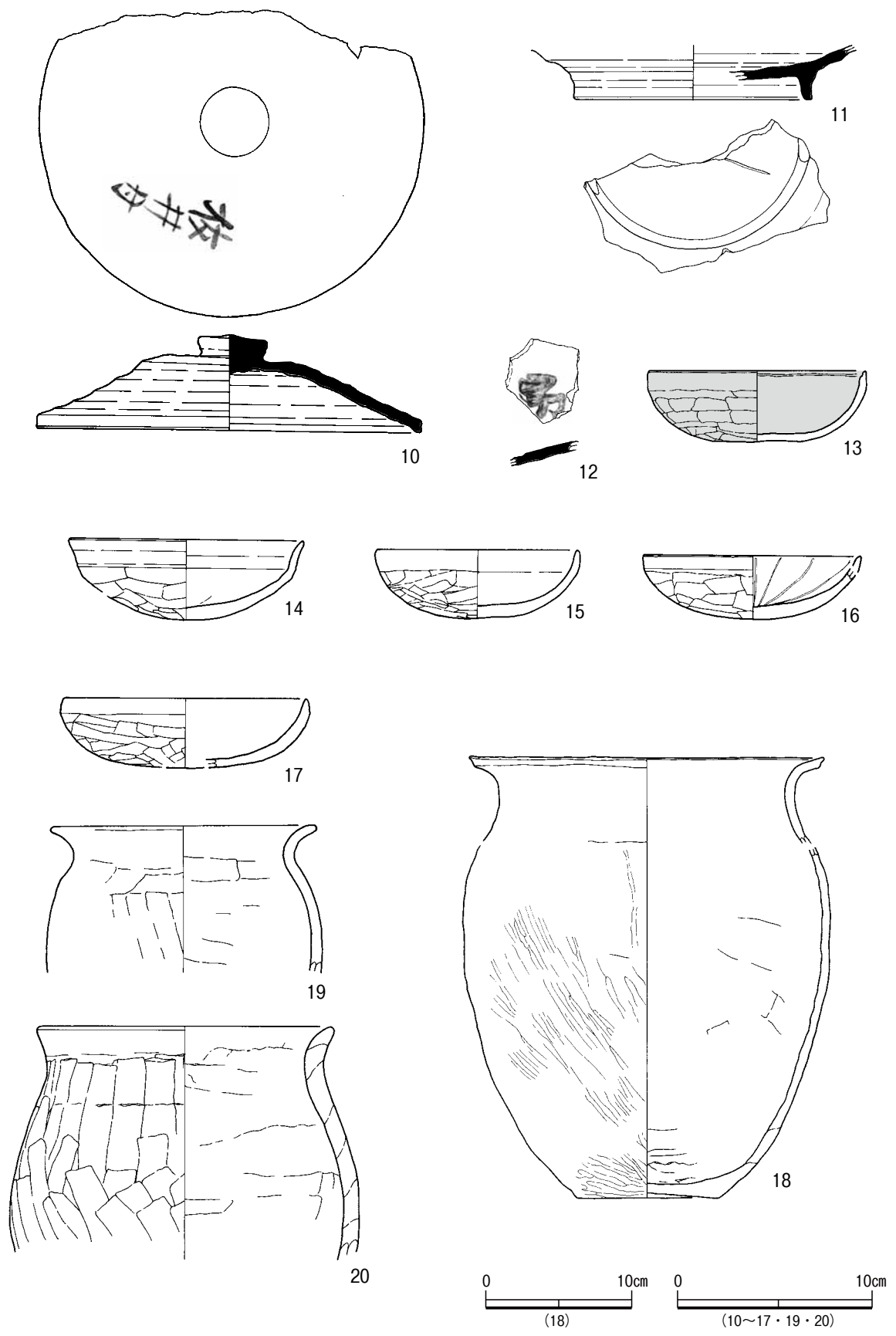
第3表 ピット一覧

遺構 番号	調査区	平面形態	規模 長径 (cm)	規模 短径 (cm)	断面形態	確認標高 (m)	確認面からの 深さ (cm)	出土遺物
P1	5区西	円形	38	(38)	逆円錐形	32.69	65	—
P2	5区西	楕円形	(50)	(21)	逆円錐形	32.71	50	—
P3	5区西	楕円形	(56)	(32)	逆台形	32.73	50	—
P4	5区西	楕円形	(75)	(32)	逆台形	32.72	40	—
P9	4区	楕円形	(36)	(28)	逆台形	32.68	24	—
P10	4区	円形	30	30	逆台形	32.71	45	—
P11	4区	円形	46	44	有段	32.69	38	—
P12	4区	不整楕円形	63	51	有段	32.54	36	—
P13	4区	楕円形	26	(16)	逆円錐形	32.66	53	—
P14	4区	不整楕円形	36	21	逆円錐形	32.60	28	—
P15	4区	円形	36	33	逆台形	32.67	25	—
P16	4区	楕円形	(42)	(33)	逆台形	32.66	41	—
P17	4区	円形	28	28	逆円錐形	32.66	55	—
P18	4区	円形	21	20	逆円錐形	32.65	23	—
P20	4区	楕円形	28	20	逆円錐形	32.70	24	—
P21	3区東	楕円形	(28)	(22)	逆円錐形	32.36	25	—
P22	3区東	楕円形	40	32	逆台形	32.67	32	—
P23	3区東	円形	24	21	浅逆円錐形	32.74	19	—
P24	3区東	不整楕円形	18	16	浅逆円錐形	32.66	18	—
P25	3区西	円形	(32)	32	逆円錐形	32.82	45	—
P26	3区西	円形	(30)	28	逆円錐形	32.85	40	—
P27	3区西	楕円形	45	28	逆円錐形	32.82	39	—
P28	3区西	不整楕円形	40	32	有段	32.86	55	土師器
P29	3区西	不整楕円形	(51)	(30)	有段	32.87	65	土師器
P30	3区西	楕円形	54	48	有段	32.80	51	土師器
P31	2区	楕円形	(15)	(15)	逆円錐形	32.70	22	須恵器
P32	2区	楕円形	(21)	(12)	逆円錐形	32.70	26	—
P33	2区	楕円形	(16)	12	逆円錐形	32.68	30	—
P34	2区	楕円形	(18)	18	逆円錐形	32.67	35	—

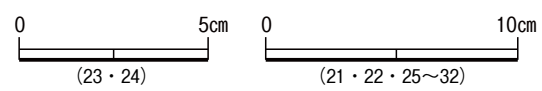
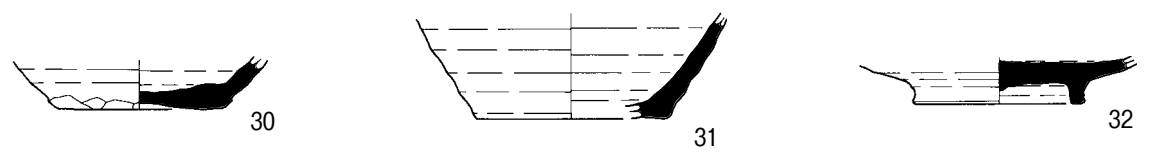
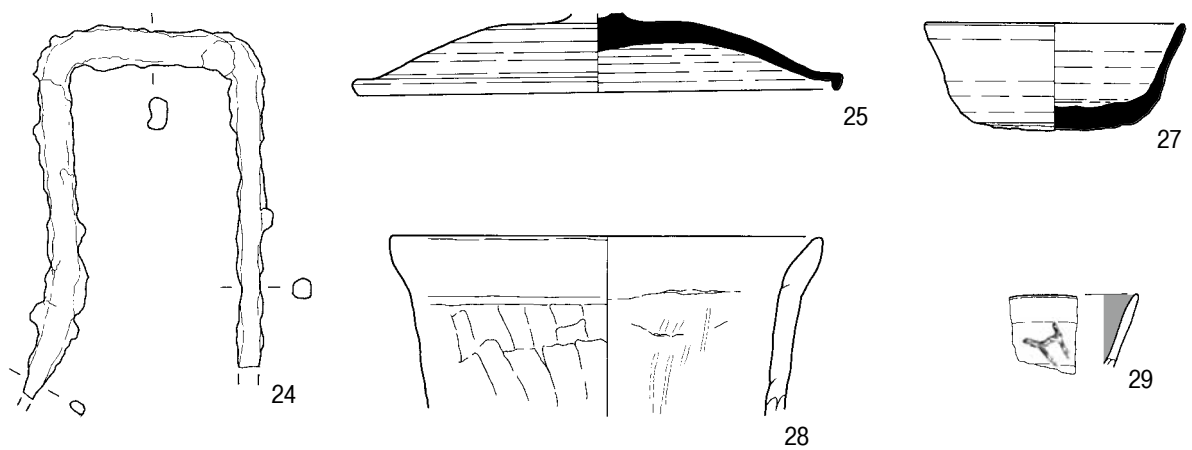
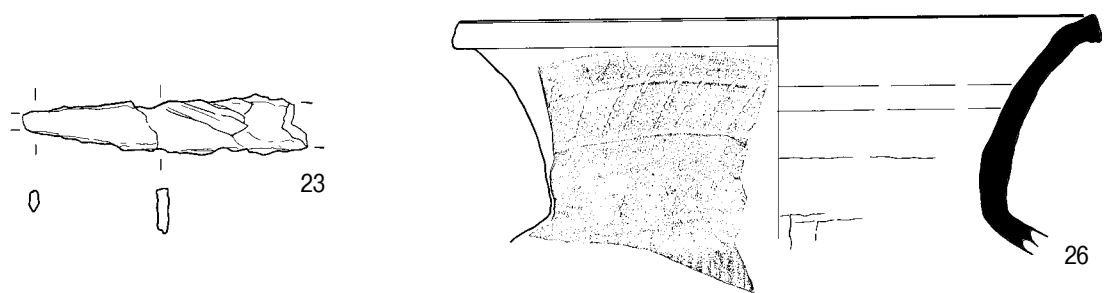
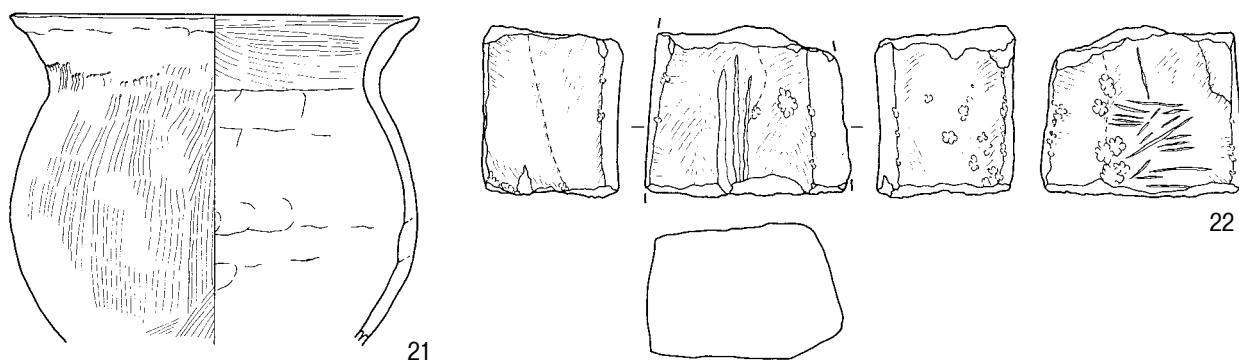
P35	2区	橢円形	(18)	15	逆円錐形	32.65	25	—
P36	2区	橢円形	(36)	(24)	逆台形	32.67	30	—
P37	2区	橢円形	(51)	(24)	逆台形	32.69	29	—
P38	2区	橢円形	30	20	逆円錐形	32.68	44	—
P40	2区	橢円形	40	30	逆円錐形	32.70	49	—
P41	2区	橢円形	(50)	42	逆台形	32.74	35	—
P42	2区	橢円形	(40)	(27)	逆台形	32.73	35	—
P43	2区	円形	40	(33)	逆台形	32.73	33	—
P44	2区	円形	54	(42)	逆台形	32.70	49	—
P46	2区	不整橢円形	51	27	有段	32.57	17	土師器
P47	2区	円形	42	40	逆円錐形	32.56	44	—
P48	2区	橢円形	33	27	逆台形	32.54	22	—
P49	2区	円形	(26)	24	逆円錐形	32.52	35	—
P50	2区	橢円形	27	21	逆台形	32.53	25	—
P51	2区	円形	25	24	逆円錐形	32.52	30	—
P52	2区	円形	24	21	浅逆円錐形	32.51	16	—
P53	2区	円形	25	25	逆円錐形	32.45	36	—
P54	2区	橢円形	48	(42)	有段	32.44	15	—
P55	2区	円形	35	33	有段	32.72	40	—
P56	2区	橢円形	(27)	21	浅逆台形	32.55	11	—
P57	1区	橢円形	60	(32)	有段	32.58	35	—
P58	1区	不整橢円形	30	20	逆円錐形	32.57	46	—
P59	1区	橢円形	(45)	(25)	有段	32.55	55	—
P60	1区	橢円形	52	40	逆台形	32.55	47	—
P61	1区	橢円形	68	35	逆台形	32.50	47	須恵器
P63	1区	橢円形	63	(40)	逆台形	32.53	50	—
P64	1区	橢円形	33	(24)	逆台形	32.34	30	—
P65	1区	円形	15	15	浅逆円錐形	32.37	19	—
P66	1区	橢円形	(64)	(36)	逆台形	32.36	40	—
P67	1区	不整橢円形	42	22	逆円錐形	32.54	58	—



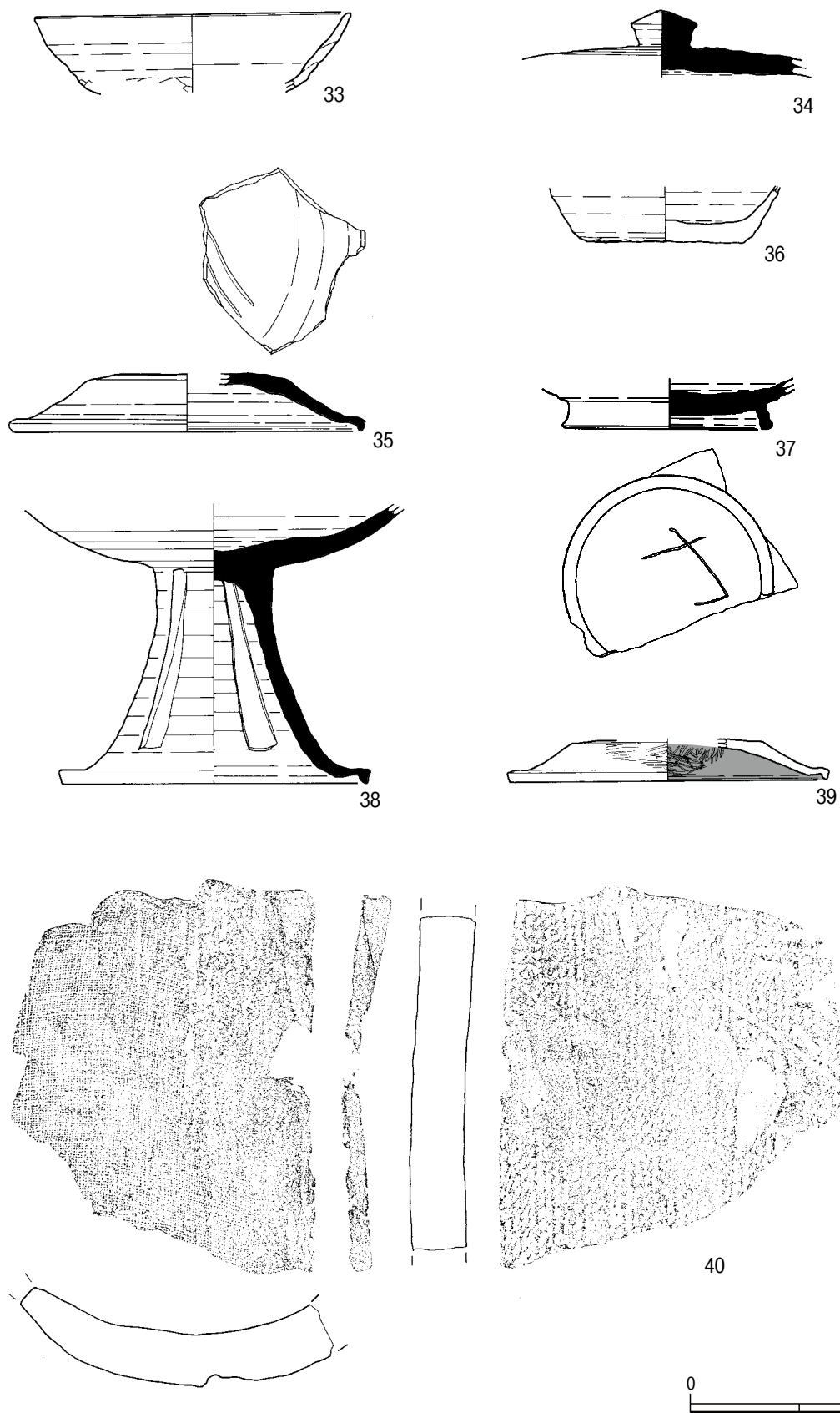
第 18 図 出土遺物 (1)



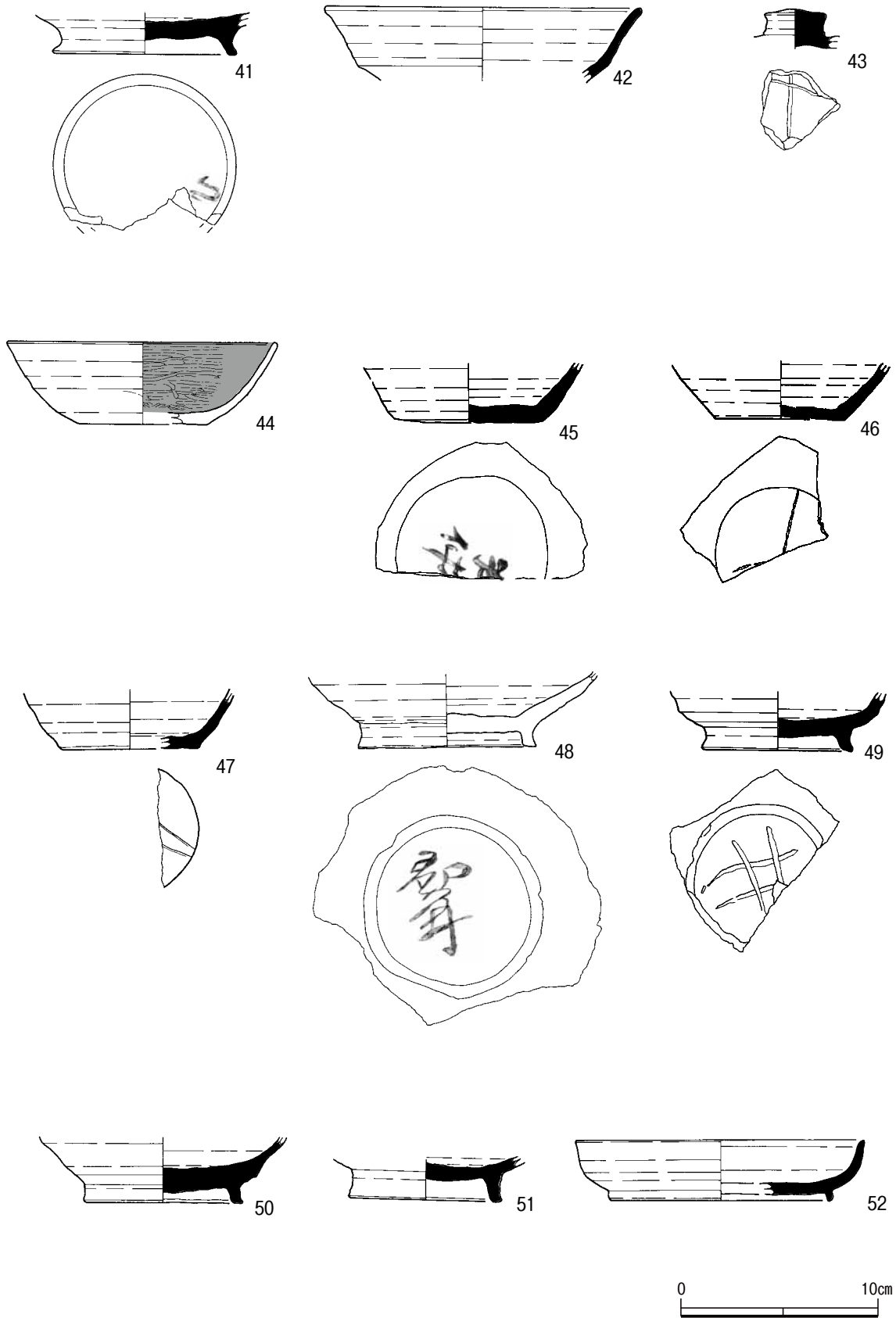
第 19 図 出土遺物 (2)



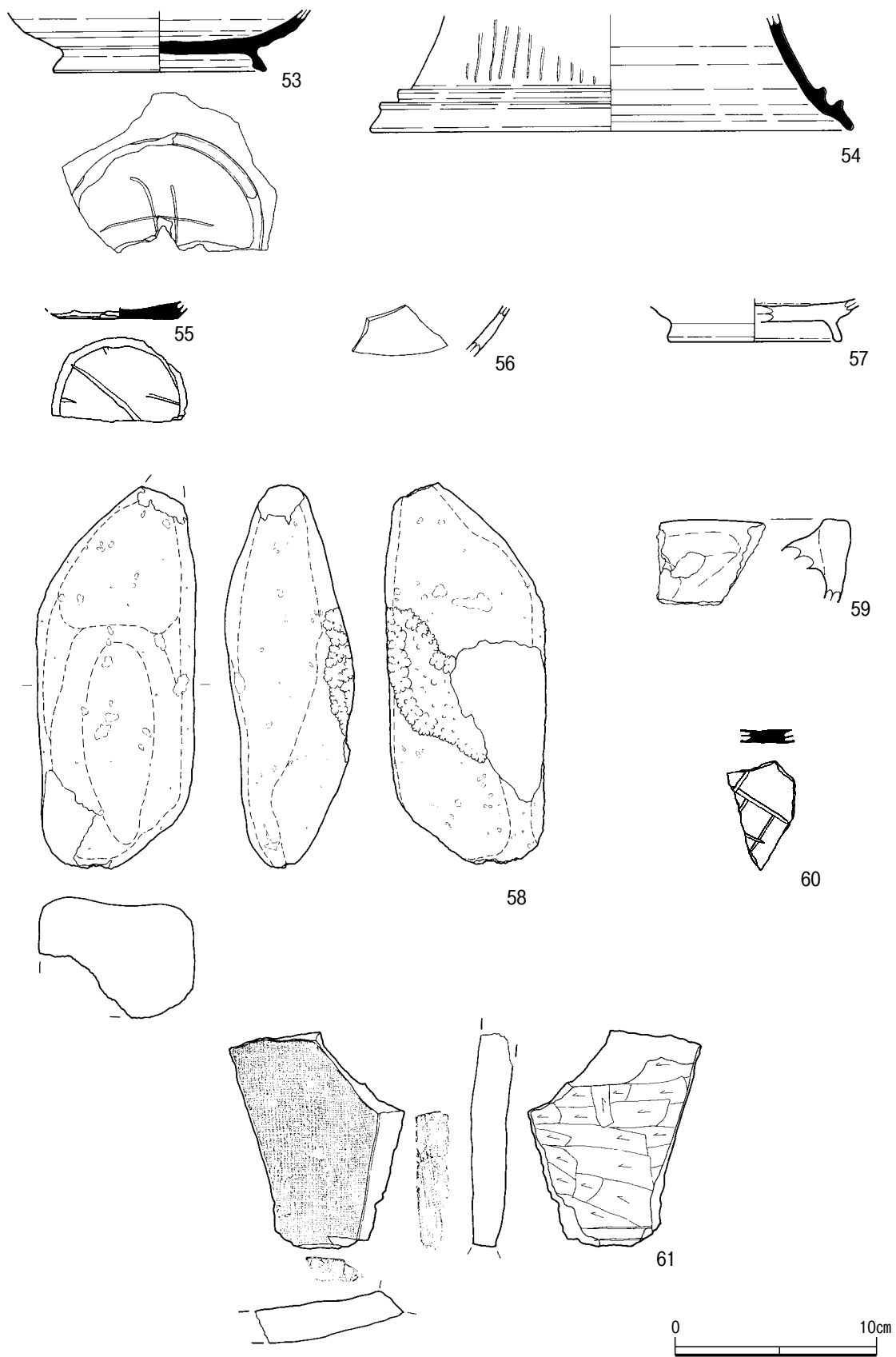
第 20 図 出土遺物 (3)



第 21 图 出土遺物 (4)



第22図 出土遺物(5)



第23图 出土遺物(6)

第4表 出土土器属性一覧

図版番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存部位	残存率	残存口径 (推定口径) (cm)	残存底径 (推定底径) (cm)	残存器高 (推定器高) (cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	色調	備考
2	2区1号井戸	須恵器	蓋	天井部～ 底部	70%	<17.8>	—	3.8	天井部端部折込みなし、かえり部大きく断面「V」字型で接地、つまみ形状扁平擬宝珠状、つまみ回転ヘラ削りで整形。	白色粒子多量、 黒色粒子微量、 チャート微量	—	不良	外面：2.5Y8/2 灰白色 内面：2.5Y7/2 灰黄色	7世紀後半、木葉下窯群産、かえり径15.8cm、つまみ径3.7cm。
3	2区1号井戸	須恵器	高台付 杯	体部～ 底部	20%	—	11.8	(1.5)	底部回転ヘラ削り後未調整、内面回転ナデ、高台貼り付け、断面外側が外反。	白色粒子微量	—	不良	内外面：2.5Y8/2 灰白色	8世紀後半、窯不明。
4	2区1号井戸	土師器	杯	口縁部～ 体部	20%	<12.9>	—	(3.1)	口縁部ヨコナデ、体部上位で角度を変え緩やかに立ち上がる、外面ヘラケズリ、内面放射状暗文。	白色粒子少量、 雲母粒微量	—	良好	内外面：5YR5/8 明赤褐色	7世紀後半。
5	2区1号井戸	土師器	甕	口縁部	10%	<21.9>	—	(3.9)	口縁部ヨコナデ、頸部「J」字状、胴部内面ヘラナデ。	白・黒色粒子多量、 雲母粒微量、 チャート微量	—	良好	内外面：5/6 明赤褐色	9世紀。
6	2区1号井戸	土師器	小型 甕	胴部～ 底部	20%	—	7.3	(7.9)	胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ナデ、球状。	白・黒色粒子微量	—	不良	外面：10YR8/2 灰白色 内面：10YR3/1 黒褐色	内面スス付着。
7	3区東3号住居	土師器	杯	口縁部～ 体部	20%	<11.3>	—	<3.7>	口縁部外面ヨコナデ、下位稜、体部下半ヘラケズリ後ミガキ、内部ミガキ、内面放射状暗文。	白色粒子少量	—	良好	外面：7.5YR4/4 褐色 内面：10YR2/1 黒色	7世紀後半、黒色処理。
8	3区東3号住居	土師器	甕	略完形	100%	21.5	9.3	25.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部球状、外面下半ヘラケズリ、内面下半ヘラナデ、底部ナデ。	白色粒子・ チャート・砂 礫多量	—	やや 不良	7.5YR5/8 赤褐色	7世紀後半。
9	3区東3号住居	土師器	甕	略完形	100%	27.0	9.2	23.3	口縁部外側に大きく開き内外面ヨコナデ、胴部外面下半ヘラケズリ、内面下半ミガキ、底部単孔。	白色粒子・ チャート多量	—	良好	内外面：7.5YR6/6 橙色	7世紀後半、底部口径8.5cm。
10	3区東表土一括	須恵器	蓋	天井部～ 底部	70%	19.5	—	4.8	天井部端部折込まれる、かえりなし、つまみ貼り付け形状扁平擬宝珠状、天井部外面上部回転ヘラケズリ、内外面回転ナデ。	白色粒子少量、 チャート多量、 砂礫多量	○	良好	内外面：2.5YR4/4 にぶい赤褐色	8世紀後半、天井部外面墨書「□(枚カ)井口(村カ)」、木葉下窯群産、折込み径18.4cm、赤焼き。
11	3区東表土一括	須恵器	壺	体部～ 底部	20%	—	<12.0>	(2.8)	底部回転ヘラ削り後未調整、高台断面「U」字状。	白色粒子・ チャート・砂 礫多量	○	良好	内外面：2.5Y6/4 にぶい赤色	底部文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産、赤焼き。
12	3区東表土一括	須恵器	蓋	天井部	細片	—	—	—	内外面回転ナデ。	白色粒子少量、 チャート微量	○	良好	内外面：5YR5/4 にぶい赤褐色	天井部墨書「部」、木葉下窯群産、赤焼き。
13	4区2号住居	土師器	杯	口縁部～ 底部	50%	<10.9>	—	3.6	口縁部直立し外面ヨコナデ、内面1条の沈線、体部緩やかに内湾、下半ヘラケズリ、内面ナデ、球状底。	白・赤色粒子少量、 チャート微量	—	良好	内外面：5YR6/8 橙色	7世紀後半。
14	5区西1号住居	土師器	杯	口縁部～ 底部	40%	<11.9>	—	4.1	口縁部外反、内外面ヨコナデ、頸部僅かな稜、体部内湾しヘラケズリ、内面ナデ、球状底。	白・赤色粒子微量、 雲母粒少量	—	良好	内外面：7.5YR7/8 黄褐色	7世紀後半。
15	5区西1号住居	土師器	杯	口縁部～ 底部	70%	10.3	—	3.5	口縁部直立しヨコナデ、体部緩やかに内湾、内面ナデ、外面下半多方向ヘラケズリ、球状底。	赤色粒子少量	—	良好	内外面：5YR6/8 橙色	7世紀後半。
16	5区西1号住居	土師器	杯	口縁部～ 底部	70%	<11.0>	—	3.2	口縁部直立し内外面ヨコナデ、体部緩やかに内湾、体部下外面ヘラケズリ、内面ナデ、球状底、内面放射状暗文。	白・赤色粒子微量、 雲母粒少量	—	良好	外面：5YR6/8 橙色 内面：7.5YR7/8 黄褐色	7世紀後半、赤彩。
17	5区西1号住居	土師器	杯	口縁部～ 底部	40%	<12.4>	—	3.4	口縁部直立し内外面ヨコナデ、体部緩やかに内湾、下半ヘラケズリ、球状底。	赤色粒子少量、 チャート・雲 母粒少量	—	良好	内外面：10YR7/6 明黄褐色	7世紀後半。
18	5区西1号住居	土師器	甕	口縁部～ 底部	60%	<23.9>	9.4	(30.2)	口唇部上方外側に僅かにつまみ出される、口縁部大きく開く、内外面ヨコナデ、胴部縦方向ヘラケズリ、底部ナデ。	雲母粒多量、 砂礫少量	—	良好	外面：7.5YR3/3 暗褐色 内面：10YR6/4 にぶい黄褐色	7世紀後半、常総型甕。
19	5区西1号住居	土師器	小型 甕	口縁部～ 胴部	10%	<13.0>	—	(7.5)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部大きく外反、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	白色粒子・ チャート微量、 雲母粒少量	—	良好	外面：2.5YR6/8 橙色 内面：10YR7/6 明黄褐色	7世紀後半。
20	5区西1号住居	土師器	甕	口縁部～ 胴部	20%	<14.6>	—	(11.9)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	白・赤・黒色粒子多量、 雲母粒微量、 砂礫少量	—	良好	内外面：7.5YR5/8 明褐色	7世紀後半。
21	5区西1号住居	土師器	小型 甕	口縁部～ 胴部	20%	<15.8>	—	(12.8)	口唇部外側に僅かにつまみ出される、口縁部「J」字状、外面ヨコナデ内面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ後ナデ。	白・黒色粒子少量、 チャート少量、 雲母粒微量	—	良好	外面：5YR6/6 橙色 内面：7.5YR6/6 橙色	外面スス付着、7世紀。
25	5区西7号溝	須恵器	蓋	天井部～ 底部	60%	<19.0>	—	(3.1)	天井部外面上部ヘラケズリ、下部回転ナデ、内面回転ナデ、端部折込まれる、かえりなし、つまみ貼り付け形状不明、天井部外面自然釉。	白色粒子微量、 チャート少量	○	良好	内外面：5Y5/1 灰色	8世紀後半～9世紀前半、木葉下窯群産、折込み径<18.4cm>。
26	5区西2号土坑	須恵器	甕	口縁部～ 頸部	10%	<25.0>	—	(8.7)	口唇部外側につまみ出される、頸部大きく開く、中位横方向に区画する沈線、区画内斜方向列点文状施文を雑に横方向に回転挿し施文、下端横方向列点文、頸部内面および胴部外面自然釉。	白色粒子多量	—	良好	内外面：N4/ 灰色	木葉下窯群産、黒色湧出物多量。
27	5区西9号土坑	須恵器	杯	口縁部～ 底部	70%	<10.1>	<4.7>	4.1	体部緩やかに立ち上がり中位からやや外反、内外面回転ナデ、下端二次底部面回転ナデ、底部左回転ヘラ削り後未調整。	白色粒子多量、 チャート少量	○	良好	外面：5Y5/1 灰色 内面：10Y5/1 灰色	7世紀後半、木葉下窯群産。

28	5区西9号土坑	土師器	甗	口縁部～胴部	10%	<16.7>	—	(7.1)	口縁部僅かに外反し内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ後ミガキ。	白色粒子多量、雲母粒微量、チャート・砂礫多量	—	良好	内外面：2.5YR6/8 橙色	7世紀後半。
29	5区西包含層	土師器	坏	口縁部	細片	—	—	—	体部内外面ヨコナデ。	白色粒子少量、雲母粒微量	—	良好	外面：10YR6/3 にぶい黄褐色 内面：2.5Y2/1 黒色	内黒、体部文字種不明墨書。
30	5区東2号溝	須恵器	坏	体部～底部	20%	—	<6.4>	(1.9)	体部内外面回転ナデ、下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後荒いヘラケズリ調整。	白・灰・色粒子多量、砂礫多量	○	良好	内外面：5Y5/1 灰色	8世紀後半～9世紀前半、木葉下窯群産、黒色湧出物多量。
31	5区東2号溝	須恵器	坏	体部～底部	30%	—	<7.3>	(4.1)	体部直線的、内外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、ロクロ目顕著。	白色粒子少量、チャート多量	○	良好	内外面：2.5Y5/1 黄灰色	9世紀、木葉下窯群産。
32	5区東2号溝	須恵器	高台付坏	体部～底部	30%	—	<6.3>	(1.8)	体部回転ナデ、底部左回転ヘラ切り後未調整、高台貼り付け断面「U」字状。	白・灰・色粒子多量、砂礫多量	○	良好	内外面：7.5Y5/1 灰色	8世紀後半～9世紀前半、木葉下窯群産、黒色湧出物多量。
33	5区東5号溝	土師器	坏	口縁部～体部	30%	<14.7>	—	(3.6)	口縁部ヨコナデ、僅かな体、体部多方向ヘラケズリ。	9世紀後半、白色粒子少量、雲母粒微量、チャート微量	—	良好	外面：10YR6/3 にぶい黄褐色 内面：10YR5/4 にぶい黄褐色	8世紀後半～9世紀前半、内面タール状附着物。
34	5区東6号溝	須恵器	蓋	天井部	30%	—	—	(3.1)	天井部回転ナデ、端部の折込みなし、かえりなし、つまみ貼り付け形状扁平擬宝珠状。	白色粒子多量、チャート少量	○	良好	内外面：5Y5/1 灰色	9世紀前半、木葉下窯群産、つまみ径3.1cm。
35	5区東6号溝	須恵器	蓋	天井部～端部	30%	<16.5>	—	—	天井部端部折込まれる、かえりなし、天井部回転ヘラケズリ。	白色粒子多量、チャート少量	○	良好	内外面：5YR5/4 にぶい赤褐色	底部文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産、折込み径<16.0cm>、赤焼き。
36	5区東6号溝	須恵器	坏	体部～底部	60%	—	7.3	(2.6)	体部直線的、内外面回転ナデ、下端回転ナデ、底部ヘラ切り後未調整、ロクロ目顕著。	白色粒子少量、チャート多量、砂礫多量	○	良好	内外面：5Y5/2 灰オリーブ色	9世紀、木葉下窯群産。
37	5区東6号溝	須恵器	高台付坏	底部	40%	—	9.4	(2.4)	体部内外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後未調整、高台貼り付け断面外側外反。	白色粒子多量、チャート多量	○	良好	内外面：5Y4/1 褐灰色	9世紀前半、底部文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産。
38	5区東6号溝	須恵器	高盤	盤部底部～脚部	60%	—	<14.3>	(13.2)	環部内外面回転ナデ、外面下半ヘラケズリ、脚部貼り付け内外面回転ナデ、4面透かし、緩やかに拡がり接地面外面を面取り、断面「V」字状、脚部内面及び盤部外面自然釉。	白色粒子少量、チャート多量、砂礫少量	○	良好	盤面：2.5Y6/1 黄褐色 脚部：2.5Y5/1 黄灰色	木葉下窯群産、黒色湧出物少量。
39	5区東6号溝	土師器	蓋	天井部～端部	20%	<14.9>	—	—	天井部端部折込まれる、かえりなし、天井部中位で下方に大きく曲げられる。ロクロ成形、外面ミガキ、内面丁寧ミガキ。	白色粒子少量、雲母粒微量、砂礫微量	—	良好	外面：10YR5/8 黄褐色 内面：10YR2/1 黒色	8世紀？内黒、折込み径<14.3cm>。
41	5区東7号溝	須恵器	高台付坏	体部～底部	40%	—	8.7	(2.1)	体部内面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後未調整、高台貼り付け断面外反し外端部で接地。	白色粒子少量、雲母粒多量、チャート微量	—	良好	内外面：5Y6/1 灰色	8世紀後半～9世紀前半、底部墨痕・新治窯群産。
42	5区東5号土坑	須恵器	坏	口縁部～体部	30%	<15.6>	—	(3.8)	口縁部外側につまみ出される体部下半で角度を変え外反、内外面回転ナデ。	白色粒子少量、チャート多量	—	良好	内外面：2.5Y5/2 暗灰黄色	8世紀後半～9世紀前半、木葉下窯群産。
43	5区東表土一括	須恵器	蓋	つまみ部	10%	—	—	(2.0)	天井部内面回転ナデ、つまみ貼り付け形状扁平擬宝珠状。	白色粒子微量、チャート少量	○	良好	内外面：5Y5/1 灰色	8世紀後半、天井部内面文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産、つまみ径3.0cm、黒色湧出物少量。
44	5区東包含層	土師器	坏	口縁部～底部	40%	<13.4>	<6.4>	4.2	口縁部ヨコナデ、体部内湾、外面回転ナデ、下端回転ナデ、内面見込み部多方向ヘラミガキ、底部回転ヘラ切り後周辺部ヘラケズリ。	白色粒子微量	—	不良	外面：5Y7/1 灰白色 内面：2.5Y2/1 黒色	9世紀後半、内黒。
45	5区東包含層	須恵器	坏	体部～底部	30%	—	7.5	(3.0)	体部内外面回転ナデ、下端手持ちヘラケズリ、底部左回転ヘラ切り後ヘラケズリ・ナデ。	白色粒子少量、チャート少量	○	良好	内外面：5Y5/3 灰オリーブ色	9世紀、底部墨書「□(守カ)仲」、木葉下窯群産。
46	5区東包含層	須恵器	坏	体部～底部	20%	—	<6.5>	(2.9)	体部緩やかに内湾、内外面回転ナデ、底部切り離し方法不明、後一方向ヘラナデ。	白色粒子少量、チャート多量	○	良好	内外面：2.5Y5/2 暗灰黄色	9世紀、底部文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産。
47	5区東表土一括	須恵器	坏	体部～底部	20%	—	<6.9>	(3.0)	体部緩やかに内湾し立ち上がる、底部回転ヘラ切り後ヘラナデ。	白色粒子・チャート多量	○	良好	内外面：5Y6/1 灰色	底部文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産。
48	5区東包含層	土師器	高台付坏	体部～底部	40%	—	8.9	(3.5)	体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後未調整、高台貼り付け断面外側外反。	白色粒子微量、雲母粒微量、チャート多量	—	良好	内外面：7.5YR6/6 橙色	9世紀後半、底部墨書「郡厨」、内外面にスス及びタール状附着物。
49	5区東表土一括	須恵器	高台付坏	体部～底部	30%	—	7.4	(3.0)	体部内外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後未調整、高台貼り付け断面外側外反。	白色粒子微量、チャート少量	—	良好	内外面：10Y5/1 灰色	9世紀前半、底部ヘラ書き「井」、木葉下窯群産、黒色湧出物少量。
50	5区東包含層	須恵器	高台付坏	体部～底部	40%	—	7.7	(3.3)	体部内外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後未調整、高台貼り付け断面外側外反。	白色粒子多量、チャート多量、砂礫多量	○	良好	内外面：10YR6/1 褐灰色	9世紀前半、木葉下窯群産。
51	5区東包含層	須恵器	高台付坏	体部～底部	30%	—	7.4	(1.9)	体部内外面回転ナデ、底部切り離し方法不明後中央部ヘラケズリ周辺部ヘラナデ、高台貼り付け断面外側外反。	白色粒子多量、チャート多量、砂礫多量	○	良好	内外面：5YR5/6 明赤褐色	9世紀前半、木葉下窯群産、赤焼き。
52	5区東表土一括	須恵器	高台付皿	口縁部～底部	30%	<14.2>	<11.0>	3.0	口縁部僅かに外反、体部内湾し立ち上がる、内外面回転ナデ、高台貼り付け断面「U」字状。	白色粒子少量、チャート微量	○	良好	内外面：N3/ 暗灰色	8世紀後半、木葉下窯群産。
53	5区東包含層	須恵器	壺	底部	40%	—	<5.2>	(3.0)	底部回転ヘラ切り後未調整、高台断面外側外反。	白色粒子・チャート・砂礫多量	—	良好	内外面：5YR4/6 赤褐色	底部文字種不明ヘラ書き、木葉下窯群産。

54	5区東表土一括	須恵器	円面碗	体部～脚部	20%	—	<31.6>	(7.6)	体部内外面回転ナデ，大きく下方に開き，すかし部ヘラによる条線，下位2条の突帯。	チャート多量	—	良好	内外面：10Y5/1 灰色	8世紀後半，木葉下窯群産，黒色湧出物多量。
55	5区東表土一括	須恵器	坏	底部	10%	—	5.8	(0.8)	底部切り離し技法不明，後ヘラナデ調整。	白色粒子多量， チャート多量	○	良好	内外面：5YR5/4 にぶい赤褐色	底部文字種不明ヘラ書き，木葉下窯群産，赤焼き。
56	5区東包含層	灰釉陶器	碗？	胴部	細片	—	—	—	表面全面に灰釉。	灰色粒子微量	—	良好	外面：2.5Y5/3 黄褐色 内面：2.5Y8/3 浅黄色	
57	5区東包含層	灰釉陶器	碗	体部～底部	20%	—	<8.3>	(2.1)	底部回転糸切り，高台断面「U」字状。	灰色粒子・砂粒微量	—	良好	内外面：2.5Y8/3 浅黄色	内面釉塗りがけ。
59	6区3号溝	瓦質土器	内耳鍋	把手部	細片	—	—	—	把手部。	白色粒子少量， チャート微量	—	良好	内外面：10YR3/1 黒褐色 胎土：10YR5/3 にぶい黄褐色	中世，在地系焙烙。
60	6区表土一括	須恵器	坏	底部	細片	—	—	—	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ。	白色粒子・ チャート多量	○	良好	内外面：2.5Y5/1 灰色	底部文字種不明ヘラ書き，木葉下窯群産。

第5表 出土平瓦属性一覧

図版番号	出土地点遺構	全長(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	凹面痕跡	凸面痕跡	胎土鉱物	海綿骨針	焼成	色調	備考
1	1区6号住居	<7.9>	1.1	130.2	糸切り痕	ヘラケズリ	白色粒子多量，チャート多量，長石少量	—	普通	5B4/1 暗灰色	一枚作り，棒乾燥痕4カ所。
40	5区東6号溝	<15.6>	2.7	858.8	布目	長縄叩き	白色粒子・チャート多量	—	良好	7.5Y5/2 灰色	一枚作り。

第6表 出土熨斗瓦属性一覧

図版番号	出土地点遺構	全長(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	凹面痕跡	凸面痕跡	胎土鉱物	海綿骨針	焼成	色調	備考
61	6区表土一括	<10.8>	1.7	153.1	布目	ヘラケズリ	白色粒子・チャート少量，灰色粒子多量	○	良好	10Y5/1 灰色	狭端部左片，上端部にあたりと思われる沈線2条。

第7表 出土石器・鉄製品属性一覧

図版番号	出土地点遺構	時代	器種	材質	残存率	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・手法	備考
22	5区西1号住居	古墳	砥石	砂岩	30%	<6.8>	8.1	5.4	492.5	上面に溝状の3条の線状痕，全面に磨痕。	裏面にもやや不明瞭な線状痕多数。
23	5区西1号住居	古墳	刀子	—	40%	<7.5>	<1.6>	—	8.3	—	
24	5区西1号住居	古墳	鏡	—	90%	8.8	5.9	—	28.6	—	
58	5区東表土一括	—	石皿	安山岩	90%	25.7	10.6	7.9	2,680.0	全面に磨痕，上面は窪む，裏面の一部に敲打痕。	

出土地点		7号溝		8号溝		9号溝		2号土坑		4号土坑		5号土坑		9号土坑		10号土坑		11号土坑		14号土坑								
		点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)						
縄文時代 弥生時代	出土遺物																											
	土器																											
	土器																											
	環・碗																											
	皿																											
	環類		1	6.1																								
	甕・壺		1	11.4																								
	甕(東海系)																											
	鉢																											
	帯																											
	須惠器																											
	高環類																											
	高盤																											
	高台付環		1	28.5																								
	高台付皿																											
	高台付環類																											
	蓋																											
	凹面碗																											
	不明		2	8.3																								
	環																											
	碗																											
	環類																											
	高台付環・碗																											
	高台付皿																											
	土師器																											
	高台付環類		2	21.3		1	10.2		3	28.5		2	18.3		5	4	38.4		1	93.7		5	45.7					
	甕																											
	甕																											
	不明		1	2.4																								
	高台付皿																											
	灰釉陶器																											
	壺類																											
	在地系器																											
	土器																											
	鉢																											
	瓦質土器																											
	土鍋																											
	常滑甕																											
	陶器																											
	瀬戸・美濃系碗																											
	瀬戸・美濃系皿																											
	磁器																											
	碗																											
	鉢																											
	鉄厚																											
	釘																											
	刀子																											
	鍔																											
	用途不明鉄製品																											
	砂岩																											
	砥石																											
	片岩																											
	石器		7	6	71.9		1	1	10.2		2	18.3		24	21	451.2		2	184.7		14	132.8		6	28.2		1	7.3
	右皿																											
	總計																											

出土地点		6区一括			1区表土一括			2区表土一括			3区表土一括			4区表土一括			5区表土一括			6区表土一括			表採			総計		
		点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)			
縄文時代 弥生時代	出土遺物																											
	土器																											
	土器																											
	環・碗																											
	皿																											
	環類	2	2	80																								
	甕・壺	2	2	76.1																								
	甕(東海系)																											
	鉢																											
	帯																											
	高環類																											
	須惠器																											
	高盤																											
	高台付環																											
	高台付皿																											
	高台付環類																											
	蓋																											
	皿	1	1	1.4																								
	口面碗																											
	不明																											
	環																											
	碗																											
	環類	1	1	4.0																								
	高台付環・碗																											
	高台付皿																											
	土師器																											
	高台付環類																											
	甕	2	2	21.2	4	4	34.4	7	7	85.6	8	8	62.5	14	10	219.3	33	31	425.1	8	8	81.9	33	29				
	甕																											
	甕																											
	不明																											
	高台付皿																											
	灰釉陶器																											
	壺類																											
	在地系土器																											
	瓦質土器																											
	常滑甕																											
	陶器	1	1	2.0																								
	瀬戸・美濃系碗																											
	瀬戸・美濃系皿																											
	磁器碗																											
	鉄厚																											
	釘																											
	刀子																											
	鍔																											
	用途不明鉄製品																											
	砂岩																											
	砥石																											
	片岩																											
	石器	10	10	117.5	12	12	90.8	20	20	227.0	40	40	370.6	34	30	445.4	137	129		71	65	923.5	89	80				
	石																											
	右皿																											
	總計																											

第9表 瓦計量表

出土地点	6号住居跡			2号溝			6号溝			5区一括			6区一括			5区表土一括			6区表土一括			総計			
	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	
平瓦	正格子目叩き			1	1	249.2															1	1	249.2		
	正格子目叩き + なで	1	113.6				1	1	283.7				1	1	46.0						3	3	443.3		
	なで	1	18.0										1	1	33.5	1	1	52.6			3	3	104.1		
	長縄叩き						2	2	962.1	1	1	395.8									3	3			
平行叩き				1	1	72.1															1	1	72.1		
糸切り	1	130.2																			1	1	130.2		
小計	3	261.8	1	1	72.1	1	1	249.2	3	3	395.8	1	1	79.5	2	2	52.6	1	1	12	12				
削り																									
なで																									
混条版築																									
小計																									
道具瓦	削り																								
	契斗瓦																								
	平行叩き																								
小計																									
正格子目叩き																									
なで																									
凸面調整が不明のもの																									
小計																									
総計	3	261.8	1	1	72.1	1	1	249.2	4	4	395.8	1	1	217.1	6	6	524.3	22	22						

第4章 総括

本章では、1区～6区で検出された遺構・遺物から本地点における土地利用の変遷を再確認する。また、奈良・平安時代の遺物のうち、文字資料を取り上げ、その釈文等について検討する。

4-1 土地利用の変遷

本地点では、縄文時代～近世に至るまでの遺構・遺物が確認されている。以下、時代毎に遺構・遺物の在り方から土地利用の変遷について整理する。時期については、便宜的に下記のような6期に区分した。なお、古代以降としたものについては、古代の遺物が出土しているが、細片であるため、時期認定が困難であるもの、古代の遺物は出土していないが、覆土のあり方から古代以降と推定されるものを一括した。

1期 縄文～弥生時代・・・・・・・・なし

2期 古墳時代・・・・・・・・1区(5号・6号・8号竪穴住居跡, 15号土坑), 2区(9号溝),
3区(3号・4号竪穴住居跡), 4区(2号竪穴住居跡・10号土坑),
5区(1号竪穴住居跡)

3期 8世紀前葉～中葉・・・・・・・・1区(1号掘立柱建物跡・14号土坑)

4期 8世紀後葉～9世紀前葉・・2区(1号井戸), 5区(2号溝・5号溝・6号溝)

5期 9世紀中葉～後葉・・・・・・・・なし

6期 中世～近世・・・・・・・・1区(2号井戸・3号井戸・ピット群), 2区(ピット群), 3区(ピット群), 4区(ピット群), 5区(ピット群), 6区(3号溝・3号土坑)

古代以降・・・・・・・・1区(4号溝), 3区(8号溝), 5区(1号溝・7号溝・1号土坑・2号土坑・4号土坑・5号土坑・6号土坑・8号土坑・9号土坑),
6区(7号土坑)

【1期】型式の判定が難しい縄文土器片12点、弥生土器片6点が検出されているものの、遺構は確認されていない。

【2期】当該期の遺構は全て竪穴住居跡であるが、85cm幅のトレンチであるため、部分的な調査に限定されており、全容が判明しているものは1軒もない。ただし、狭いトレンチの中でも主軸方向に注目すると、北西方向に主軸を傾けているものが多いことに気づく。この点については、1994年に都市計画道路3・6・30号線敷設に伴い水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会によって実施された台渡里遺跡の第8次調査(「第二調査区」)で興味深い事実が明らかとなっている。この調査では、7世紀後葉～8世紀後葉に位置づけられる竪穴住居跡が7軒確認されており、7世紀後葉～末葉に位置づけられる4・6～8号住居跡が北西方向に主軸を傾けているのに対し、8世紀以降の竪穴住居跡はいずれも主軸が真北を向いている点で異なっている(井上・千葉 1995・第24図)。また、今般の調査区のうち、2区の北側にある共同住宅サンライズMTの建築に際して行われた台渡里遺跡の第9次調査

でも7世紀後葉の竪穴住居跡が1軒検出されており、やはり北西方向に主軸を傾けている状況が確認されている(井上・栗原 1996・第24図)。このような状況から、北西方向に主軸を傾けている竪穴住居跡については7世紀末葉以前に位置づけられよう。

また、第8・第9次調査で見ついている3号溝は、2区ではその延長部分が検出されていない。このことは、第9次調査区と2区の間で途切れているか、向きを東に変更している可能性があるが、1号井戸によって切られている可能性もある。1号井戸に切られているとすると、その年代は8世紀後葉以前となる。その主軸は第8次調査・第9次調査で見ついている第6号溝あるいは第7号溝と一致することから、これらの調査で確認された竪穴住居跡群や今般の調査で見つかった3区3号・4号竪穴住居跡、4区2号竪穴住居跡、5区1号竪穴住居跡を取り囲んでいる柵列あるいは掘立柱塀の可能性もある。そうすると、3号溝の年代は7世紀後半まで遡ることになる。

また、1区の西側に広がる広大な畑地で2005年に実施された商業施設建設に伴う確認調査(第26次調査)では、台渡里廃寺跡南方地区(9世紀後葉に再建された郡衙周辺寺院)の東側寺院地区画溝が検出されているが、それに先行する7世紀末葉～8世紀初頭頃に位置づけられる竪穴住居跡や側柱掘立柱建物も多数見つかっており、竪穴住居跡からは鉄滓なども見ついていることから、那賀郡衙周辺寺院および那賀郡衙の造営に伴う集落とみてよかろう。当該期には郡衙周辺寺院と郡衙の造営に伴う集落がこの台地の東方に広域に展開していたとみられる。

【3期】当該期の遺構は、1区の1号掘立柱建物跡と14号土坑が該当する。1号掘立柱建物跡は、部分的な調査ではあるが、断面構造および平面プランから布掘の掘立柱建物跡とみられる。1994年に都市計画道路3・6・30号線敷設に伴い水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会によって実施された台渡里遺跡の第8次調査(「第二調査区」)では、今般の調査で確認された1号掘立柱建物跡の真北に50mの位置で同様の布掘りの掘立柱建物跡が1棟確認されている(井上・千葉 1995・第24図)。年代については、8世紀後葉に位置づけられる1号竪穴住居跡の掘り方より下層から見ついていることから、8世紀前半代の年代が推定される。この都市計画道路3・6・30号線の調査で見つかった1号建物跡は北東方向に10°～15°ほど主軸を傾けており、今回の調査で見つかった1号掘立柱建物跡の柱穴とも主軸が近いことから、当該期に位置づけたい。これらの掘立柱建物跡は3×3間程度の掘立柱建物とみられ、正倉であった可能性が考えられよう。当該期は郡衙が整備される時期であり、官衙域としての土地利用が展開していた時期である。

【4期】当該期の遺構は、2区の1号井戸、5区の2号溝・5～7号溝が該当する。これらのうち、注目されるのは推定上面幅2.0m、推定底面幅1.6mを測る6号溝である。このような溝は通常的一般集落にある溝とは異なり、官衙施設を圍繞する溝とみてよかろう。また、6区で検出されている4～6号土坑は、3.0m(10尺)等間の掘立柱建物の柱穴列と見ることがもできるが、6号溝と並行して走っているようにも見えること、建物の柱穴にしては浅いことから、掘立柱塀あるいは柵列の可能性も考えられる。第8次調査や第9次調査では、この延長部分とみられる遺構は確認されていないため、南側に展開するものとみられるが、第9次調査の東側畑地で実施した地中レーダー探査(第36次調査)の際に南東部分で主軸の一致する掘立柱の柱穴列とみられる反射反応が確認されており(第24図)、6区の4～6号土坑と接続する可能性もある。6号溝の延長部分は3区東や4区では確認されてい



第24図 台渡里遺跡第8次・第9次・第36次調査の遺構配置

ないことから、3区東と4区の間で南側に延びる可能性がある。そうすると、外側に掘立柱塀あるいは柵列が巡り、内側に溝で圍繞されるような官衙施設がこの南側にある可能性が指摘できよう。その内容については、今後の調査に期するほかないが、6号溝の覆土から8世紀後葉～9世紀前葉頃の土器が出土していることから、この頃には官衙遺構の埋没が始まっていた可能性がある。そうすると3期から官衙域としての土地利用が展開していた可能性も出てこよう。

【5期】当該期に位置づけられる遺構は検出されていないが、後述するように9世紀後葉に位置づけられる「郡厨」と釈読できる墨書土器や内面黒色処理の施された土師器や当該期に位置づけられる須恵器が出土していることから、この時期まで官衙施設が機能していた可能性が考えられる。

【6期】当該期の遺構は、1区の2号井戸・3号井戸・4号溝・ピット群、2区～5区のピット群、6区の3号溝・3号土坑が該当する。これらの遺構については、長者山城との関連が推定される。長者山城跡は、これまで地形測量図や縄張り図が作成されたことはあったものの、発掘調査は行われていなかった。しかしながら、2006年に水戸市教育委員会が行った個人住宅建設に伴う発掘調査（第28次調査）で、15世紀後半～16世紀初頭の遺物が出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、長者山城跡の機能していた時期に関する手がかりが得られた。

また、平成17年に実施された商業施設建設に伴う確認調査（第26次調査）では、15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器が出土した井戸跡が1基確認されており、長者山城跡に関連する遺構と推定される。

さらに西方に展開する台渡里廃寺跡では、平成6年に実施された都市計画道路3・6・30号線敷設に伴う発掘調査（第8次調査）で確認された第1号井戸址から15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器、播鉢などが出土している（井上・千葉前掲）。平成15年に行われた範囲確認調査でも土塁に沿う形で観音堂山地区の初期寺院の礎石を落とし込んだ溝跡が確認されており、カワラケや内耳土器などが出土していることから、観音堂山地区の初期寺院は少なくとも15世紀には寺院としての法灯を失い、長者山城跡の一角として機能していたことが推定されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。さらに平成17年に行われた市道常磐17号線改良工事に伴う発掘調査では、2区から拳大の円礫を集めた集石遺構が3基見つかり、17世紀前半の瀬戸・美濃産の陶器や波佐見産の磁器碗、17世紀後半の瀬戸・美濃産陶器大鉢、18世紀前半の肥前系磁器碗が出土している。また、4区で確認された現代のゴミ穴からは、近世～近代の製品とみられるカワラケとともに益子焼の土瓶や土人形（恵比寿）が出土しており（佐々木・川口・大橋・林・渥美 2006）、近世集落の成立が17世紀前半まで遡ることを間接的に示す資料が得られた。

また、南方地区からも平成16年に行われた範囲確認調査の際に、塔跡の基壇上およびその周辺から、多数の中・近世の土器類とともに五輪塔の部材、板碑片などが出土しており、基壇の南側には「咸平元寶」などの北宋銭や焼土・炭化物・骨粉を含む中世の火葬墓が集中して営まれている状況が確認されたことから、中・近世には塔跡が信仰の対象となっており、墓域としての土地利用が行われていたことが推察されている（川口・小松崎・新垣前掲）。

台渡里遺跡では、平成6年に実施された都市計画道路3・6・30号線敷設に伴う発掘調査（第8次調査）の際に厚手碗や銅銭・鉄銭を副葬した18世紀以降の近世墓が4基確認されている（井上・千葉前掲）。

以上のような周辺調査の成果から、台渡里遺跡の周辺では、15世紀後半～16世紀前半に長者山城に関わる土地利用が展開し、17世紀前半以降には近世集落が形成されていったと推定される。

(佐々木・林・川口)

4-2 文字資料について

本地点を舞台にした今回の調査では、墨書土器および墨痕を残す土器が6点、ヘラ書きが施された土器（ヘラ書き土器）が10点確認されている（註1）。

墨書土器および墨痕を残す土器は、須恵器坏1点(45)、須恵器高台付坏1点(41)、須恵器蓋2点(10、12)、土師器坏1点(29)、土師器高台付坏1点(48)から構成されている。同じくヘラ書き土器の内訳は、須恵器坏4点(46・47・55・60)、須恵器高台付坏4点(11・37・49・53)、須恵器蓋2点(35・43)である。37は5区東6号溝、41は5区東3号溝からの出土であるが、残りの文字資料は遺構外(3～6区)からの出土である。遺構内・遺構外出土例とも、調査区の東側に遍在する傾向がみられる。

坏のうち、29が体部外面である以外、すべて底部に施されている。蓋は43が天井部内面である以外、すべて外面に施されている。これらの文字資料は大半が遺構外からの出土資料であるが、遺構外では調査区東側(3～6区)からの出土が多く、遺構内では37が6号溝、41が3号溝から出土している。このうち釈文が判明したものは10・12・45・48の墨書土器と49のヘラ書き土器である。

須恵器蓋の10は天井部外面に時計回りに「□井□」と書かれている。1文字目は「按」か「校」にもみえるが、ひたちなか市原の寺瓦窯跡群第1次調査出土文字瓦の凹面に「枚井カ」、凸面に「嶋」とヘラ書きされた資料があることから、「枚」の可能性もある(水戸市教育委員会 川口武彦氏の御教示による)。また、3文字目は「村」の可能性が高いことから、「枚井村」(ひらいむら)と釈読できる(早稲田大学文学学術院 川尻秋生氏の御教示による)。「枚井村」と考えると、水戸市の北の那珂市に似た地名がある。また、ひたちなか市三反田にも小字で平井という地名が現在も残っていることから、地名と考えるのが妥当であろう。

12の須恵器蓋は天井部外面に「郡カ」と書かれている。細片のため、他の文字は不明である。45の須恵器坏の底部には「□(寺カ)仲」と記されている。当遺跡が含まれる台渡里遺跡群からは那賀郡の「那賀」を「仲」や「中」と記した墨書土器や文字瓦が出土しており、「仲寺」のように「仲」は通常先頭になることが多いが、墨書土器には先後逆に記す場合もあるので(群馬県埋蔵文化財調査事業団 高島英之氏の御教示による)、本資料は「仲寺」と読むべきであろう。

48の土師器高台付坏は底部に「郡厨」の文字が読める(註2)。このような「郡厨」を含めた「厨」銘を持つ墨書土器が出土した遺跡は、そのほとんどが官衙、もしくはそれに関連する遺跡であるとの指摘がある(松尾 1994)。

筆者が調べた限り、「郡厨」と記銘された墨書土器は、埼玉県狭山市宮地遺跡(第2次調査)、神奈川県平塚市天神前遺跡第8地点、福井県三方町鳥浜遺跡で各1点、千葉県匝瑳市平木遺跡で2点出土している(吉村 2002, 大河原 2008)。

「郡厨」の前に郡名を冠した墨書土器も茨城県鹿嶋市神野向遺跡から出土した「鹿島郡厨」銘が挙げられるのみである。これらの遺跡のうち、宮地遺跡は入間郡衙候補地の一つ、平木遺跡は厨家と想

定されている遺跡、天神前遺跡が相模国府の候補地の一つで、神野向遺跡は鹿島郡衙と考えられている。もちろん「厨」銘墨書土器の出土から官衙関連の遺跡と想定している例もあるだろうが、大半が上記のように官衙関連遺跡である。以上をふまえると、48も那賀郡衙と密接な関わりがある遺物であった可能性は否定できない。

平川南氏は、「厨」銘の墨書土器には厨家以外の場所と思われる地点からの出土例もあり、「厨」銘墨書土器の出土地点は、饗饌の場における廃棄場所またはそれらの饗饌を弁備する「厨施設」であること、「郡厨家」銘墨書土器は「郡家」等の官衙内外における行事や接客に対する饗饌のために「郡厨之饌」の意味において「郡厨」と記銘したこと、郡名標記は、郡域を越える饗饌のため必要とされたこと、などを論じられている（平川 2000）。従って、「厨」銘墨書土器の出土地点をもって直ちに出土地点を厨家施設と理解することは早計かもしれない。

ただし、前述したように当地点からは官衙で使用されることの多い高盤や円面硯も出土しており、郡厨家の供給活動の第一の場所は郡衙の郡庁・館・曹司・係丁らの居所などが考えられること（山中 2003）、当地点の周辺には那賀郡衙周辺寺院である台渡里廢寺跡觀音堂山地区や南方地区、郡衙正倉院である台渡里廢寺跡長者山地区も造営されていることから、近隣に官衙関連施設が存在する可能性は濃厚といえる。

49の須恵器高台付坏には「井」状のヘラ書きが施されている。窯記号としてよく見られるものであろう。

これらの墨書土器とヘラ書き土器の時期はすべて4期から5期の8世紀後半から9世紀代と考えられ、近隣に造営された那賀郡衙周辺寺院とみられる台渡里廢寺跡觀音堂山地区・南方地区や、那賀郡衙正倉院とみられる台渡里廢寺跡長者山地区が機能していた時期と符合する。

(林)

註

- (1) 本報告では、土器や瓦の焼成前の生乾きの段階で工具を用いて器面に記銘したものを「ヘラ書き」、焼成後に工具を用いて器面を削る形で記銘したものを「刻書」として区別する。
- (2) 「郡厨」のほかに「郡寺」とも釈読できるのではないかとの見解も頂戴している（群馬県埋蔵文化財調査事業団・高島英之氏、藤沢市教育委員会・荒井秀規氏の御教示による）。仮に「郡寺」と釈読できるのであれば、全国でも初めての出土文字資料となり、いわゆる「郡寺」という用語が文献史学・考古学が設定した学術用語ではなく、平安時代には歴史用語として使用されていたことになる。その当否については、今後、慎重に検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 井 博幸・小宮山達雄 1999 「第7章 内原町周辺の主要古墳と出土遺物」『牛伏4号墳の調査』国土舘大学・牛伏4号墳調査団
- 伊東重敏 1975 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷廃寺跡出土古瓦雑考』常陸考古学研究所
- 伊藤廉倫 1995 『茨城県水戸市 堀遺跡—住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
- 井上義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 井上義安・栗原芳子 1996 『水戸市台渡里廃寺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子・根本睦子 1998 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里遺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司・榎村宣行 1995 『水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市堀遺跡発掘調査会
- 茨城県 1995 『茨城県史 考古資料編 奈良・平安時代』
- 茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』
- 茨城県教育財団 2005 「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡を中心として—』茨城県考古学協会
- 茨城県立歴史館 1994 『学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城大学考古学研究会 1976 『茨城大学周辺遺跡分布調査報告書Ⅱ』
- 大川 清 1996 『古代のかわら』日本窯業史研究所
- 大河原竜一 2008 「霞ヶ関遺跡出土の『入厨』墨書土器について」『論叢 古代武蔵國入間郡家—多角的視点からの考察—』古代の入間を考える会
- 大森信英 1952a 「渡里村大字堀字西原四号地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 1952b 「渡里村大字堀字西原の地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 1952c 「渡里村大字渡里字アラヤ遺蹟予備調査に於ける報告」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 1974 「69 権現山下横穴群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県
- 大脇 潔 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『奈良国立文化財研究所学報第49冊 研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・松谷暁子 2006 『台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
- 榎村宣行 1993a 『(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡』財団法人 茨城県教育財団
- 1993b 「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』第2号 財団法人 茨城県教育財団
- 2005 「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡を中心として—』茨城県考古学協会
- 霞ヶ浦町郷土資料館 2000 『図録第22回特別展 古代の瓦 常陸国府の瓦づくり』霞ヶ浦町郷土資料館
- 川口武彦 2006 「範囲確認調査の成果」『国指定記念シンポジウム 台渡里廃寺跡を考える資料集』水戸市教育委員会・茨城県教育委員会
- 川口武彦 2007 「発掘された常陸国最古の初期寺院—国指定史跡台渡里廃寺跡—」『常総の歴史』35号 崙書房
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2005 『台渡里廃寺跡—範囲確認調査報告書—』水戸市教育委員会
- 川口武彦・関口慶久・新垣清貴・渥美賢吾・木本孝周 2007 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川崎純徳 1982 『茨城の装飾古墳』新風土記社
- 瓦吹 堅 1988 「常陸の古印」『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会
- 瓦吹 堅 1991 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅲ—観音堂山・南方・長者山地区の性格について—」『婆良岐考古』13 婆良岐考古同人会
- 木本雅康 2008 『遺跡からみた古代の駅家』山川出版社
- 黒澤彰哉 1998 「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』25 茨城県立歴史館
- 黒澤彰哉 2000 「台渡里廃寺と那賀郡衙」『文字瓦と考古学』国土舘大学実行委員会
- 小林信一 2006 「Ⅲ 下総地域の官衙関連遺物について」『研究紀要』25 財団法人千葉県教育振興財団

- 佐々木藤雄・川口武彦・大橋 生 2006 『台渡里廃寺跡―市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2) ー』水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・川口武彦・関口慶久 2007 『アラヤ遺跡 (第 2 地点) ー市道常磐 10 号線道路改良公に伴う埋蔵文化財発掘・調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 高井悌三郎 1964 『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 蓼沼香未由・川口武彦・小松崎博一編 2004 『台渡里廃寺跡 ー集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 外山泰久 1993 「アラヤ前遺構 (水戸市渡里町) をめぐって」『常総の歴史』13 崙書房
- 中山信名 1967 『新編常陸国誌』宮崎報恩会復刊本
- 生田目和利・稲田健一 2002 「茨城県」『第 51 回 埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～ 資料集』埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会
- 橋本勝雄 1995 「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』7 茨城県考古学協会
- 2002 「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点 ーその現状と課題ー』茨城県考古学協会、茨城旧石器シンポジウム実行委員会、ひたちなか市教育委員会
- 土生朗治・川口武彦・新垣清貴 2005 『台渡里廃寺跡 ー市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 平川 南 2000 「第三章 墨書土器と古代の役所 ー「厨」墨書土器論」『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 藤村達巳・塩谷 修 1982 「第 2 章 調査報告 (1) 古墳群の立地と環境」『常陸安戸星古墳』水戸市教育委員会
- 松尾昌彦 1994 「『厨』銘墨書土器考ー松戸市坂花遺跡出土例をめぐってー」『松戸市立博物館紀要』第 1 号 松戸市立博物館
- 水戸市教育委員会 2007 『平成 18 年度茨城県指定史跡台渡里廃寺跡長者山地区 ー範囲確認調査現地説明会資料ー』
- 水戸市史編纂委員会 1963 『水戸市史』上巻 水戸市
- 山中敏史 2003 「郡衙による食器管理と供給」『古代官衙・集落と墨書土器ー墨書土器の機能と性格をめぐってー』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 吉村武彦 2002 『平成 11 ～ 13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 B2) 研究成果報告書 古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究 附属 CD-ROM 出土文字資料データベースー墨書土器・刻書土器編ー』(研究代表者 吉村武彦)
- 渡辺俊夫 1981 「第 5 章 砂川遺跡」『(茨城県教育財団文化財調査報告第 X VI) 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 4 宮部遺跡・鹿の子 A 遺跡 砂川遺跡』財団法人茨城県教育財団

写 真 图 版



1区全景 (西より)



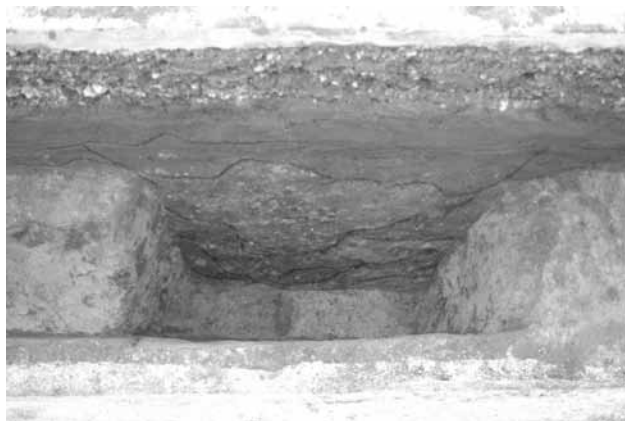
1区5・8号住居跡 (東より)



1区6号住居跡 (東より)



1区1号掘立柱建物跡 (東より)



1区1号掘立柱建物跡柱穴1 (北より)



1区1号掘立柱建物跡柱穴3 (北より)



1区2号井戸 (南より)



1区3号井戸 (北より)

図版 2



2区調査区全景（西より）



2区1号井戸（西より）



3区西側全景（西より）



3区西側8号溝（北より）



3区東側全景（西より）



3区東側3号住居跡（東より）



3区東側3号住居跡遺物出土状況（東より）



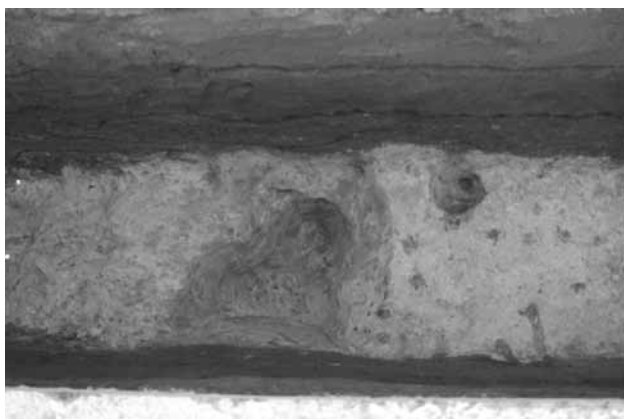
3区東側3・4号住居跡（北西より）



4区全景（東より）



4区2号住居跡（東より）



4区10号土坑, 19号ピット（北より）



5区西側全景（東より）



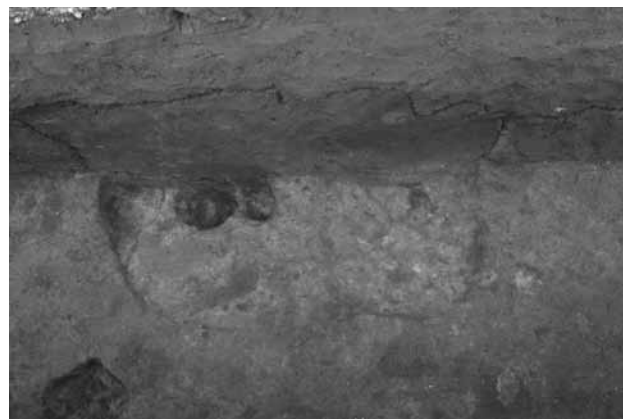
5区西側基本土層断面（南より）



5区西側1号住居跡, 7号溝（東より）



5区西側1号住居跡遺物出土状況（東より）



5区西側1号土坑（南より）

図版 4



5区西側2号土坑（南より）



5区東側全景（東より）



5区東側5号溝（東より）



5区東側須恵器高坏出土状況（北より）



5区東側墨書土器出土状況（西より）



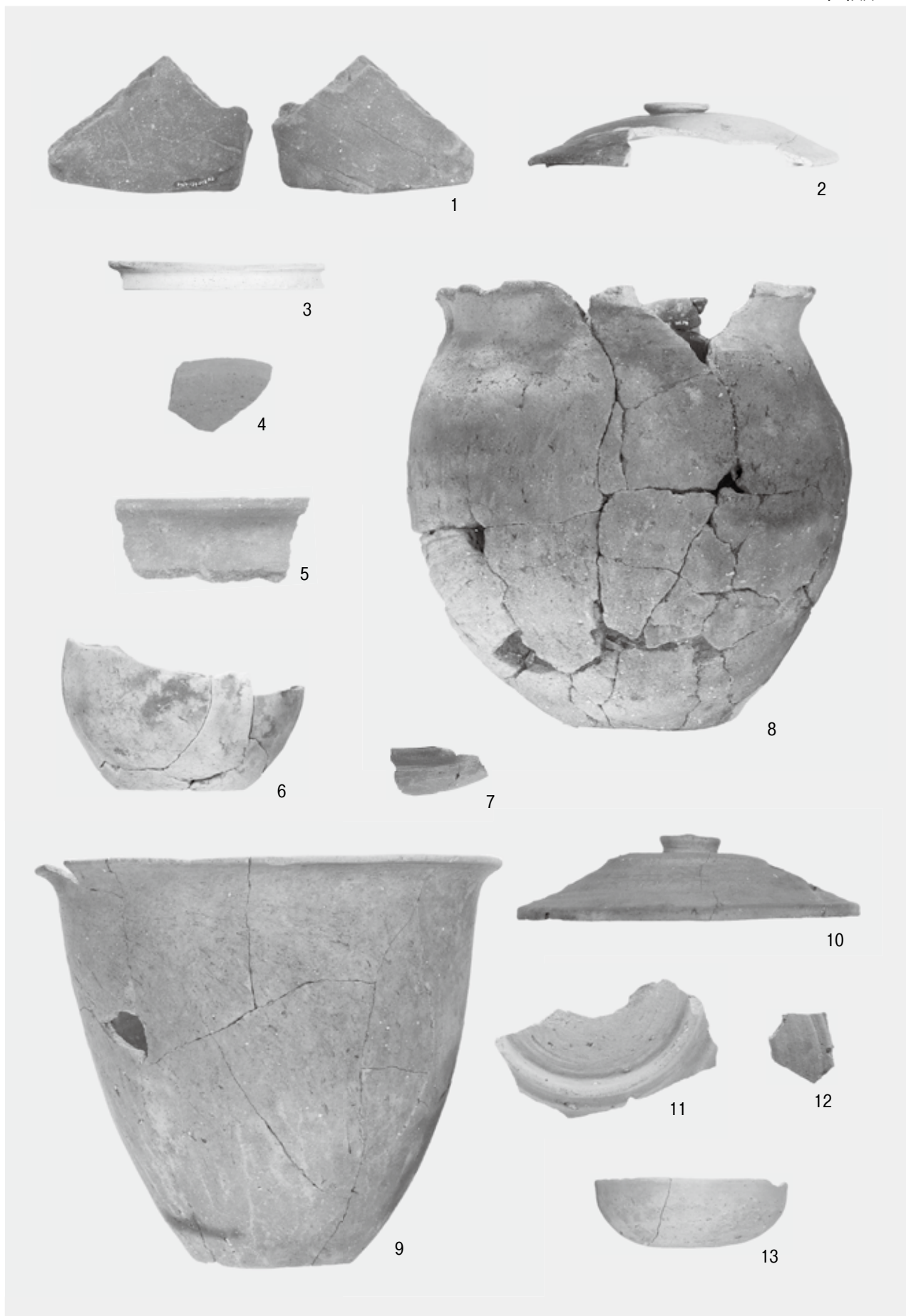
6区全景（西より）



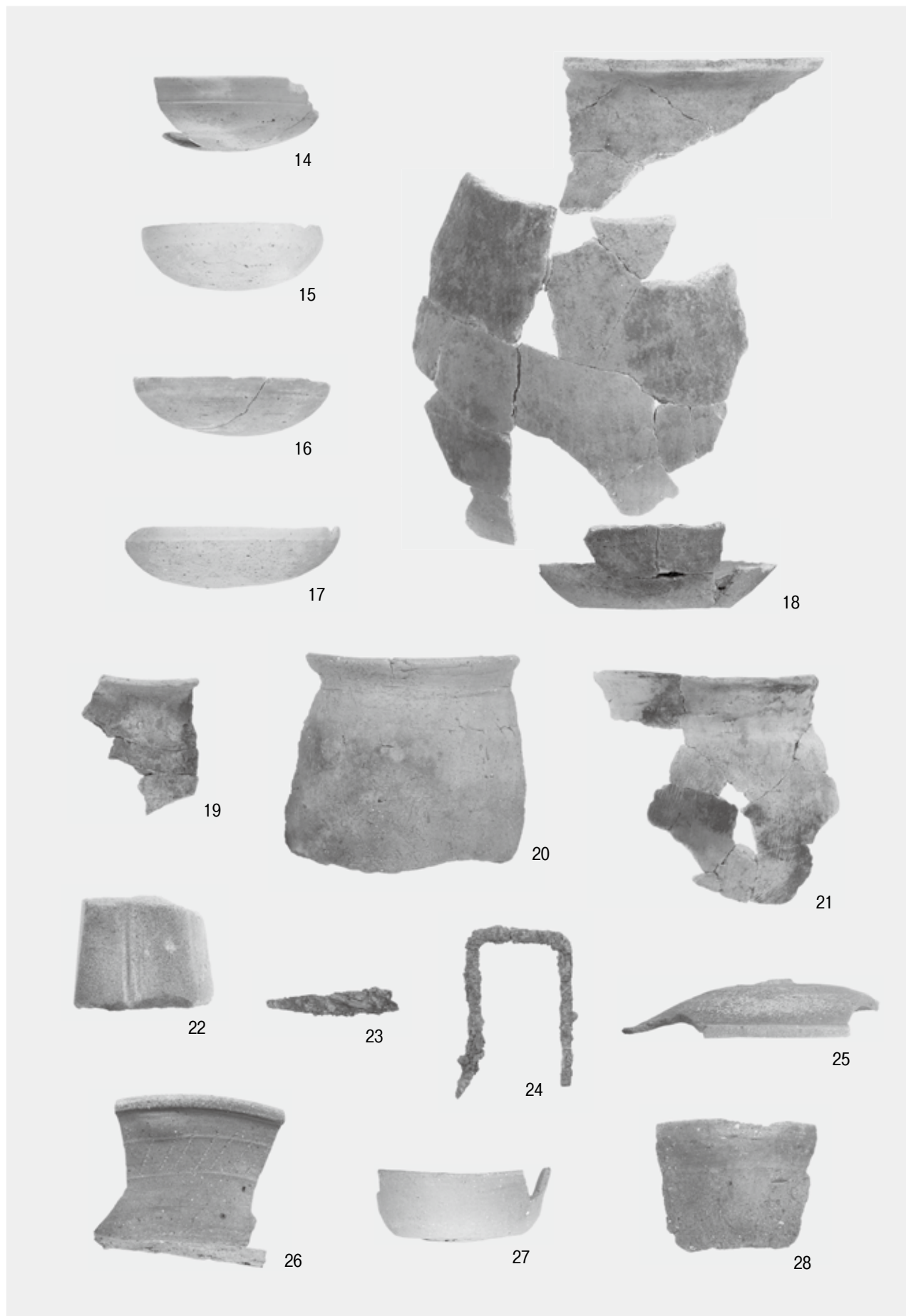
6区3号溝（北より）



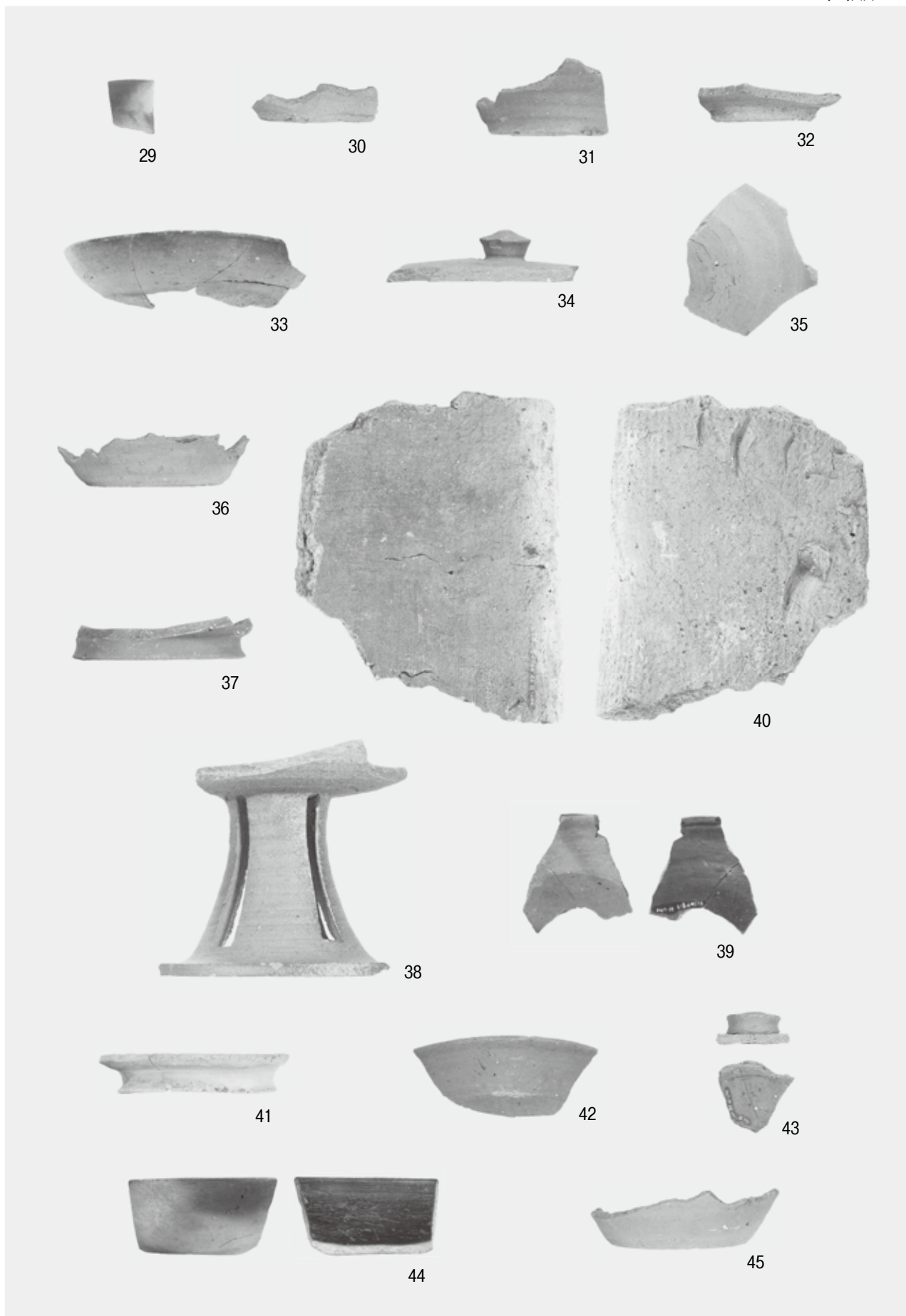
5区作業風景



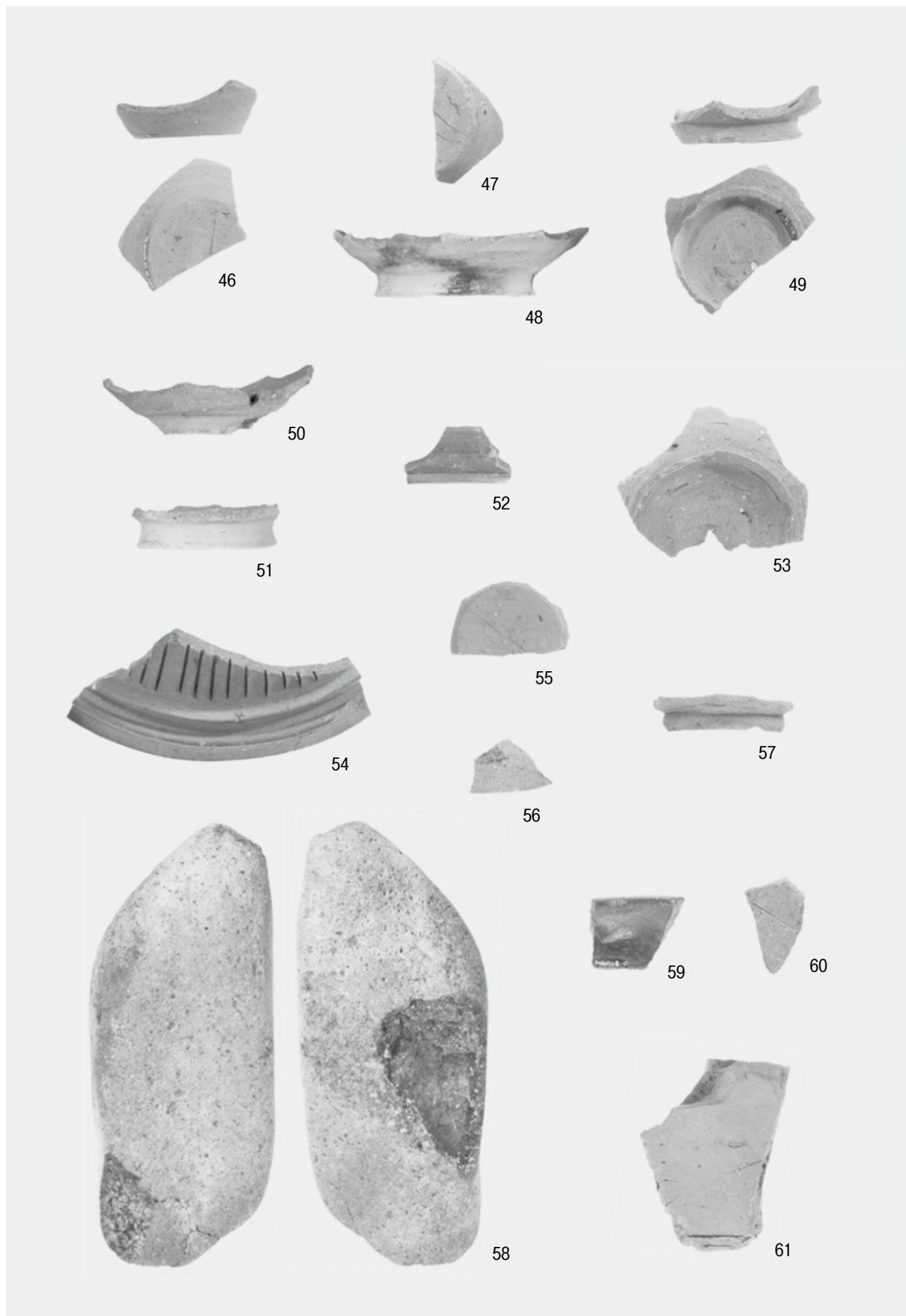
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	だいわたりいせき (だいさんじゅうきゅうじちようさ)							
書名	台渡里遺跡 (第39次調査)							
副書名	公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第15集							
編集者名	佐々木藤雄・林 邦雄							
著者名	佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦・関口慶久							
編集機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111							
発行年月日	2008 (平成20) 年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。' "	。' "			
だいわたりいせき 台渡里遺跡	みとしわたりちよう 水戸市渡里町字前原 2812-1地先～字宿 屋敷3011地先(市道 常磐222号線)			36° 24' 29"	140° 26' 10"	2007.11.21 ～ 2008.1.18	157.2 m ²	公共下水道渡里処理 分区枝線(1-5工区) 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
台渡里遺跡	官衙跡 集落跡	縄文	なし		土器, 石器		1・3～5区で検出された7軒の古墳時代の住居跡の多くは軸方向を北西に傾けており, 他の例からみて7世紀の後半, 初期寺院や那珂郡衙造宮以前の集落に属するものであった可能性が高い。1区検出の8世紀前葉～中葉の1号掘立柱建物跡のうち, 深さ1.6～1.8mにも及ぶ3・4号柱穴は版築工法による布掘り基礎の建物跡とみられるものであり, 那賀郡衙に伴う正倉が本地域まで展開していた可能性を示している。また, 5区で確認された5・6・7号の並行する3条の溝は, ほぼ同時期(8世紀後葉～9世紀前葉)に営まれたと思われる比較的大型の溝であり, 官衙施設を圍繞する溝であったと考えられる。多数出土した墨書土器のうち, 9世紀後葉に位置づけられる「郡厨」と釈読できるものも官衙との密接な関連が指摘される資料であり, この時期まで官衙施設が機能していた可能性が高い。	
		弥生	なし		土器			
		古墳	竪穴住居跡7, 溝1, 土坑2		須恵器, 土師器, 砥石, 金属製品			
		奈良・平安	掘立柱建物跡1～2, 溝4, 井戸跡1, 土坑1		土師器, 須恵器, 墨書土器, ヘラ書き土器, 瓦			
		中世・近世	溝1, 井戸跡2, 土坑1, ピット群		陶磁器, 在地系土器, 瓦質土器, 砥石			

※北緯・東経は測地系2000対応。Web版TKY2JD (Ver.1.3.79) による変換。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。 例) ミ276-39 SD1のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳, 図面台帳, 写真台帳があり, 検索が可能に作成している。合計1冊(綴り)
遺物保管方法	・出土遺物は, 報告書使用と未使用に分け, 遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお, 未使用分については種別毎に分類, 収納してある。

水戸市埋蔵文化財調査報告

- | | | |
|------|---|-----------|
| 第1集 | 台渡里廃寺跡 —範囲確認調査報告書— | 2005年3月発行 |
| 第2集 | 台渡里廃寺跡
—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)— | 2005年4月発行 |
| 第3集 | 大鋸町遺跡
—グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2005年8月発行 |
| 第4集 | 台渡里廃寺跡
—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)— | 2006年3月発行 |
| 第5集 | 台渡里遺跡 —集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2005年3月発行 |
| 第6集 | 吉田古墳Ⅰ
—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第3次調査報告書— | 2006年3月発行 |
| 第7集 | 大鋸町遺跡(第3地点)
—市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2006年3月発行 |
| 第8集 | 坏遺跡(第3地点)
—ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2007年3月発行 |
| 第9集 | 坏遺跡(第4地点)
—プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2007年3月発行 |
| 第10集 | 吉田古墳Ⅱ
—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書— | 2007年3月発行 |
| 第11集 | 平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書 | 2007年3月発行 |
| 第12集 | アラヤ遺跡(第2地点)
—市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2007年3月発行 |
| 第13集 | 米沢町遺跡(第5地点)
—住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2007年3月発行 |
| 第14集 | 大串遺跡(第7地点)
—介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2008年3月発行 |
| 第15集 | 台渡里遺跡(第39次調査)
—公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— | 2008年3月発行 |

水戸市埋蔵文化財調査報告第15集

台渡里遺跡

(第39次調査)

—公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成20年3月26日

発行 平成20年3月26日

編集 株式会社東京航業研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 関東図書株式会社

〒336-0021

埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

TEL 048-862-2901